

# 久宝寺遺跡第29次発掘調査報告書

－大阪龍華都市拠点地区龍華東西線4工区に伴う－

2003年

財団法人 八尾市文化財調査研究会

# はしがき

今回報告書を刊行するに至った久宝寺遺跡は、大阪府八尾市南西部の久宝寺、西久宝寺、南久宝寺、北久宝寺、亀井、北亀井、渋川を中心に広がる縄文時代後期～近世の複合遺跡であります。

この久宝寺遺跡の南部では遺跡を横断するかたちで「旧国鉄竜華操車場跡」が占地しています。「旧国鉄竜華操車場」は、渋川・亀井に位置し、24.6haにおよぶ広大な敷地で、昭和13年に造られ、戦前・戦後の近畿圏の物流・経済を支える一大拠点としてその役割を担ってきました。ところが、高度経済成長の後半期には、高速道路網の整備・拡大や一般道の整備が進むなかでトラック輸送への急速な変換が進行し、鉄道輸送の役割が低下し衰退への道を辿りました。更に、国鉄の民営化に伴う多大な債務返還のための所有地売却処置のなかで、国鉄が民営化される昭和61年に先立つ昭和59年に廃止され、その歴史に幕を閉じることとなりました。

同跡地については、昭和61年7月に八尾市から「竜華操車場跡地の基本構想」が発表され再開発が具体化したこと、昭和63年と平成8年に八尾市教育委員会、平成7年に(財)大阪府文化財調査研究センター(現 大阪府文化財センター)により遺跡確認調査が実施されています。

これらの遺跡確認調査を経て平成9年以降は、道路部分を中心とした基盤整備ならびに主要建物を対象とした発掘調査が当調査研究会と(財)大阪府文化財センターによって継続的に実施されており、縄文時代晚期～近代に至る遺構・遺物が検出される等の多大な調査成果が得られています。

今回、平成11～12年度に実施しました大阪竜華都市拠点地区竜華東西線4工区に伴う久宝寺遺跡第29次調査の整理が完了しましたので、報告書として刊行する運びとなりました。

本書が地域の歴史を解明していく資料としてはもとより、埋蔵文化財の保護・普及のため広く活用されることを願ってやみません。

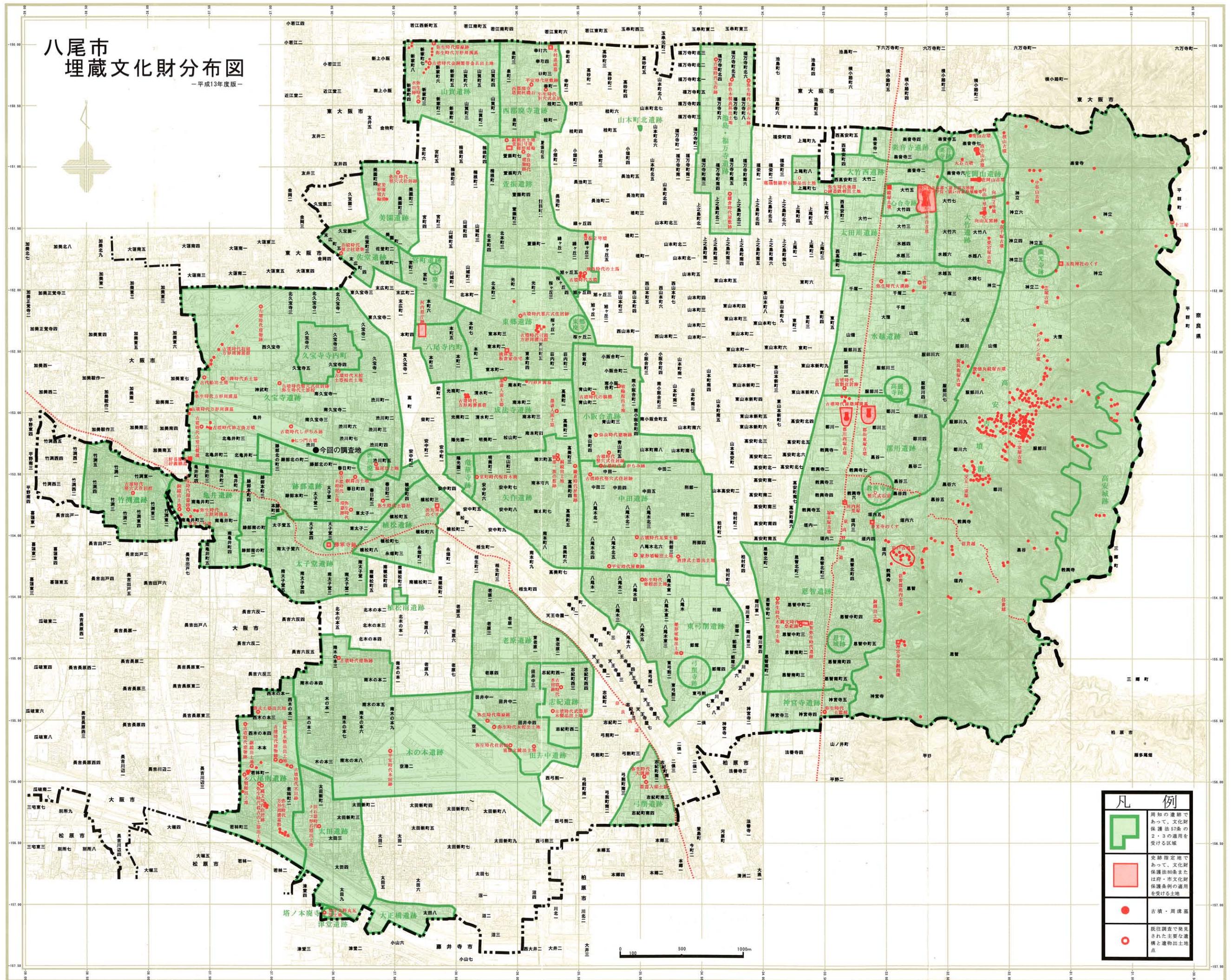
最後になりましたが、一連の発掘調査に対して御協力いただきました関係諸機関の皆様に深謝すると共に、発掘調査や整理作業に専念された多くの方々に心から厚く御礼申し上げます。

平成15年2月

財団法人 八尾市文化財調査研究会  
理事長 木山丈司

# 八尾市埋蔵文化財分布図

一平成13年度版一



# 例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市大字亀井他で計画された大阪竜華都市拠点地区内で平成11～12年度に実施した竜華東西線4工区に伴う発掘調査報告書である。
1. 本書で報告する久宝寺遺跡第29次調査(KH99-29-1～KH99-29-4)の発掘調査の業務は、八尾市教育委員会の指示書(八教社文第74号 平成9年7月31日)に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が住宅・都市整備公団関西支社(現、都市基盤整備公団関西支社)から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成11年9月1日～平成12年11月30日にかけて坪田真一・岡田清一・道 斎・小川裕子(現、大和高田市教育委員会)が担当した。調査面積は4910m<sup>2</sup>である。現地調査においては、伊藤静江・板野行伸・稻本美穂・岩沢玲子・奥村 崇・垣内洋平・加藤邦枝・川村一吉・北原清子・藏崎潤子・小林範彰・後藤 喬・曹 龍・竹田貴子・田島宣子・富永雅子・永井律子・中村百合・村井俊子・村田知子・山内千恵子・吉川一栄・李 聖子・若林久美子が参加した。
1. 整理業務は、平成13年5月1日～平成15年2月28日に実施した。
1. 本書作成に関わる業務は、遺物実測－伊藤・岩沢・小川・加藤・北原・田島・永井・中村・村井・村田・山内・吉川・若林、図面トレース－北原・村井・山内、図面レイアウト－原田・坪田、遺物写真－垣内・原田が行った。
1. 本書の執筆は、調査終了報告書および調査担当者との検討を基にして原田昌則が行い、第3章第2節は坪田、第5章第2節は道が担当した。
1. 現地調査の実施および整理業務においては、以下の方々からの協力とご指導を受けた。  
福岡澄男・赤木克視・西村 歩・酒井泰子((財)大阪府文化財調査研究センター)、松田順一郎((財)東大阪市文化財協会)、松尾信裕・高橋 工・寺井 誠・小田木富慈美((財)大阪市文化財協会)、都市基盤整備公団関西支社、富士測量(株)、大旺建設(株)、(株)島田組、(順不同・敬称略、所属は調査時点)  
なお、木簡の解読および自然科学分析については、下記の個人ならびに諸機関に委託した。  
【木簡の解読】栄原永遠男(大阪市立大学)、小谷利明(八尾市立歴史民俗資料館)、竹本晃(河内長野市立郷土資料館嘱託)  
【木簡の樹種同定・保存処理】吉村佐紀恵((財)元興寺文化財研究所保存科学センター)  
【微細遺物・土壤理化学・脂肪酸分析】辻本裕也(パリノ・サーヴェイ(株))  
【木製品の樹種同定】辻本裕也(パリノ・サーヴェイ(株))  
【花粉分析】水谷陸彦(総合科学株式会社)、
1. 調査に際しては、写真・実測図等の記録とともに、カラースライドを作成している。広く活用されることを希望する。

# 凡　例

1. 本書掲載の地図は、大阪府八尾市発行の1/2500の地形図(昭和61年測量・平成6年修正・平成8年7月編纂)・八尾市教育委員会発行の『八尾市埋蔵文化財分布図』(平成13年度版)・国土地理院地形図「大阪東南部(1/25000)」(平成10年3月1日)を使用した。
1. 本書で用いた標高の基準はT.P.(東京湾標準潮位)である。
1. 本書で用いた方位は、国土座標第VI系の座標北を示す。
1. 土色は、小山正忠・竹原秀雄編1997年後期版『新版 標準土色帖』農林水産省農林水産技術会議事務局 監修・財団法人日本色彩研究所 色票監修に準拠した。
1. 遺構は下記の略号で示した。  
井戸—S E 土坑—S K 溝—S D 小穴・柱穴—S P 落ち込み—S O 自然河川—N R
1. 遺構図面の縮尺は、平面全図1/300、断面全図横1/300・縦1/40に統一した。部分図面の縮尺には1/20・1/40・1/50・1/80がある。
1. 遺物図面の縮尺は、1/4を基本とするが一部1/6・1/8・1/10がある。遺物の断面については、弥生土器・土師器・黒色土器・瓦器・土製品は白、須恵器・陶磁器は黒、灰釉陶器は細かい水玉、屋瓦・石器・木製品は斜線を用いた。なお、黒色土器の煤付着範囲については粗い水玉を使用した。
1. 遺構番号は1調査区から順に通し番号を付けた。
1. 本書で記述した古墳時代初頭～前期の時期概念と土器形式の関係は、古墳時代初頭前半・後半(庄内式－古相・新相)、古墳時代前期前半～後半(布留式－古相～新相)に区別した。当該期の土器形式分類および土器編年は(財)八尾市文化財調査研究会報告37(1993)に従った。
1. 本書で記述した古墳時代中期～飛鳥時代の時期概念と須恵器型式との関係は以下のとおりである。但し、提示した全ての須恵器型式が出土したわけではない。
  - ・古墳時代中期(5世紀)  
前半—T G 232・O N 231・T K 73・T K 85・T K 216(初期須恵器)  
中葉—O N 46・T K 208  
後半—T K 23・T K 47
  - ・古墳時代後期(6世紀)  
前半—M T 15  
中葉—T K 10  
後半—M T 85・T K 43
  - ・飛鳥時代(7世紀)  
前半—T K 209  
中葉—T K 217  
後半—T K 46・T K 48
1. 土器の形式・編年および検出遺構で参考とした文献については、P 206・207に提示した。

# 本文目次

## はしがき

八尾市埋蔵文化財分布図

## 例言

## 凡例

第1章 調査に至る経過	1
第2章 地理・歴史的環境	2
第3章 調査概要	12
第1節 調査の方法と経過	12
第2節 基本層序	(坪田) 15
第3節 検出遺構と出土遺物	25
1) 各調査区の概要	25
2) 遺構に伴わない遺物	197
第4章 自然科学的分析	209
第1節 久宝寺遺跡第29次調査4調査区(KH99-29-4)に伴う花粉分析 水谷陸彦	209
1. 調査概要	209
2. 分析方法	211
3. 分析結果	211
4. 古植生・古気候	212
5. 他の分析結果との比較	220
6. まとめ	225
7. 文献	225
第2節 久宝寺遺跡第29次調査2調査区検出の埋甕6001の自然科学分析 パリノ・サーヴェイ	229
1. はじめに	229
2. 試料	229
3. 分析方法	230
4. 結果	231
5. 考察	233
6. 結び	234
第5章 遺構・遺物の検討	237
第1節 中・南河内地域における弥生時代後期後半～古墳時代初頭前半(庄内式古相)の土器の細分試案について	(原田) 237
第2節 河内の弥生時代後期土器に現れる2・3の現象 -溝へ廃棄された土器が語るもの-	(酒) 287
第6章 まとめ	297

## 挿 図 目 次

第1図	久宝寺遺跡周辺の遺跡分布図	3
第2図	調査地周辺の発掘調査位置図	9
第3図	調査地地区割り模式図	13
第4図	調査区設定図	14
第5図	1調査区基本層序	17・18
第6図	2調査区基本層序	19・20
第7図	3調査区基本層序	21・22
第8図	4調査区基本層序	23・24
第9図	1・2調査区 第1面検出遺構平面図	27・28
第10図	3・4調査区 第1面検出遺構平面図	29・30
第11図	S E 1008平断面図	31
第12図	S E 1011平断面図	33
第13図	S D 1094出土遺物実測図	39
第14図	S D 1111出土遺物実測図	39
第15図	S E 2001出土遺物実測図	51
第16図	S E 2001平断面図	52
第17図	1・2調査区 第2面検出遺構平面図	53・54
第18図	3・4調査区 第2面検出遺構平面図	55・56
第19図	S E 2002平断面図	57
第20図	S E 2003平断面図	58
第21図	S E 2003出土遺物実測図	59
第22図	S E 2004平断面図	60
第23図	S K 2001平断面図	61
第24図	S K 2014平断面図	62
第25図	S K 2015平断面図	63
第26図	S K 2019出土遺物実測図	63
第27図	S D 2021、S D 2022、S D 2024出土遺物実測図	64
第28図	S D 2062、S D 2064出土遺物実測図	65
第29図	S D 2065出土遺物実測図	66
第30図	S D 2075出土遺物実測図	68
第31図	S D 2084西壁断面図	69
第32図	S D 2084出土遺物実測図	70
第33図	3調査区西部 第2面検出遺構平断面図	71
第34図	S D 2206出土遺物実測図	75
第35図	S D 2207出土遺物実測図	76

第36図	S D2285出土遺物実測図	79
第37図	S P2014出土遺物実測図	79
第38図	N R2001出土遺物実測図	81
第39図	S B3001平断面図	82
第40図	1・3・4調査区 第3面検出遺構平面図	83・84
第41図	S E3002平断面図	85
第42図	S E3003平断面図	86
第43図	S E3003出土遺物実測図-1	87
第44図	S E3003出土遺物実測図-2	88
第45図	S E3003出土遺物実測図-3	88
第46図	S E3003出土遺物実測図-4	88
第47図	S E3003井戸側実測図-1	89
第48図	S E3003井戸側実測図-2	90
第49図	S E3003井戸側実測図-3	91
第50図	S E3003井戸側木取り模式図	91
第51図	S K3004平断面図	92
第52図	S K3020平断面図	92
第53図	S K3008出土遺物実測図	93
第54図	S K3020出土遺物実測図	93
第55図	S D3051断面図	95
第56図	S D3051出土遺物実測図	95
第57図	S D3052出土遺物実測図	96
第58図	S D3053、S D3054断面図	97
第59図	S D3053出土遺物実測図	97
第60図	S D3054出土遺物実測図	98
第61図	S D3059出土遺物実測図	99
第62図	S D3060出土遺物実測図	99
第63図	S D3064出土遺物実測図	100
第64図	S P3001出土遺物実測図	101
第65図	N R3001断面図	102
第66図	N R3001出土遺物実測図	103
第67図	N R3002、N R3003、S D3052断面図	103
第68図	N R3002出土遺物実測図	104
第69図	N R3002、N R3003出土遺物実測図	105
第70図	N R3003出土遺物実測図	106
第71図	S E4001平断面図	108
第72図	1・2調査区 第4面検出遺構平面図	109・110
第73図	3・4調査区 第4面検出遺構平面図	111・112

第 74図	S E4001出土船材転用井戸側－1	114
第 75図	S E4001出土船材転用井戸側－2	115
第 76図	S E4001出土船材転用井戸側－3	116
第 77図	S E4001出土船材転用井戸側－4・5	117
第 78図	S E4002平断面図	118
第 79図	S K4032出土遺物実測図	121
第 80図	S K4033出土遺物実測図	121
第 81図	S K4032平断面図	121
第 82図	S K4033平断面図	121
第 83図	S K4037出土遺物実測図	122
第 84図	S K4038出土遺物実測図	122
第 85図	S K4034～S K4036、S K4038平断面図	123
第 86図	S K4039出土遺物実測図	124
第 87図	S K4039平断面図	124
第 88図	S K4040平断面図	125
第 89図	S K4040出土遺物実測図	125
第 90図	S K4041出土遺物実測図	126
第 91図	S K4043出土遺物実測図	126
第 92図	S K4044出土遺物実測図	126
第 93図	S K4041～S K4044平断面図	127
第 94図	S D4017出土遺物実測図	128
第 95図	S D4037、S D4039断面図	131
第 96図	S D4043北部平断面図	132
第 97図	S D4044、S D6004断面図	132
第 98図	S D4043出土遺物実測図－1	133
第 99図	S D4043出土遺物実測図－2	133
第100図	S D4045出土遺物実測図	134
第101図	N R4001出土遺物実測図	137
第102図	1～4 調査区 第5面検出遺構平面図	139・140
第103図	2～4 調査区 第5面水田遺構平断面図	141・142
第104図	S D5001北壁断面図	147
第105図	S D5002出土遺物実測図	148
第106図	S K6001～S K6003断面図	149
第107図	2～4 調査区 第6面検出遺構平面図	151・152
第108図	S D6002、S D6003、S D6006、S D6007断面図	153
第109図	S W6001～S W6006平面図	155・156
第110図	S D6005東肩断割り南壁断面図	157
第111図	有稜高杯Aの法量分布	158

第112図	S W6001出土遺物実測図－1	161
第113図	S W6001出土遺物実測図－2	162
第114図	S W6001出土遺物実測図－3	163
第115図	S W6001出土遺物位置図	164
第116図	S W6001出土遺物実測図－4	165
第117図	S W6002出土遺物実測図－1	166
第118図	S W6002出土遺物実測図－2	167
第119図	S W6002出土遺物位置図	169
第120図	S W6003出土遺物実測図－1	172
第121図	S W6003出土遺物実測図－2	173
第122図	S W6003出土遺物実測図－3	174
第123図	S W6003出土遺物位置図	175
第124図	S W6004出土遺物実測図	176
第125図	S W6004出土遺物位置図	177
第126図	S W6005出土遺物実測図－1	180
第127図	S W6005出土遺物実測図－2	181
第128図	S W6005出土遺物実測図－3	182
第129図	S W6005出土遺物実測図－4	183
第130図	S W6005出土遺物実測図－5	184
第131図	S W6005出土遺物位置図	185・186
第132図	S W6006出土遺物実測図	187
第133図	S W6006出土遺物位置図	188
第134図	畦畔状遺構6001・6002断面図	191
第135図	畦畔状遺構6002出土遺物実測図	192
第136図	畦畔状遺構6003出土遺物実測図	192
第137図	畦畔状遺構6003断面図	192
第138図	畦畔状遺構6004・6005出土遺物実測図	193
第139図	畦畔状遺構6004・6005平面図	194
第140図	畦畔状遺構6001平面図および埋甕6001断面図	195
第141図	埋甕6001実測図	196
第142図	第Ⅱ層出土遺物実測図	198
第143図	第Ⅲ層出土遺物実測図	199
第144図	第Ⅳ層出土遺物実測図	201
第145図	第Ⅴ層出土遺物実測図	203
第146図	第Ⅵ層出土遺物実測図	204
第147図	第Ⅶ層出土遺物実測図	205

## 写 真 目 次

写真 1	旧国鉄竜華操車場跡地	1
写真 2	S E 1003・S K 1008検出状況	26
写真 3	S E 1005検出状況	26
写真 4	S E 1006検出状況	26
写真 5	S E 1008検出状況	32
写真 6	S E 1008細部	32
写真 7	S E 1010検出状況	32
写真 8	S K 1010検出状況	35
写真 9	S K 1013検出状況	35
写真10	島畠1001上部で検出された溝群	36
写真11	1 調査区東部溝群検出状況	37
写真12	3 調査区西部溝群検出状況	40
写真13	3 調査区東部溝群検出状況	42
写真14	4 調査区西部溝群検出状況	43
写真15	4 調査区中央部から東部溝群検出状況	44
写真16	1 調査区島畠1001検出状況	46
写真17	1 調査区島畠1002検出状況	47
写真18	3 調査区島畠1003検出状況	47
写真19	3 調査区島畠1004～島畠1006検出状況	47
写真20	4 調査区西部遺構検出状況	48
写真21	1 調査区中西部遺構検出状況	49
写真22	3 調査区水田1005、水田1006検出状況	49
写真23	4 調査区水田1009検出状況	50
写真24	1 調査区畦畔1001検出状況	50
写真25	2 調査区畦畔1002検出状況	51
写真26	1 調査区西部溝検出状況	67
写真27	1 調査区中央部溝検出状況	67
写真28	3 調査区西部溝群検出状況	70
写真29	3 調査区 S D 2175～S D 2187検出状況	74
写真30	3 調査区東部溝群検出状況	75
写真31	4 調査区西部溝群検出状況	77
写真32	4 調査区東部溝群検出状況	79
写真33	1 調査区西部溝群検出状況	93
写真34	墨書木簡（180）出土状況	105
写真35	1 調査区中央部 S K 4009～S K 4012検出状況	119

写真36	1 調査区中南部溝群検出状況	129
写真37	4 調査区 N R 4001検出状況	136
写真38	2 調査区西部水田検出状況	138
写真39	3 調査区東部水田検出状況	144
写真40	2 調査区道路状遺構5001および東部水田西部検出状況	148

## 表 目 次

第1表	調査地周辺の発掘調査一覧表	10・11
第2表	各調査区一覧	12
第3表	1 調査区 S D1001～S D1018法量表	36
第4表	1 調査区 S D1019～S D1033法量表	36・37
第5表	1・2 調査区 S D1036～S D1089法量表	37・38
第6表	2・3 調査区 S D1090～S D1139法量表	39・40
第7表	3 調査区 S D1140～S D1143法量表	40
第8表	3 調査区 S D1144～S D1152法量表	41
第9表	3 調査区 S D1153～S D1163法量表	41
第10表	3 調査区 S D1164～S D1171法量表	42
第11表	3・4 調査区 S D1172～S D1188法量表	42
第12表	4 調査区 S D1189～S D1191法量表	43
第13表	4 調査区 S D1192～S D1198法量表	43
第14表	4 調査区 S D1199～S D1203法量表	43
第15表	4 調査区 S D1204～S D1211法量表	44
第16表	4 調査区 S D1212～S D1249法量表	44・45
第17表	2 調査区 S P1002～S P1022法量表	46
第18表	1・2 調査区 S D2001～S D2063法量表	66・67
第19表	3 調査区 S D2085～S D2168法量表	72・73
第20表	3 調査区 S D2169～S D2174法量表	74
第21表	3 調査区 S D2175～S D2187法量表	74
第22表	3 調査区 S D2188～S D2197法量表	75
第23表	3・4 調査区 S D2198～S D2221法量表	76・77
第24表	3・4 調査区 S D2222～S D2259法量表	77・78
第25表	4 調査区 S D2260～S D2284法量表	78
第26表	1 調査区 S P2001～S P2027法量表	79・80
第27表	2 調査区 S P2028～S P2032法量表	80
第28表	3 調査区 S P2033～S P2048法量表	80・81

第29表	3 調査区 S P 2049～S P 2051法量表	81
第30表	1 調査区 S D 3001～S D 3049法量表	94
第31表	1・4 調査区 S P 3001～S P 3048法量表	101・102
第32表	2 調査区 S K 4020～S K 4031法量表	120
第33表	1・2 調査区 S D 4002～S D 4006、S D 4008～S D 4014、S D 4016、S D 4018～S D 4022法量表	129
第34表	2 調査区 S D 4024～S D 4035法量表	130
第35表	1 調査区 S P 4001～S P 4012法量表	135
第36表	2 調査区 S P 4013～S P 4025法量表	135
第37表	2 調査区 S P 4026～S P 4028法量表	136
第38表	3 調査区 S P 4029～S P 4032法量表	136
第39表	2 調査区 西部水田 水田法量表	143
第40表	2 調査区 西部水田 畦畔法量表	143
第41表	2～4 調査区 東部水田 水田法量表	144・146
第42表	2～4 調査区 東部水田 畦畔法量表	146・147
第43表	S W 6001～S W 6006出土遺物器種別数量表	189
第44表	S W 6001～S W 6006出土遺物器種別比率表	190
第45表	S W 6001～S W 6006出土甕形土器口縁端部形態累計表	190

## 図 版 目 次

図版一	調査地からの遠景	29-4 調査区 西部遺構検出状況
	調査地からの遠景	図版一〇 29-1 調査区 S E 2001検出状況
図版二	調査地を含む旧国鉄竜華操車場跡地全景	29-1 調査区 S E 2004検出状況
図版三	29-1 調査区 全景	図版一一 29-1 調査区 S E 2003上部
	29-2 調査区 全景	同 上 S E 2003下部
図版四	29-2 調査区 東部遺構検出状況	図版一二 29-1 調査区 S K 2001検出状況
	29-2 調査区 西部遺構検出状況	29-2 調査区 S K 2014、S K 2015検出状況
図版五	29-3 調査区 全景	図版一三 29-2 調査区 N R 2001他検出状況
	29-4 調査区 全景	29-3 調査区 S D 2084検出状況
図版六	29-1 調査区 全景	図版一四 29-1 調査区 西部遺構検出状況
	29-1 調査区 全景	29-3 調査区 東部遺構検出状況
図版七	29-2 調査区 全景	図版一五 29-4 調査区 全景
	29-2 調査区 東部遺構検出状況	29-4 調査区 西部遺構検出状況
図版八	29-3 調査区 全景	図版一六 29-1 調査区 S B 3001検出状況
	29-3 調査区 西部遺構検出	29-1 調査区 S E 3001、S K 3001検出状況
図版九	29-4 調査区 全景	

図版一七	29-4 調査区	S E 3003検出状況	図版三五	29-1 調査区	全景
	同 上	S E 3003井戸側検出状況		29-2 調査区	全景
図版一八	29-4 調査区	S E 3003遺物出土状況	図版三六	29-2 調査区	西部水田検出状況
	同 上	S E 3003敷石検出状況		29-2 調査区	西部水田〔東部〕、東部水田
図版一九	29-4 調査区	S E 3003井戸側断ち割り状況			〔西端〕
	同 上	S E 3003井戸側細部	図版三七	29-3 調査区	東部水田遺構〔中東部〕
図版二〇	29-4 調査区	S K 3004検出状況			検出状況
	29-4 調査区	S K 3008検出状況		29-3 調査区	東部水田遺構〔中西部〕
図版二一	29-4 調査区	S D 3052、N R 3002、N R 3003 検出状況		図版三八	29-3 調査区 東部水田遺構〔西部〕
	29-4 調査区	S D 3052 (右)、N R 3003 (左) 検出状況		同 上	東部水田遺構〔中央部〕
図版二二	29-4 調査区	S D 3060、S D 3053他検出状況	図版三九	29-3 調査区	東部水田遺構〔東部〕
	29-1 調査区	S P 3001検出状況		同 上	東部水田遺構〔東端〕
図版二三	29-1 調査区	全景	図版四〇	29-1 調査区	S D 5001南壁
	29-1 調査区	全景	図版四一	29-2 調査区	全景
図版二四	29-2 調査区	全景		29-4 調査区	全景
	29-2 調査区	全景	図版四二	29-4 調査区	全景
図版二五	29-3 調査区	全景		29-4 調査区	S K 6001、S K 6002、 S D 6001検出状況
	29-3 調査区	全景	図版四三	29-4 調査区	S K 6003検出状況
図版二六	29-4 調査区	東部遺構検出状況		29-4 調査区	S D 6002~6004検出状況
	29-1 調査区	S E 4002検出状況	図版四四	29-4 調査区	S W 6001~6006検出状況
図版二七	29-1 調査区	S E 4001検出状況		29-4 調査区	S W 6001~6003、S W 6005、 S W 6006検出状況
	同 上	S E 4001完掘状況	図版四五	29-4 調査区	S W 6001検出状況
図版二八	29-2 調査区	S K 4032検出状況		29-4 調査区	S W 6001検出状況
	29-2 調査区	S K 4033検出状況	図版四六	29-4 調査区	S W 6002検出状況
図版二九	29-3 調査区	S K 4037検出状況		29-4 調査区	S W 6003検出状況
	同 上	S K 4037遺物出土状況	図版四七	29-4 調査区	S W 6003検出状況
図版三〇	29-3 調査区	S K 4038検出状況		29-4 調査区	S W 6002検出状況
	29-3 調査区	S K 4039検出状況	図版四八	29-4 調査区	S W 6003、S W 6004検出 状況
図版三一	29-3 調査区	S K 4040内小穴検出状況		29-4 調査区	S W 6004検出状況
	同 上	S K 4040検出状況	図版四九	29-4 調査区	S W 6005検出状況
図版三二	29-3 調査区	S K 4043検出状況		29-4 調査区	S W 6005検出状況
	29-4 調査区	S K 4044検出状況	図版五〇	29-4 調査区	S W 6005検出状況
図版三三	29-1 調査区	S D 4017他検出状況		29-4 調査区	S W 6005検出状況
	29-3 調査区	S D 4036~4040検出状況		29-4 調査区	S W 6005検出状況
図版三四	29-3 調査区	S D 4043検出状況		29-4 調査区	S W 6005検出状況
	同 上	S D 4043遺物出土状況		29-4 調査区	S W 6005検出状況

図版五一	29-4 調査区 S W6006検出状況	S D4017、S D4043出土遺物
	29-2 調査区 畦畔状遺構6001、6002検出状況	図版七九 S D4043、N R4001出土遺物
図版五二	29-3 調査区 畦畔状遺構6004、6005検出状況	図版八〇 S D5002、S W6001出土遺物
	同 上 畦畔状遺構6004、6005検出状況	図版八一 S W6001出土遺物
図版五三	29-3 調査区 畦畔状遺構6004、6005内遺物 出土状況	図版八二 S W6001出土遺物
	同 上 畦畔状遺構6004、6005内遺物 出土状況細部	図版八三 S W6001出土遺物
図版五四	29-2 調査区 埋甕6001検出状況	図版八四 S W6001、S W6002出土遺物
	29-2 調査区 埋甕6001検出状況	図版八五 S W6002出土遺物
図版五五	S D1094、S E2001、S E2003出土遺物	図版八六 S W6002出土遺物
図版五六	S E2003出土遺物	図版八七 S W6002出土遺物
図版五七	S E2003、S K2019出土遺物	図版八八 S W6002、S W6003出土遺物
図版五八	S D2021、S D2022、S D2024、S D2062、 S D2064、S D2065、S D2075出土遺物	図版八九 S W6003出土遺物
図版五九	S D2084出土遺物	図版九〇 S W6003出土遺物
図版六〇	S D2206、S D2207、S D2285、S P2014、 N R2001出土遺物	図版九一 S W6003出土遺物
図版六一	N R2001、S E3003出土遺物	図版九二 S W6003出土遺物
図版六二	S E3003出土遺物	図版九三 S W6003出土遺物
図版六三	S E3003、S K3008、S K3020出土遺物	図版九四 S W6004出土遺物
図版六四	S E3003井戸側	図版九五 S W6004、S W6005出土遺物
図版六五	S E3003井戸側	図版九六 S W6005出土遺物
図版六六	S D3051、S D3052出土遺物	図版九七 S W6005出土遺物
図版六七	S D3052出土遺物	図版九八 S W6005出土遺物
図版六八	S D3052、S D3053、S D3054出土遺物	図版九九 S W6005出土遺物
図版六九	S D3059、S D3060、S D3064出土遺物	図版一〇〇 S W6005出土遺物
図版七〇	S P3001、N R3001出土遺物	図版一〇一 S W6005出土遺物
図版七一	N R3001、N R3002出土遺物	図版一〇二 S W6005、S W6006出土遺物
図版七二	N R3002、N R3002・N R3003出土遺物	図版一〇三 S W6006、畦畔状遺構6002、畦畔状 遺構6003、畦畔状遺構6004出土遺物
図版七三	N R3002、N R3003、S K4032、S K4033 S K4037出土遺物	図版一〇四 畦畔状遺構6004・6005、埋甕6001 出土遺物
図版七四	N R3003出土遺物	図版一〇五 第II層出土遺物
図版七五	S E4001船材転用井戸側	図版一〇六 第II層、第III層出土遺物
図版七六	S E4001船材転用井戸側	図版一〇七 第III層出土遺物
図版七七	S K4038、S K4039、S K4040 S K4041出土遺物	図版一〇八 第III層出土遺物
図版七八	S K4041、S K4043、S K4044、	図版一〇九 第III層、第IV層出土遺物
		図版一一〇 第IV層、第V層出土遺物
		図版一一一 第V層、第VI層出土遺物
		図版一一二 第VI層、第VII層出土遺物

# 第1章 調査に至る経過

久宝寺遺跡は、1935年(昭和10年)に小字西口・栗林(現八尾市久宝寺5丁目)で行われた道路工事中に、船の残片とともに弥生時代中期～古墳時代の遺物が発見され、遺跡として認識されるようになった。考古学的な調査は1973年(昭和48年)度以降で、遺跡の西部を縦断する近畿自動車道の計画に伴い、(財)大阪文化財センター(現、(財)大阪府文化財センター)による試掘調査が実施されている。この調査では、弥生時代～中世に至る遺構・遺物が広範囲にわたって重層的に検出され、当遺跡が複合遺跡であることが確認された。昭和57年以降は大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センターによる近畿自動車道建設に伴う発掘調査、ならびに八尾市教育委員会・(財)八尾市文化財調査研究会・(財)東大阪市文化財協会による発掘調査が随所で継続して実施されており、弥生時代前期～近世に至る遺構・遺物が検出されている。主な調査成果を調査順に列挙すれば、1983年(昭和58年)に(財)大阪文化財センターにより実施された久宝寺南(その2)では、古墳時代初頭後半(庄内式新相)の最古の準構造船が発見されており、内海の河内湖南岸に近接した久宝寺遺跡が「津」的な役割を果たした集落であったことを示す資料として注目された。1991年(平成3年)に八尾市北龜井3丁目で当調査研究会が実施した第9次調査(KH91-9)では、古墳時代前期前半(布留式古相)の2棟の住居内から重圓文鏡と素文鏡が出土したほか、近接する地点からは墳丘長35mを測る前方後方墳1基が検出されており、中河内地域における古墳文化受容期の在り方を知る上で貴重な資料を提供した。また、1994年(平成6年)に八尾市神武町で当調査研究会が行った第18次調査(KH94-18)では、古墳時代初頭後半(庄内式新相)に比定される朝鮮半島の南部に淵源を持つ炉形土器・軟質両耳甕が出土しており、西接する大阪市の加美遺跡第1次調査(KM84-1)の1号方形周溝墓出土の陶質土器(朝鮮三国時代初頭)の存在とともに、遺跡範囲の西部を中心に、渡来系集団の集落が存在した可能性が強くなってきた。この様に、久宝寺遺跡では、特に古墳時代初頭～前期を中心として、広範囲にわたって数多くの集落が形成されたことが知られている。

今回の調査地点である旧国鉄竜華操車場跡地(約24.6ha)は、遺跡範囲の南部を横断する形で展開する広大な敷地で、遺跡総面積の約1/7を占めている。竜華操車場が1986年(昭和61年)に国鉄民営化に先立って廃止されると、同年7月に八尾市から「竜華操車場跡地の基本構想」が発表され、再開発が進められることになった。再開発はまず駅周辺から着手され、竜華操車場跡地内での最初の発掘調査として、駅舎新設に伴う試掘調査



写真1 旧国鉄竜華操車場跡地(西から)

が1988年(昭和63年)度に八尾市教育委員会により実施された。そして駅舎、及び自由通路に伴う発掘調査として、当調査研究会による1990年(平成2年)度の第4次調査、1996年(平成8年)度の第20次調査、(財)大阪府文化財調査研究センターによる1995年(平成7年)度の95-8・9トレンチの調査が実施された。また、これらの調査と並行して、操車場北側の新線路予定地においては、1995年(平成7年)度に試掘調査(95-1~7トレンチ)が、さらに1995年(平成7年)度~1998年(平成10年)度には、操車場中央地下を南北に縦断する一般府道住吉八尾線の付け替えに伴う発掘調査(96-1、97-1、98-1・2トレンチ)が、それぞれ(財)大阪府文化財調査研究センターにより実施された。1997年(平成9年)度以降は、「八尾都市計画事業大阪竜華都市拠点土地区画整理事業」の一環として、公共施設建設地および新設道路部分を中心とした発掘調査の計画が策定され、当調査研究会による区画道路2号線に伴う第22次調査を嚆矢として、(財)大阪府文化財調査研究センター及び当調査研究会による発掘調査が継続的に実施される運びとなった。

平成11~12年度については、久宝寺遺跡第29次調査(KH99-29)として、竜華東西線4工区を対象とした発掘調査を実施した。調査面積は約4910m<sup>2</sup>を測る。

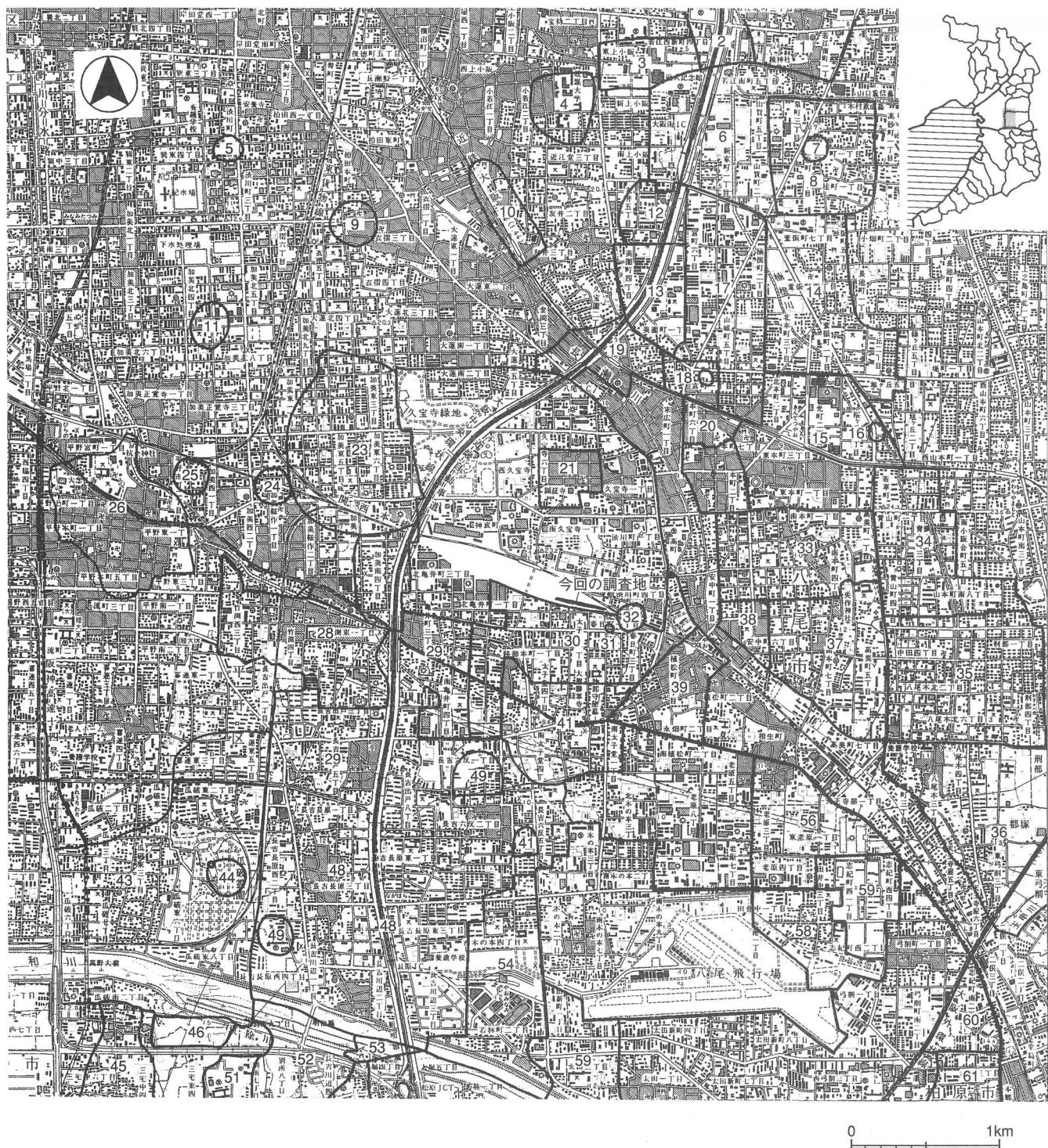
発掘調査は八尾市教育委員会による埋蔵文化財調査指示書に基づき実施した。調査は「大阪竜華都市拠点地区における埋蔵文化財発掘調査に関する覚書」に基づいて、八尾市教育委員会、住宅・都市整備公団関西支社(平成11年10月から都市基盤整備公団関西支社)、(財)八尾市文化財調査研究会の三者による業務委託契約書の締結後、現地調査に着手した。

現地発掘調査期間は平成11年9月1日~平成12年11月30日である。内業整理業務および印刷・製本は平成13年5月1日~平成15年2月28日に実施した。

## 第2章 地理・歴史的環境

久宝寺遺跡は、大阪府八尾市北西部の久宝寺1~6丁目・西久宝寺・南久宝寺1~3丁目・北久宝寺1~3丁目・亀井・渋川・渋川町1~7丁目・神武町・北亀井町1~3丁目および東大阪市大蓮東5丁目・大蓮南2丁目一帯の東西1.6km、南北1.7kmの範囲に展開する縄文時代後期~近世にかけての複合遺跡である。久宝寺遺跡周辺の遺跡群は、近畿自動車道建設に伴う調査や市単位の調査が数多く実施されており、考古学的な蓄積資料も比較的多い。周辺に隣接する遺跡としては、北に佐堂遺跡・美園遺跡、東に宮町遺跡・八尾寺内町遺跡・成法寺遺跡・竜華寺跡が長瀬川を挟んで対峙する他、南東に渋川廃寺、南に跡部遺跡・亀井遺跡、南西に竹渕遺跡、西に大阪市の加美遺跡が位置している。また、遺跡範囲内には遺跡名でもある久宝寺寺内町が存在している。

八尾市を包括する中河内地域の地勢は、東を生駒山地、南を羽曳野丘陵・河内台地、西を上町台地、北を淀川に画されている河内平野の南部にあたる。河内平野の形成については、海平面の昇降による侵食面の移動と、旧大和川と淀川による堆積作用との相互作用によるものと考えられている。特に、河内平野南部については、旧大和川水系の平野川・長瀬川・楠根川・玉串川・恩智川が北西方向に放射状に流下しており、平野部内にみられる自然堤防・扇状地性低地・三角州



1 若江遺跡	14 萱振遺跡	27 亀井北遺跡	40 植松南遺跡
2 若江北遺跡	15 東郷遺跡	28 竹瀬遺跡	41 太子堂遺跡
3 上小坂遺跡	16 東郷廃寺	29 亀井遺跡	42 喜連東遺跡
4 小若江遺跡	17 穴太廃寺	30 跡部遺跡	43 瓜破遺跡
5 西郷遺跡	18 宮町遺跡	31 跡部遺跡銅鐸出土地	44 瓜破廃寺
6 山賀遺跡	19 佐堂遺跡	32 渋川廃寺	45 三宅遺跡
7 西郡廃寺	20 八尾寺内町	33 成法寺遺跡	46 三宅東遺跡
8 西郡廃寺遺跡	21 久宝寺内町	34 小阪合遺跡	47 長吉野山遺跡
9 衣摺遺跡	22 久宝寺遺跡	35 中田遺跡	48 長原遺跡
10 弥刀遺跡	23 加美遺跡	36 東弓削遺跡	49 城山古墳跡
11 加美北遺跡	24 長樂廃寺	37 矢作遺跡	50 六反古墳跡
12 友井東遺跡	25 平野寺前遺跡	38 竜華寺跡	51 藏重遺跡
13 美園遺跡	26 平野環濠都市	39 植松遺跡	52 別所遺跡
			53 大堀遺跡
			54 八尾南遺跡
			55 木の本遺跡
			56 老原遺跡
			57 志紀遺跡
			58 田井中遺跡
			59 太田遺跡
			60 弓削遺跡
			61 本郷遺跡

第1図 久宝寺遺跡周辺の遺跡分布図(S=1/40000)

性低地等の地形形成については、これらの河川の堆積作用によるところが大きい。久宝寺遺跡は、旧大和川の主流であった長瀬川と平野川に挟まれた扇状地性低地に分類される沖積地に展開した遺跡で、現地表面の海拔高は9.5m前後を測る。以下、当遺跡周辺の遺跡を中心に時期ごとに概観してみる。

後氷期の大坂平野（河内平野）の発達史については、梶山彦太郎・市原 実両氏による研究により九つの時代に区分されている。それらの研究成果から考察すれば、遺跡周辺で人々の足跡が認められるのは縄文時代晚期で、河内湾の淡水化が進行し河内潟が形成された時期（河内潟の時代）にあたる。周辺遺跡では、新家・山賀・亀井の各遺跡から縄文時代晚期の土器片が出土しているほか、長原遺跡では集落が検出されている。本遺跡を含む中河内地域の沖積低地部においては、当該期の生活面が深層に埋没しているのが一般的であり、一部の調査を除けば、当該期の文化層まで調査深度が至らない場合が大半であり、遺跡の全体像の把握が困難な場合が多い。本遺跡内においては、近畿自動車道に伴う久宝寺北（その1）の調査で縄文時代晚期の遺物包含層がT.P.+4.7m前後に存在することが確認されている。

弥生時代前期には、水稻耕作の導入に伴って河内潟に注ぐ河川により形成された微高地および自然堤防を中心に数多くの集落が営まれている。前期の古段階に成立するものとしては若江北遺跡・山賀遺跡・八尾南遺跡がある他、中段階から新段階にかけて成立するものとしては美園遺跡・亀井遺跡・城山遺跡・瓜破遺跡・長原遺跡・跡部遺跡・中田遺跡・田井中遺跡がある。本遺跡内では、前期新段階の集落が久宝寺南（その1・その2）で検出されている。

弥生時代中期には河内潟の陸化に伴って、新たに瓜生堂遺跡・巨摩廃寺遺跡・若江北遺跡・加美遺跡・東郷遺跡・小阪合遺跡・木の本遺跡・東弓削遺跡・弓削遺跡が成立している。また、水稻耕作を中心とした安定した基盤を背景として、集落規模の拡大化を計っており、亀井遺跡に象徴される拠点集落の出現や瓜生堂遺跡2号方形周溝墓や加美遺跡のY1号墓に代表される大形の墳丘墓の存在は、弥生文化が昇華した証を可視的に示している。本遺跡内では、中期中葉から後葉（Ⅲ・Ⅳ様式）にかけての居住域が遺跡範囲の中央部から西部で検出されている。墓域や生産域については、居住域の北西部や西部が利用されており、特に墓域については西接する加美遺跡を含めて大形の墳丘墓が検出されている。

弥生時代後期になると中期の生活面を流水堆積層が厚く覆っている例が平野部の各遺跡で検出されており、自然環境が不安定であったことが推定されている。前代から続く既存の集落は、環濠集落の解体に連動して等質的な集落が点在する散村的な集落形態に移行を余儀なくされたようである。本遺跡内では後期前半の集落が久宝寺南（その1）で検出されている程度で、前代に比して集落は減少している。後期後半の集落は、前代に比して増加しており、遺跡範囲東部の第8次調査（K H91-8）、北西部の府教委1991年度調査、南東部の第29次調査（K H99-24）で検出されている。

古墳時代初頭（庄内式）～前期（布留式）においては、前代に比して集落の増加が顕著で、西岩田遺跡・山賀遺跡・瓜生堂遺跡・佐堂遺跡・友井東遺跡・美園遺跡・小若江北遺跡・久宝寺遺跡・亀井遺跡・加美遺跡・竹渕遺跡・萱振遺跡・東郷遺跡・成法寺遺跡・小阪合遺跡・中田遺跡・東弓削遺跡・木の本遺跡・八尾南遺跡・長原遺跡・瓜破遺跡等で検出されている。この時期を通じての集落の在り方は前代と同様、大規模な集落に発展することなく、土器型式の1型式な

いしは長くとも2型式程度の期間に居住域が移動を繰り返す形で推移したことが推定される。当該期の集落の変遷を土器型式から概観すれば庄内式古相から中相にかけては漸移的な流れのなかで推移するが、庄内式新相～布留式古相においては爆発的に集落数が増加し、布留式古相をピークとして集落が減少する流れが看取される。庄内式新相～布留式古相段階の集落の急増に連動して、吉備・山陰・播磨・阿波・讃岐・摂津・東海等の各地域からの搬入土器の占める割合が高く、物的交流のほか、移住者等の人的交流も想定されている。久宝寺遺跡では、第18次調査（K H 94-18）で朝鮮半島南部にその淵源を持つ炉形土器・軟質両耳甕が出土しており、さらに西接する加美遺跡1次調査（KM84-1）の1号方形周溝墓からは陶質土器（朝鮮三国時代初頭）が出土していることから、交流が国内に留まらず海外におよんだことが窺われる。これらの要因としては、準構造船に代表される造船技術の確立や北方に広がる河内湖を通じて海上交通が容易な地点に久宝寺遺跡が立地し港津的な役割を果たしたこと他ならない。一方、当該期における墳墓については、方形周溝墓を中心とした前代の墓制形態が継承されるものの、布留式古相以降は、古墳文化受容の着実な浸透の中で、庄内式期に見られた等質な造墓形態から脱却して、墳形の多様化、主体部構造の変化、鏡類の副葬、埴輪の使用等の質的变化が進行し、前期後半段階において他地域に遅れて定型化した古墳の出現を見るのである。平野部で検出されたものに限定すれば、庄内式期では、加美遺跡・亀井北遺跡・久宝寺遺跡・東郷遺跡・成法寺遺跡・萱振遺跡・八尾南遺跡、布留式期では、加美遺跡・友井東遺跡・久宝寺南遺跡・萱振遺跡・東郷遺跡・成法寺遺跡等の遺跡で検出されている他、布留式新相には、中河内地域の首長層がヤマト政権との従属的な関係を結んだ結果として、萱振1号墳・美園古墳・塚ノ本古墳が出現している。久宝寺遺跡内では、第23次調査（K H 97-23）・第28次調査（K H 99-28）で庄内式期、第22次調査（K H 97-22）・2001-1トレーナーで布留式期の墳墓が検出されている。

古墳時代中期の集落位置は前代に符合した形で推移している。5世紀代の河内平野南部で集落を構成した集団は、南部の羽曳野丘陵で展開される古市古墳群の造営や、『記紀』にみる治水事業を始めとする大規模な土木工事の推進の一躍を担っていたことは想像に難くない。久宝寺遺跡内においても、旧大和川水系の本流に設置された大規模な堰が検出されており、土木技術の向上や鉄製農具の進化と普及が河内平野の開発を推進した要因であったと推定される。また、当該期における須恵器や韓式系土器に代表される新出土器の出現や土木・工芸・馬飼等の新来技術の導入については、土器相の変化に表出されるように朝鮮半島を中心とする渡来系集団との関係が留意される。当該期の古墳は、小規模な方墳が主体で平野部においては全て埋没した形で検出されており、長原遺跡・八尾南遺跡・城山遺跡のように群集化するものと、友井東遺跡・巨摩遺跡・亀井遺跡・竹渕遺跡のような単独墳がある。続く、古墳時代後期の集落は山賀遺跡・友井東遺跡・萱振遺跡・矢作遺跡・中田遺跡・小阪合遺跡・東郷遺跡・久宝寺遺跡・太子堂遺跡・跡部遺跡・竹渕遺跡・長原遺跡で検出されており、比較的集落規模の小さなものが大半を占めている。当該期の集落の特徴としては、後期全般を通して継続する集落が少ないと、後期前半に廃絶する集落が比較的多いこと、更には、後期後半段階に集落の増加と分散化が偏在化していることが指摘される。一方、後期古墳の推移は、長原古墳群が古墳造営を停止した後期中葉以降、平野部での築造は激減し、それ以後は生駒山地西麓部に展開する高安古墳群内に造墓位置を変えていく。久宝寺遺跡内では、七ツ門古墳（6世紀中葉）が検出されており、長原遺跡内の七ノ坪古墳

(5世紀末)とあわせて、平野部における数少ない横穴式石室を持つ古墳として貴重である。当該期の古墳の在り方は、小型方形墳を主体とする従前の墓制形態が、横穴式石室を主体部に持つ円墳へと変化する時期と符号しており、後期中葉以降は一部の例外を除けば、平野部が居住域と生産域、生駒山地西麓部が墓域としての分化が図られている。こうした推移の変化は、大和政権による地域の生産体制の強化が、再編成された在地系・渡来系の有力氏族に委ねられた結果を示すものと理解される。

当該期における遺跡周辺の文献史料としては、政治顧問として百濟から日羅を招き阿斗<sup>あと</sup>の桑市に館をつくり住まわせる『日本書紀敏達十二年七月(583)』、物部守屋と蘇我馬子の仏教の摂取をめぐる論争、守屋怒って阿斗<sup>あと</sup>に帰り兵を集め、『日本書紀用明二年四月(587)』等があり、後の『和名類聚抄』(以下『和名抄』)にみる渋川郡の跡部郷に関わる有力豪族の物部連の枝族として阿刀氏との関係が考えられる。一方、郡名である「渋川」については、『日本書紀崇峻天皇即位前紀用明二年七月(587)』の「從志紀郡。到渋河家。」が初見であり、郡名としては河内国渋川郡の柏原廣山が兵衛を偽ったため土佐に流される『日本書紀持統三年七月(689)』が初見である。

飛鳥・奈良時代の集落は萱振遺跡・成法寺遺跡・東郷遺跡・久宝寺遺跡・太子堂遺跡・小阪合遺跡・中田遺跡・弓削遺跡・東弓削遺跡・長原遺跡等で検出されている。また、大和と難波津を結ぶ交通の要衝であった中河内地域は、大和飛鳥地域と同様、仏教文化の受容は早く、渡来系氏族集団を檀越として多くの氏寺の建立が認められている。久宝寺遺跡を中心とする平野部に限って、『和名抄』による河内国の郡界別に区別すれば、若江郡の西郡廃寺(奈良時代前期～鎌倉時代)・東郷廃寺(飛鳥時代後期～平安時代前期)・弓削寺(奈良時代後期～鎌倉時代)、渋川郡の渋川廃寺(飛鳥時代前期～室町時代)・竜華寺(奈良時代後期～鎌倉時代)・鞍作廃寺(奈良時代)、志紀郡の五条宮跡(奈良時代後期～平安時代後期)、丹北郡の瓜破廃寺(奈良時代)がある。このうち、遺跡範囲の南東部に位置し郡名を冠する渋川廃寺(宝積寺)<sup>註1</sup>については、昭和3～4年に関西線(現大和路線)の竜華操車場建設の際に土壇が壊されており、その時に掘り出された塔心礎が八尾市内の民家に現存している。既存論考や調査成果と本調査での資料を総合すれば、本書掲載の豊浦寺式の素弁8弁蓮華文軒丸瓦(図143-474)が創建瓦と考えられ、7世紀前半の創建が推定される他、8世紀前半には、法隆寺西院創建様式の忍冬草文軒平瓦と本書掲載の蓮華文軒丸瓦(図143-475)との組み合わせが推定される。天平一九年(747)の『法隆寺伽藍縁起并流記資財帳』によれば、志紀郡に一町、渋川郡に三十六町二段百八十七歩の寺領があったとされている他、「渋川御田侍奴末麻呂食指」と記された木簡が長屋王邸の調査で出土しており、奈良時代前半期において長屋王の領地が渋川郡内にあったことがわかる。

一方、『続日本紀』には奈良時代後半の天平神護元年(765)～宝亀元年(770)の5年間に亘って若江郡南部を中心とした記事が記されている。全て、称徳天皇による3回におよぶ行幸に関連した内容で、「弓削行宮」「弓削寺」「由義宮」「由義寺」「竜華寺」が見える他、神護景雲三年(769)十月三十日の条には「詔以由義宮、為西京。河内国為河内職。...」のように若江郡の南部を中心とした一帯に「西の京」の造営が計画されている。翌年の宝亀元年(770)八月四日の天皇崩御により、造都の中止を余儀なくされるが、一時期にあるにせよ「陪都」的な都の造営が計画され歴史の表舞台になったことは特筆される。

平安時代～鎌倉時代の集落は、萱振遺跡・佐堂遺跡・小阪合遺跡・中田遺跡・矢作遺跡・長原

遺跡で検出されている。当該期の集落は、条里区画に基づくものや主要街道、寺社周辺で成立したものが多い。寺としては、若江郡に穴太廃寺（平安時代後半）、金性寺（平安時代後期）、金剛蓮華寺（平安時代前期）がある。式内社としては、若江郡9社（阪合・矢作・御野県主・弓削・都留美嶋・長柄・渋川・栗栖・加津良）、渋川郡2社（跡部・許麻）、志紀郡（楠本）がある。このうち、久宝寺遺跡範囲には許麻神社（久宝寺5丁目）、跡部神社（亀井2丁目）がある。許麻神社は『新撰姓氏録』の河内国諸藩に記された高句麗系氏族の大泊連に関連するものである。跡部神社は『新撰姓氏録』の左京神別上に記された阿刀氏に関連するもので、石上朝臣（物部氏）と同祖の饒速日命の末裔とされている。なお、当該時期において久宝寺遺跡を包括する一帯は『石清水文書』延久四年（1072）九月五日「渋川郡漆条橘島里」に見るよう、「橘島」と称されていたようである。「橘島」と称された範囲は古長瀬川と古平野川に挟まれた地域をさすものと考えられる。なお、遺跡範囲南西部の北亀井町2丁目には、大和西大寺の觀尊が文永五年（1268）<sup>じゅうじゅうきんかい</sup><sup>註4</sup>に十重金戒を講じたとされる釈迦堂跡（千光寺）がある。

室町時代～戦国時代の河内地域は、南北朝期の動乱、畠山氏の内乱に端を発する応仁の乱から戦国時代末期の織田信長の近畿統一に至る長きに亘って戦乱の渦中であったことに符合して、集落数の減少が顕著である。当該期における集落は、若江遺跡・萱振遺跡・東郷遺跡・亀井遺跡等で検出されているが、その多くが防御を目的として集約された集村形態に変化を余儀なくされたものと考えられる。遺跡範囲南西部の北亀井町2丁目には、初代河内国守護であった畠山基国の子、満家の開基である真觀寺（応永年間1394～1428）、北部には西証寺（現顯証寺）を中心に天文十年（1541）に寺内特権を得て成立した「久宝寺寺内町」が存在している。

近世の集落は前代の集落と重複して推移している。近世の河内地域は、大坂城の城下町として大坂の都市化が進行する一方で、大消費地への生産物の供給や流通を担う役割を果たしたものと考えられる。なかでも、八尾周辺の木綿は「久宝寺木綿」として知られており、江戸時代中期の宝暦六年（1756）の「河内国渋川郡久宝寺村当子年植附書上帳控」によれば、村内耕地のうち綿作が約7割を占めていたことが窺える。このように、宝永元年（1704）の大和川付け替え以降は旧川筋の新田開発や中河内特有の「半田（はんだ）」<sup>註5</sup>、「搔き揚げ田」「鳥畑」<sup>註6</sup>と呼ばれる田畠混在の耕地形態の利用により綿作はさらに急速な発展を遂げ、明治の10年代に衰退するまで地場産品としての役割を果たしたようである。

#### 註記

##### 註1 渋川廃寺（宝積寺）

- ・文安五年（1448）『太子伝玉林抄』〔渋河寺 河州 推古天皇御願 在\_彼神妙棕東北六七町\_〕
- ・大正十一年（1922）井上正雄『大阪府全志』〔大字渋川の西南関西線鉄道八尾駅の西半町の田圃の間に大塔の礎石を存せり〕
- ・大正十三年（1924）片山英宗『中河内郡廃寺』〔宝積寺 八尾駅を距る西約一町の田中に、近年迄大礎石一個存せしが、今は植松の林八郎氏の庭に運ばれたり。これ實に当寺の遺址なりき・・・〕
- ・昭和八年（1933）明山大華『考古学雑誌』〔宝積寺塔心礎〕
- ・昭和一九年（1944）田中重久『聖徳太子御聖蹟の研究』〔宝積寺塔心礎を河内国竜華町の渋川寺の心礎として報告、はじめて渋川寺の名称を使用〕
- ・昭和三十三年（1958）西岡三四郎『八尾市史』〔渋川寺 法着寺という小字があつて・・・古瓦を出土するので、堂塔の整った伽藍が確認される。・・・この寺を由井喜太郎氏は物部守屋の渋川の別業を捨て造ったと伝える宝積寺であろうと考証されている〕
- ・藤澤一夫 1941「摂河泉古瓦の研究」『佛教考古学論叢』
- ・山本 昭 1984「河内竜華寺と渋川寺」『藤澤一夫先生古稀記念 古代文化論叢』

- ・山本 昭1986「河内国渋川寺について」『帝塚山考古学No 6』帝塚山考古学研究所
- ・1990 渋川廃寺第1次発掘調査概要（現地説明会資料）（財）八尾市文化財調査研究会
- ・2002 渋川廃寺現地説明会資料（財）八尾市文化財調査研究会

註2 八尾市植松町5丁目 林八一郎氏所蔵

註3 町田 章・毛利光俊彦他1995『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告－長屋王邸・藤原麻呂邸の調査』奈良市教育委員会

註4 大乗仏教の戒律に定める10種の重大ないましめ。

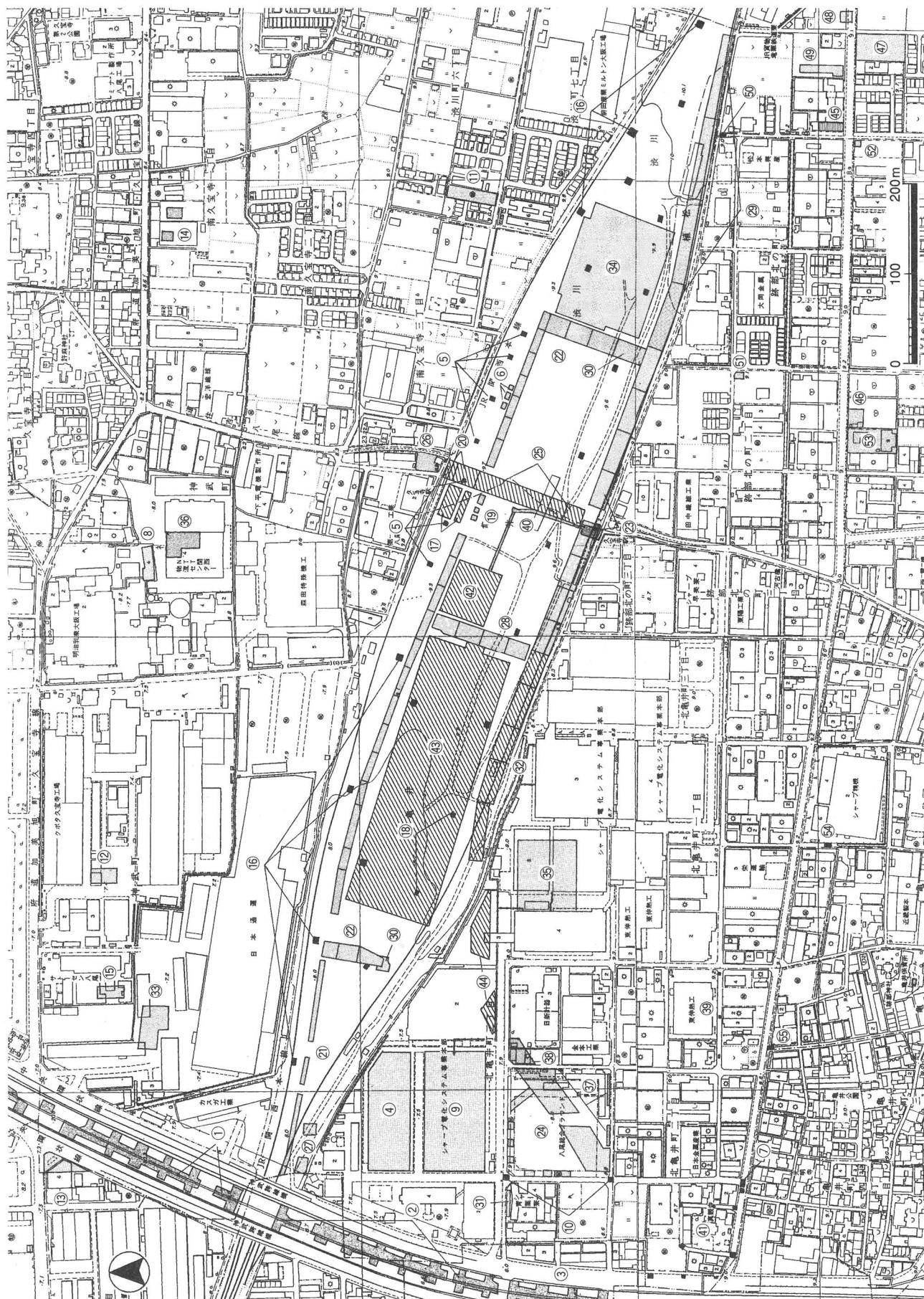
註5 八尾市歴史民俗資料館 2002『河内木綿関係資料集1 河内の綿作りと木綿生産』

註6 大藏永常 天保4年（1833）『綿圃要務』

註7 大野 薫 1989「島畠の考古学的調査－大阪府池島遺跡の事例－」『郵政考古紀要15』郵政考古学会  
本遺構の名称については、大野氏に従って「島畠」を使用した。

#### 参考文献

- ・赤木克視・村上年生他 1987『河内平野の動態I 近畿自動車道天理～吹田建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－プロローグ編－』大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター
- ・梶山彦太郎・市原 実 1986『大阪平野のおいたち』青木書店
- ・（財）大阪市文化財協会 1983『長原遺跡発掘調査III』
- ・金子正裕他 1987『久宝寺北（その1）』大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター
- ・松岡良憲他 1987『久宝寺南（その1）』大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター
- ・一瀬和夫他 1987『久宝寺南（その2）』大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター
- ・福永信雄 1997「河内潟東・南辺の弥生時代開始期における集落形態について」『宗教と考古学』金闇 恕の古稀をお祝いする会
- ・田代克己・今村道雄他 1981『瓜生堂遺跡III』瓜生堂遺跡調査会
- ・田中清美 1986「加美遺跡の検討」『古代を考える43』
- ・坪田真一 1995「久宝寺遺跡出土の朝鮮半島系土器について」『大阪府下埋蔵文化財研究会（第31回資料）』
- ・原田昌則・吉田珠己・岡田清一・古川晴久・樋口 薫 1999「8.久宝寺遺跡第23調査（K H97-23）」『平成10年度（財）八尾市文化財調査研究会事業報告』（財）八尾市文化財調査研究会
- ・西村公助・岡田清一 2000「12.久宝寺遺跡第28調査（K H99-28）」『平成11年度（財）八尾市文化財調査研究会事業報告』（財）八尾市文化財調査研究会
- ・原田昌則 2001「久宝寺遺跡第22次発掘調査報告書－大阪竜華都市拠点地区区画整理2号線に伴う」『（財）八尾市文化財調査研究会報告68』（財）八尾市文化財調査研究会
- ・西村 歩 2001「久宝寺1号墳の調査成果」『大阪府埋蔵文化財研究会（第43回）資料』大阪府教育委員会・（財）大阪府文化財調査研究センター
- ・山田隆一 1994「古墳時代初頭前後の河内地域－旧大和川流域に立地する遺跡群の枠組みについて－」『弥生文化博物館研究報告第3集』大阪府弥生文化博物館
- ・広瀬雅信他 1992『萱振遺跡 大阪府文化財調査報告書 第39輯』大阪府教育委員会
- ・渡辺昌宏他 1985『美園』大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター
- ・井藤 徹他 1978『長原』大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター
- ・後藤信義・本田奈都子 1996「八尾市亀井在住 久宝寺遺跡・竜華地区（その1）発掘調査報告書－JR久宝寺駅舎・自由通路設置に伴う－」『（財）大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第6集』（財）大阪府文化財調査研究センター
- ・後藤信義 1998『久宝寺遺跡七ツ門古墳現地検討会資料』（財）大阪府文化財調査研究センター
- ・赤木克視他 2001「久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書III」『（財）大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第60集』（財）大阪府文化財調査研究センター
- ・高井健司 1987「城下マンション（仮称）建設工事に伴う長原遺跡発掘調査（N G85-23）略報」『昭和60年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』大阪市教育委員会・（財）大阪市文化財協会
- ・櫻井久之 2001「長原遺跡の小方墳」『大阪府埋蔵文化財研究会（第43回）資料』大阪府教育委員会・（財）大阪府文化財調査研究センター
- ・亀井輝一郎 1976「大和川と物部氏」『日本書紀研究第九冊』塙書房
- ・坂本太郎他 1965『日本書紀下』（株）岩波書店
- ・森田康夫 1980『八尾編年史<古代・中世>』八尾市立図書館
- ・足利健亮 1986「由義京の宮域および京城考」『長岡京古文化論叢』中山修一先生古稀記念事業会（株）同朋舎出版
- ・山本 博 1971『竜田越』学生社
- ・吉岡 哲 1988「考古編 第1～5章」『八尾市史（前近代）本文編』八尾市役所
- ・安井良三他 1991『大阪府八尾市内寺院古文書調査報告書（目録）』八尾市教育委員会
- ・棚橋利光 2000「中世八尾における律宗の広がり」『研究紀要 第11号』八尾市歴史民俗資料館
- ・櫻井敏雄・大草一憲 1988『寺内町の基本計画に関する研究－久宝寺寺内町と八尾寺内町を中心として－』八尾市教育委員会



第2図 調査地周辺の発掘調査位置図( $S=1/6000$ )

第1表 調査地周辺の発掘調査一覧表

番号	調査名(略号)	調査主体	所在地	調査期間	文 献
1	久宝寺南(その2)	府教委・ (財)大文セ	神武町	S57/7/5～ S60/6/30	赤木克視・一瀬和夫 1987 『久宝寺南(その2)』大阪府教育委員会・(財) 大阪文化財センター
2	亀井北(その1)	〃	大阪市平野区 加美南2丁目	S59/3/1～ S61/3/31	小野久隆・服部文章 1985.3 『亀井北(その1)』大阪府教育委員会・(財) 大阪文化財センター
3	亀井北(その2)	〃	大阪市平野区 加美4丁目	S59/3/10～ S61/1/16	奥 和之・山上 弘 1986 『亀井北(その2)』大阪府教育委員会・(財) 大阪文化財センター
4	久宝寺1次(KH84-1)	(財)八文研	北亀井3丁目	S59/4/2～ 5/26	原田昌則 1993 「II久宝寺遺跡第1次調査(KH84-1)」「八尾市埋蔵文化 財発掘調査報告」(財)八尾市文化財調査報告37(財)八尾市文化財調査研究会
5	久宝寺(63-269)	市教委	亀井・渋川	S63/8/30、 11/25～28	近江俊秀 1989 「4.久宝寺遺跡(63-269)の調査」「八尾市内遺跡昭和63年度 発掘調査報告書Ⅱ」八尾市文化財報告20 昭和63年度公共事業 八尾市教育委員会
6	久宝寺4次(KH90-4)	(財)八文研	亀井・渋川	H2/4/2～ 6/12	坪田真一 1993 「I久宝寺遺跡第4次調査(KH90-4)」「八尾市埋蔵文化 財発掘調査報告Ⅲ」(財)八尾市文化財調査報告41(財)八尾市文化財調査研究会
7	久宝寺5次(KH90-5)	〃	北亀井2丁目	H2/4/15～ 4/22	高萩千秋 1991 「I久宝寺遺跡(KH90-5)」「(財)八尾市文化財調査研究会報告32」(財)八尾市文化財調査研究会
8	久宝寺6次(KH90-6)	〃	神武町17・20 ～27・38他	H2/9/3～ 10/12	原田昌則 1993 「III久宝寺遺跡第6次調査(KH90-6)」「八尾市埋蔵文化 財発掘調査報告」(財)八尾市文化財調査報告37(財)八尾市文化財調査研究会
9	久宝寺9次(KH91-9)	〃	北亀井3丁目	H3/8/1～ 1-72	成海佳子 1992 「13.久宝寺遺跡第9次調査(KH91-9)」「平成3年度(財) 八尾市文化財調査研究会事業報告」(財)八尾市文化財調査研究会
10	久宝寺10次(KH91-10)	〃	北亀井2・3 丁目	H3/10/2～ 10/22	原田昌則 1992 「I久宝寺遺跡第10次調査(KH91-10)」「八尾市埋蔵文化 財発掘調査報告」(財)八尾市文化財調査報告34(財)八尾市文化財調査研究会
11	久宝寺11次(KH91-11)	〃	渋川町6丁目 34.35	H3/10/7～ 10/18	西村公助 1992 「II久宝寺遺跡第11次調査(KH91-11)」「(財)八尾市文化財調 査研究会報告34(財)八尾市文化財調査研究会
12	久宝寺13次(KH91-13)	〃	神武町2-35	H3/12/16～ H4/1/23	西村公助 1992 「17.久宝寺遺跡第13次調査(KH91-13)」「平成3年度(財) 八尾市文化財調査研究会事業報告」(財)八尾市文化財調査研究会
13	久宝寺14次(KH92-14)	〃	神武町190-1	H4/5/26～ 8/10	坪田真一 1993 「10.久宝寺14次調査(KH92-14)」「平成4年度(財)八尾 市文化財調査研究会事業報告」(財)八尾市文化財調査研究会
14	久宝寺17次(KH93-17)	〃	久宝寺1丁目 40	H5/7/19～ 7/30	岡田清一 1997 「II久宝寺遺跡(第17次調査)」「(財)八尾市文化財調査研 究会報告55」(財)八尾市文化財調査研究会
15	久宝寺18次(KH94-18)	〃	神武町143～ 146他	H6/9/1～ 10/12	坪田真一 1995 「8.久宝寺遺跡第18次調査(KH94-18)」「平成6年度(財) 八尾市文化財調査研究会事業報告」(財)八尾市文化財調査研究会
16	久宝寺(95-1～7トレンチ)	(財)大文研セ	亀井・渋川	H7/5/24～ 12/20	本間元樹他 1996.3 「八尾市亀井・渋川所在 久宝寺遺跡・竜華地区(そ の1)発掘調査報告書JR久宝寺駅舎・自由通路設置にともなう」(財)大阪府 文化財調査研究センター報告書 第5集」(財)大阪府文化財調査研究センター
17	久宝寺(95-8・9トレンチ)	〃	亀井	H7/5/23～ 12/20	後藤信義・本田奈都子 1996.3 「八尾市亀井所在 久宝寺遺跡・竜華地区(そ の1)発掘調査報告書JR久宝寺駅舎・自由通路設置にともなう」(財)大阪府 文化財調査研究センター報告書 第6集」(財)大阪府文化財調査研究センター
18	久宝寺(95-565)	市教委	渋川・亀井	H8/1/9～ 7/12	藤井淳弘・吉田珠己 1997 「7.久宝寺遺跡(95-565)の調査」「八尾市内遺 跡平成8年度発掘調査報告Ⅱ」八尾市文化財調査報告37 八尾市教育委員会
19	久宝寺(KH96-20)	(財)八文研	渋川	H8/9/24～ 11/14	坪田真一他 2000 「III久宝寺遺跡第20次調査(KH96-20)」「(財)八尾市文 化財調査研究会報告66(財)八尾市文化財調査研究会
20	久宝寺(96-1・97-1トレンチ)	(財)大文研セ	渋川	H8/2/1～ H10/3/31	後藤信義他 1998.3 「八尾市渋川所在 久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報 告書II一般府道住吉八尾線付け替え事業に伴う発掘調査」「(財)大阪府文化財調 査研究センター報告書 第26集」(財)大阪府文化財調査研究センター
21	久宝寺22次(KH97-22)	(財)八文研	亀井	H9/10/29～ H10/1/13	原田昌則 2001 「久宝寺遺跡第22次発掘調査報告書・大阪竜華都市拠点地区 区画道路2号線に伴う」「(財)八尾市文化財調査研究会報告69」(財)八尾市文 化財調査研究会
22	久宝寺23次(KH97-23)	〃	亀井・渋川	H9/10/23～ H10/6/30	原田昌則・吉田珠己・岡田清一・古川晴久・樋口 薫 1999 「8.久宝寺遺跡 第23次調査(KH97-23)」「平成10年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告」 (財)八尾市文化財調査研究会
23	久宝寺24次(KH98-24)	〃	亀井・渋川	H10/2/10～ H11/2/20	原田昌則他 2001 「久宝寺遺跡第24次発掘調査報告書・大阪竜華都市拠点地区 竜華東西線3工区の掘削工事に伴う」「(財)八尾市文化財調査研究会報告68」 (財)八尾市文化財調査研究会
24	久宝寺25次(KH98-25)	〃	北亀井	H11/1/29～ 7/15	原田昌則・坪田真一・森本めぐみ・古川晴久 1999 「10.久宝寺遺跡第25次調 査(KH98-25)」「平成10年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告」(財)八尾 市文化財調査研究会
25	久宝寺(98-1・98-2)	〃	渋川	H10/3/16～ H11/1/14	赤木克視他 2001 「久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書」「(財)大阪府文 化財調査研究センター調査報告書 60集」(財)大阪府文化財調査研究センター
26	久宝寺26次(KH99-26)	(財)大文研セ	神武町93-1	H11/3/23～ 8/20	岡田清一・樋口 薫 2002 「久宝寺遺跡・八尾市神武町93-1の道路築造工事 に伴う久宝寺遺跡第26次発掘調査報告書」「(財)八尾市文化財調査研究会報告70」 (財)八尾市文化財調査研究会
27	久宝寺27次(KH99-27)	(財)八文研	北亀井3丁目 1-72	H11/5/17～ 7/21	西村公助 2000 「10.久宝寺遺跡第27次調査(KH99-27)」「平成11年度(財) 八尾市文化財調査研究会事業報告」(財)八尾市文化財調査研究会
28	久宝寺28次(KH99-28)	〃	亀井	H11/9/1～ H12/3/10	西村公助・岡田清一 2000 「11.久宝寺遺跡第28次調査(KH99-28)」「平成 11年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告」(財)八尾市文化財調査研究会
29	久宝寺29次(KH99-29)	〃	渋川	H11/9/1～ H12/11/30	本書掲載
30	久宝寺30次(KH99-30)	〃	亀井・渋川	H12/1/20～ 3/17	原田昌則・西村公助・岡田清一 2000 「13.久宝寺遺跡第30次調査(KH99-30)」 「平成11年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告」(財)八尾市文化財調査研 究会
31	久宝寺31次(KH99-31)	〃	亀井	H12/2/8～ 3/30	西村公助 2000 「14.久宝寺遺跡第31次調査(KH99-31)」「(財)八尾市文 化財調査研究会報告65」(財)八尾市文化財調査研究会

番号	調査名(略号)	調査主体	所在地	調査期間	文 獻
32	久宝寺(99-1~5)	(財)大文研セ	亀井	H11/3/2~12/24	未報告
33	久宝寺32次(K H99-32)	(財)八文研	神武町138他	H12/3/13~6/8	森本めぐみ 2000 「15.久宝寺遺跡第32次調査(K H99-32)」『平成11年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
34	久宝寺33次(K H2000-33)	〃	渋川	H12/5/9~H13/2/28	成海佳子・樋口薰・金瀬満夫 2001 「久宝寺遺跡第33次調査(K H2000-33)」『平成12年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
35	久宝寺34次(K H2000-34)	〃	亀井3丁目41	H12/7/18~11/25	道齋 2001 「5.久宝寺遺跡第34次調査(K H2000-34)」『平成12年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
36	久宝寺35次(K H2000-35)	〃	神武町1番79	H12/10/16~11/14	森本めぐみ 2002 「I久宝寺遺跡第35次調査」『平成13年度八尾市立埋蔵文化財センター報告3』八尾市教育委員会・(財)八尾市文化財調査研究会
37	久宝寺36次(K H2000-36)	〃	北亀井町	H13/1/10~3/23	坪田真一 2001 「7.久宝寺遺跡第36次調査(K H2000-36)」『平成12年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
38	久宝寺37次(K H2001-37)	〃	亀井	H13/9/10~11/17	道齋・金瀬満夫 2002 「11.久宝寺遺跡第37次調査(K H2001-37)」『平成13年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
39	久宝寺38次(K H2002-38)	〃	北亀井町2・3丁目	H14/1/9~3/29	高萩千秋 2002 「12.久宝寺遺跡第38次調査(K H2002-38)」『平成13年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
40	久宝寺39次(K H2002-39)	〃	亀井	H14/1/22~9/	原田昌則・成海佳子 2002 「13.久宝寺遺跡第39次調査(K H2002-39)」『平成13年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
41	久宝寺40次(K H2001-40)	〃	北亀井2丁目	H14/1/15~7/29	森本めぐみ 2002 「14.久宝寺遺跡第40次調査(K H2001-40)」『平成13年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
42	多目的広場	(財)大文研セ	亀井	H13/2/27~H14/3/22	西村歩 2001 「久宝寺1号墳の調査成果」『大阪府埋蔵文化財研究会(第43回)資料』
43	水処理施設(その1・その2)	〃	亀井	H13/4/20~H14/2/28	未報告
44	竜華東西線(その2)	〃	亀井	H14/1/22~H14/7/31	未報告
45	跡部(S 56調査)	市教委	春日町1丁目57	S 56/11/9~11/19	高木真光 1983.3 「第6章 跡部遺跡発掘調査概要報告」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概報1980・1981』八尾市教育委員会
46	跡部(A T 82-1)	(財)八文研	跡部本町1丁目3	S 57/10/1~10/5	西村公助 1983 「11.跡部遺跡」『昭和57年度における埋蔵文化財発掘調査』その成果と概要 八尾市教育委員会
47	跡部(A T 88-4)	〃	跡部本町1丁目4-1	S 63/10/1~10/22	西村公助 1989 「19.跡部遺跡(第4次調査)」『八尾市文化財調査研究会年報 昭和63年度』(財)八尾市文化財調査研究会報告25(財)八尾市文化財調査研究会
48	跡部(A T 89-5)	〃	春日町1丁目45-1	H1/10/16~11/30	安井良三他 1991 「跡部遺跡発掘調査報告」一大阪府八尾市春日町1丁目出土銅鐸一(財)八尾市文化財調査研究会報告31(財)八尾市文化財調査研究会
49	跡部(A T 92-7)	〃	春日町1丁目47・48	H4/7/9~8/10	原田昌則 1993 「I跡部遺跡(A T 92-7) 第7次調査」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』(財)八尾市文化財調査研究会報告39(財)八尾市文化財調査研究会
50	跡部(A T 92-9)	〃	春日町1丁目	H4/10/7~10/13	原田昌則 1993 「III跡部遺跡(A T 92-9) 第9次調査」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』(財)八尾市文化財調査研究会報告39(財)八尾市文化財調査研究会
51	跡部(A T 93-14)	〃	跡部北の町1丁目	H5/11/18~12/10	高萩千秋 1994 「I跡部遺跡第14次調査(A T 93-14)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告42』(財)八尾市文化財調査研究会
52	跡部(A T 94-17)	〃	太子堂1丁目	H6/9/16~11/18	成海佳子 1997 「2.跡部遺跡第17次調査(A T 94-17)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告58』(財)八尾市文化財調査研究会
53	跡部(A T 96-23)	〃	春日町4丁目4番	H9/2/21~3/31	原田昌則 1997 「2.跡部遺跡(A T 96-23) 第23次調査」『平成8年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
54	跡部(A T 98-28)	〃	跡部本町4丁目	H10/6/29~7/6	森本めぐみ 2000 「1跡部遺跡第28次調査(A T 98-28)」『平成11年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
55	亀井(K M96-4)	〃	亀井町1・2丁目	H6/2/12~2/21	古川晴久 1998 「V亀井遺跡 第4次調査(K M96-4)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告58』(財)八尾市文化財調査研究会

凡例 大阪府教育委員会〔府教委〕 八尾市教育委員会〔市教委〕 (財)大阪文化財センター〔(財)大文セ〕

(財)大阪府文化財研究センター〔(財)大文研セ〕 H14/4(財)大阪府文化財センターに名称変更

(財)八尾市文化財調査研究会〔(財)八文研〕

## 第3章 調査概要

### 第1節 調査の方法と経過

今回の発掘調査は、旧国鉄の竜華操車場跡地で計画された「八尾都市計画事業大阪竜華都市拠点地区画整理事業」に伴うものである。平成9年度以降、基盤整備事業の一環として、主に道路部分を中心とした発掘調査が継続して実施されており、平成11・12年度については、久宝寺遺跡第29次調査(KH99-29)として道路築造工事部分(竜華東西線4工区)の延べ352.4mを調査対象とした。

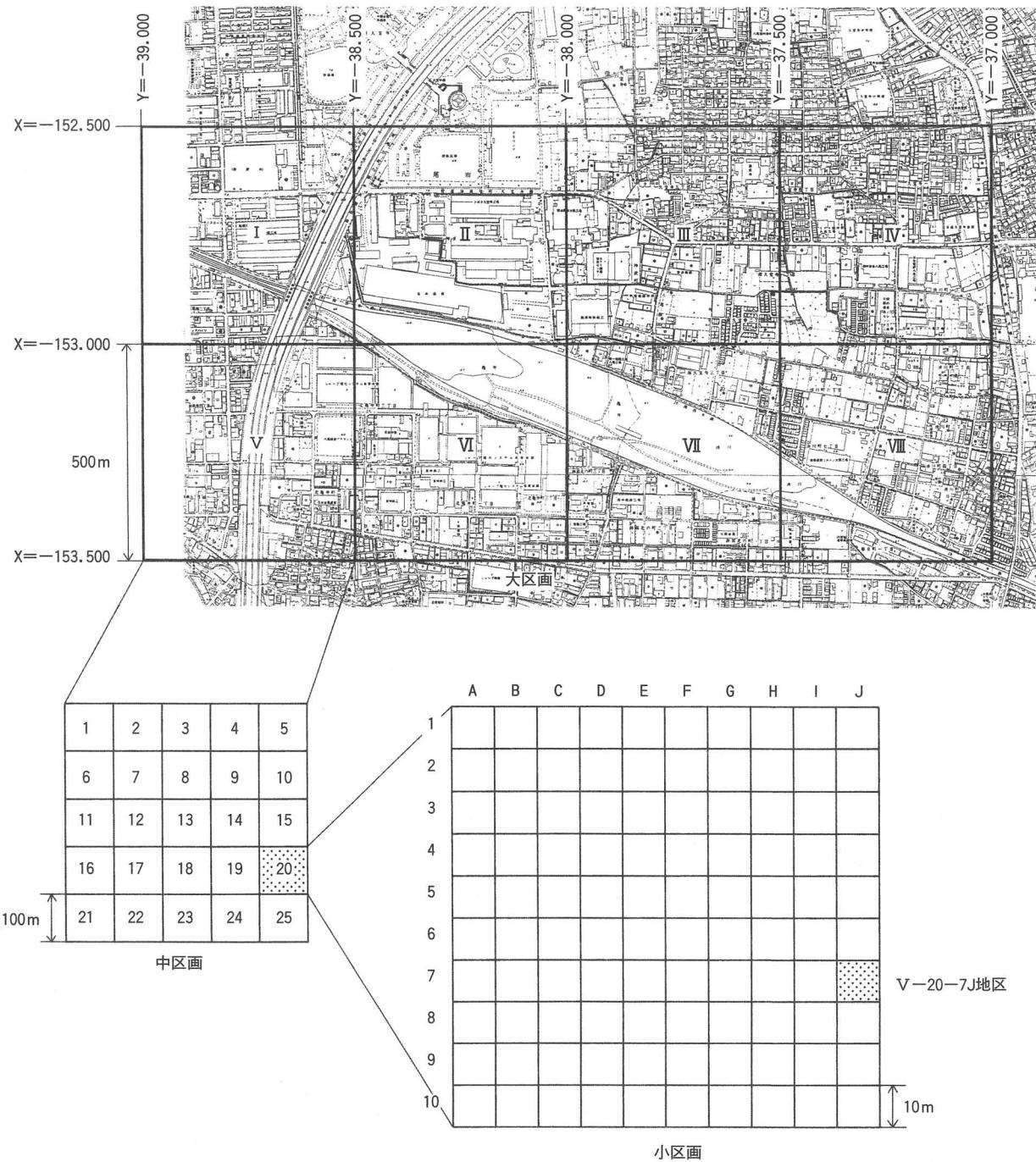
調査地は、旧竜華操車場跡地の南東部に位置する。調査の対象となる規模は、東西長352.4m×南北長11.6~17.2mで、面積4910m<sup>2</sup>を測る東西に長い調査区である。調査では全体を鋼矢板打設によって4つの調査区に分割し、西側から久宝寺遺跡第29次-1調査区(KH99-29-1)~第29次-4調査区(KH99-29-4)と呼称した。平成11年度に3調査区の調査を実施し、1・2・4調査区の調査は平成12年度に実施した。各調査区の規模等は下記の表にまとめた。

調査では、八尾市教育委員会作成の埋蔵文化財調査指示書に示された試掘調査の結果を基に深度等を決定した。上部調査として、現地表(T.P.+9.20~9.65m)下1.20~1.38mまでの盛土、現代の作土層を機械掘削した後、以下0.90~1.10mを人力によって掘削し、遺構・遺物の検出に努めた。そして1調査区~3調査区西部においては、上部調査終了後、道路下管路埋設部分を対象として下部調査を実施した。下部調査区は延べ約170m、幅2.5~3.5m、深さ0~0.7mを測り、調査深度は西に行くほど深くなる。なお、各調査区の四方には土層観察用のセクション(幅0.6m)を設定している。

地区割については、竜華操車場跡地全域を含む地域を東西2km、南北1kmについて、国土座標第VI系(原点-東経136°00'、北緯36°00'・福井県越前岬付近)を基準として設定した大区画・中区画・小区画を使用した。これは竜華操車場跡地内において継続する調査に対応する為に、平成9年度に設定したものである。大区画は500m四方で全体を8区(I~VIII)に区分し、北西隅の区画をIとし南東隅をVIIIと呼称した。中区画は大区画を100m単位に25区(1~25)に区分し、北西隅の区画を1とし南東隅を25と呼称した。小区画は中区画を10m単位に区画し、地区の呼称については、東西方向はアルファベット(西からA~J)、南北方向は算用数字(北から1~10)で示し、1A地区~10J地区とした。以上の区分法を使用して、個々の地区表記においては、第3図の凡例で示したような表示方法を取った。なお、小区画内の地点表示については、国土座標値を入れる方法を取った。

第2表 調査区一覧表

地区名	南北幅	東西幅	面積	調査期間	担当者
1調査区	17.2m	75.2m	1293m <sup>2</sup>	平成12年4月3日~7月12日	岡田・道
2調査区	13.2m	92.4m	1220m <sup>2</sup>	平成12年7月21日~11月1日	岡田・小川
3調査区	13.2m	92.4m	1220m <sup>2</sup>	平成11年10月13日~平成12年3月23日	坪田
4調査区	13.2m~11.6m	92.4m	1177m <sup>2</sup>	平成12年4月12日~10月21日	坪田

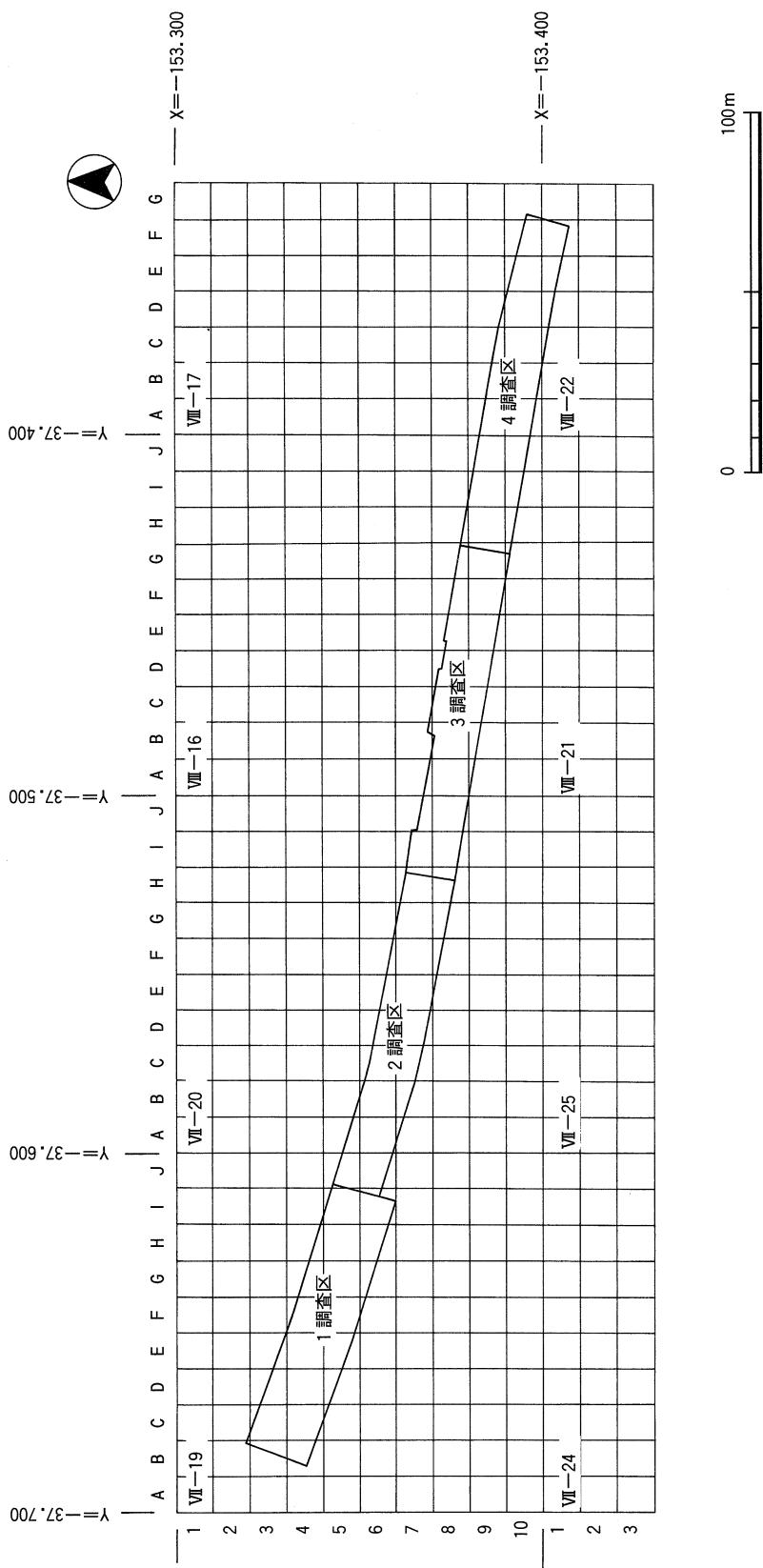


第3図 調査地地区割り模式図

調査面の呼称については、人力による調査で検出された面を上部より「第1面」とした。

なお、本調査では近世初頭以降に構築された島畑が随所で確認されており、島畑に付随する水田を構築する際に大規模な削平を受けた箇所が認められた。このような地点では、調査面と時期との整合が困難であり、同一面で時期幅のある遺構を検出する結果となった。

遺構番号については、報告書作成段階に各調査区の調査面を統一した後、遺構毎に1調査区から順番に通し番号を付けた。遺構名は、遺構略号の後に面番号を付与し、3桁の遺構番号と合わせて表記した。[凡例 S D 1001]。



第4図 調査区設定図( $S=1/2000$ )

現地調査での面ごとの平面図の作成は、各調査区あたり2回のクレーン使用による航空写真測量(1/20・1/100)と平板測量(1/50・1/100)を併用した。また調査区周囲の地層断面図は1/20とし、主な遺構の平・断面図については1/10・1/20に統一した。方位は座標北を採用した。高さの基準は東京湾標準潮位(T.P.)を適用した。

調査の結果、上部調査では弥生時代後期～近世に比定される遺構・遺物を検出した。下部調査では、2調査区で弥生時代中期末に比定される埋甕を検出した他、弥生時代後期～古墳時代前期の畦畔状遺構や自然河川を検出した。出土遺物は全体でコンテナ(40×60×20cm)約120箱を数える。

## 第2節 基本層序(第5図～第8図)

調査地全体を通しての北壁の地層を、層相から9層に分類し、基本層序(第0層～第Ⅷ層)とした。また個々の地層名は調査区毎に算用数字で示したが、小規模な遺構の埋土については省略している。なお下部調査を実施した1調査区から3調査区については、下部調査区北壁断面を投影して合成している。このため断面図の上部・下部は直接には連続しない。

**第0層**：竜華操車場造成時の客土である。層厚0.6～1.6mを測る。上面の標高は1調査区西端でT.P.+9.2m、4調査区東端でT.P.+10.2mを測る。

**第I層**：竜華操車場造成直前の作土で、調査地全域に見られる。層相はシルト～シルト質粘土で、東部ほど砂粒の含有が顕著となる。色調は5G3/1暗緑灰色。層厚約0.2m、上面の標高はT.P.+8.3～8.6mを測る。

**第II層**：近世～近代の耕作に伴う地層を包括して第II層とした。島畠盛土及び上部の作土、そして島畠間の水田作土に当り、調査地全域に見られる。島畠部の層相は細粒砂～細礫混じり粘土質シルトで、色調は5Y4/2灰オリーブ色。酸化鉄・マンガン斑が顕著に認められ、盛土はよく締まる。作土はややグライ化する。層厚は0.1～0.7mを測り、最大で4層に分層が可能である。水田作土部の層相は細粒砂～粗粒砂混じり粘土質シルトでグライ化が著しい。色調は10GY5/1緑灰色。層厚は0.1～0.4mを測り、2～3層に分層が可能である。第II層上面及び下面、すなわち島畠上面及び水田作土下面が第1面に当る。

**第III層**：層相は細粒砂～細礫混じりシルトで、酸化鉄分・マンガン斑が顕著に認められるよく搅拌された地層である。色調は2.5Y6/1黄灰色。第1面の島畠下位では良好に遺存するが、水田部では耕作に伴う改変を受けている所が多く、グライ化している部分がある。層厚は0.1～0.2mを測り、上面の標高はT.P.+7.5～8.3mを測る。平安時代頃までの遺物を含んでいる。第III層上面・下面、及び一部層中で第2面を検出した。

**第IV層**：層相はシルト～粘土質シルトである。酸化鉄分・マンガン斑の沈着が顕著で、部分的に細粒砂～細礫を含み土壤化が著しい。色調は10YR6/1褐灰色。層厚は0.1～0.4mを測り、上面の標高は1調査区がT.P.+7.7mで、東に行くほど高くなり4調査区ではT.P.+8.0mを測る。奈良時代までの遺物を含んでいる。第IV層上面、及び層中で第3面を検出した。

**第V層**：極細粒砂～粘土質シルトの互層を基調とする層相で、随所でほぼ水平なラミナが観察

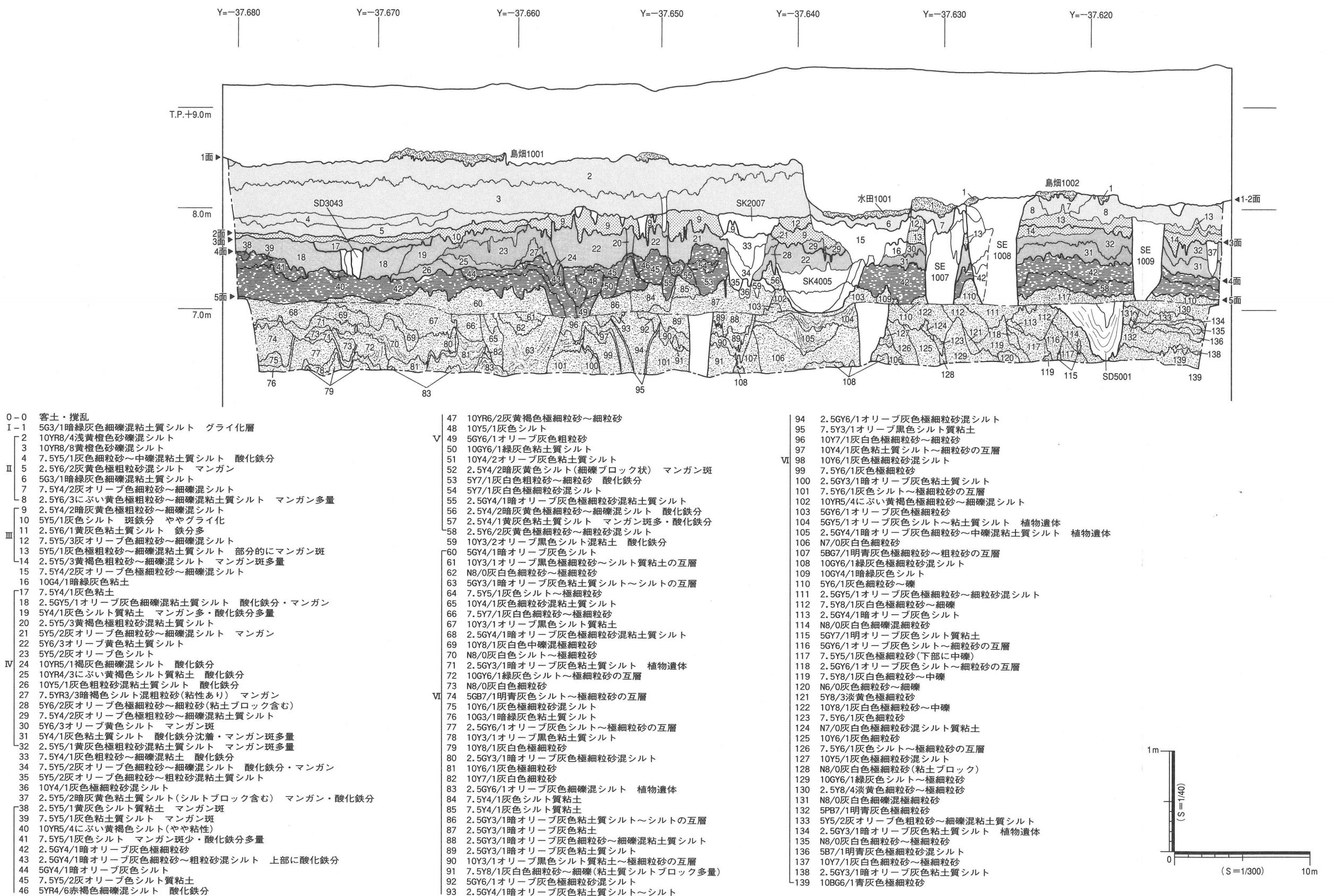
される水成層である。上部は酸化鉄分・マンガン斑を多く含み土壌化している。2調査区東部～3調査区中央部では細粒砂～粗粒砂の互層が優勢となる。また1調査区では小規模な流路の痕跡と思われる細粒砂～粗粒砂の落ちが数箇所で見られる。色調は2.5Y6/1黄灰色～5GY5/1オリーブ灰色。層厚0.1～0.4mを測り、上面の標高は西部でT.P.+7.4m、東部ではT.P.+7.9mで、第IV層と同様に東が高い。古墳時代後期までの遺物を含んでいる。第V層上面で第4面を検出した。なお第V層以下は4調査区東部ではN R 4001に削平され存在しない。

**第VI層**：層厚0.3～0.8m以上を測る水成層。色調は5GY4/1暗オリーブ灰色～N4/0灰色である。

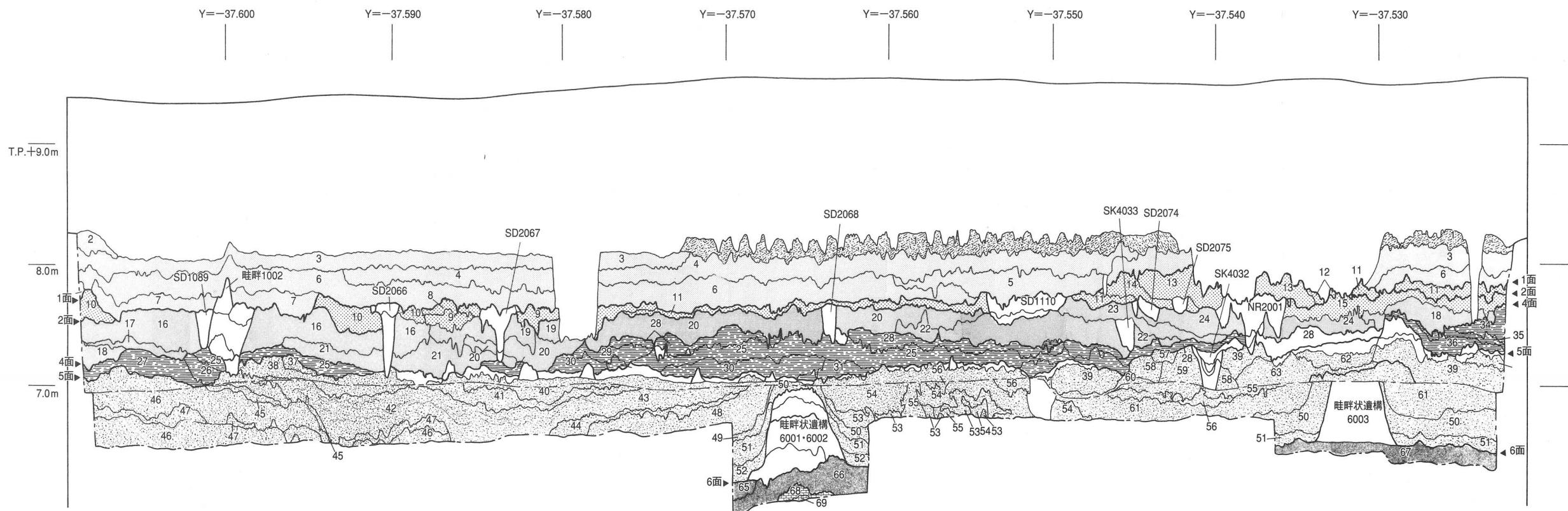
1調査区～2調査区西半ではシルト～中粒砂が複雑に堆積し、部分的に細礫を含んでいる。頻繁に流路を変えた河川の堆積であろう。対照的に2調査区東半～4調査区では粘土～シルトの互層状で、炭化植物を豊富に含んでいる。ほぼ水平なラミナが見られる安定した層相から、沼沢地状の環境であったことが窺える。後者の上面には第5面で検出した水田が営まれる。上面の標高は西部でT.P.+7.1m、東部ではT.P.+7.5mを測る。古墳時代前期布留式期までの遺物を少量含んでいる。

**第VII層**：2調査区中央から東で確認した。上面の標高は2調査区中央でT.P.+6.2m、4調査区東部ではT.P.+7.1mを測る。層厚は2調査区中央で約0.2mを測る。層相はシルト質粘土～粘土で、部分的に細粒砂～細礫を含む。ラミナ構造は認められず細かい植物遺体を多く含んでおり、土壌化層と考えられる。色調は5GY4/1暗オリーブ灰色～5Y3/1オリーブ黒色で、土壌化のためか一見黒褐色を呈している。弥生時代中期～後期の遺物を少量含んでいる。上面が第6面である。

**第VIII層**：2調査区中央でのみ確認した。上面の標高はT.P.+6.1mを測る。層相はシルト～中粒砂の互層で、色調は2.5GY4/1暗オリーブ灰色。層厚は2調査区中央で約0.2mを測る。河川堆積層と考えられる。



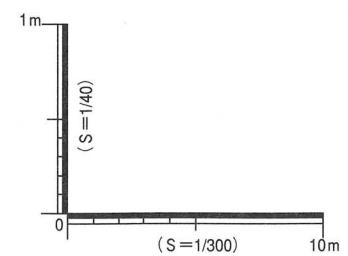
第5図 1調査区基本層序



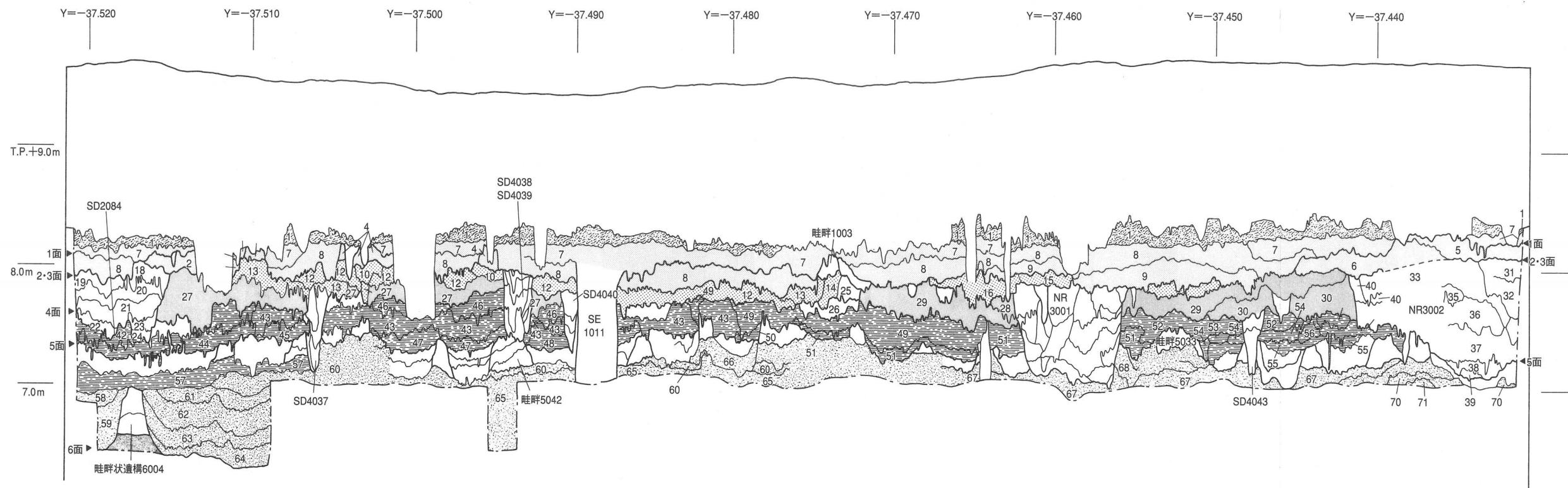
0-0 客土・攪乱  
 I-1 N3/0暗灰色シルト  
 2 7.5YR7/3にぶい橙色砂礫混シルト  
 3 2.5Y5/1黄灰色シルト  
 4 10GY6/1緑灰色シルト  
 5 7.5Y6/2灰オーブ色砂礫混シルト  
 6 10G5/1緑灰色シルト  
 7 7.5YR5/8明褐色シルト 酸化鉄分多量  
 8 7.5YR7/6橙色砂礫混シルト  
 9 7.5YR6/1褐灰色砂礫混シルト(堅く締まる) マンガン斑多量  
 10 10Y6/1灰色粘土質シルト  
 11 10YR6/8明黄褐色砂礫混シルト  
 12 2.5G5/1オーブ灰色砂礫混シルト  
 13 2.5Y8/4淡黄色砂礫混シルト  
 14 10YR7/6明黄褐色砂礫混シルト  
 15 7.5YR8/4浅黃橙色砂礫混シルト  
 16 7.5YR6/3にぶい褐色シルト  
 17 N6/0灰色シルト～極細粒砂 上部に酸化鉄分  
 18 10YR6/2灰黄褐色シルト(粘性強い)  
 19 7.5YR4/3褐色シルト マンガン斑多量  
 20 5YR3/1黒褐色シルト  
 21 5B4/1暗青灰色シルト 炭化植物含む  
 22 7.5YR7/8黄橙色シルト(管状マンガン)  
 23 7.5YR2/3極暗褐色砂礫混シルト

L-24 7.5YR4/2灰褐色砂礫混シルト  
 25 10YR6/2灰黄褐色シルト  
 26 10BG4/1暗青灰色シルト質粘土 植物遺体少量  
 27 7.5YR5/1褐灰色シルト マンガン斑  
 28 10YR4/3にぶい黄褐色シルト マンガン斑多量  
 29 2.5Y4/1黄灰色粘土質シルト  
 30 7.5YR7/4にぶい橙色砂質シルト  
 31 10BG7/1明青灰色砂質シルト  
 32 N7/0灰白色中粒砂  
 33 5PB7/1明青灰色極細粒砂  
 34 10YR7/6明黄褐色中粒砂～粗粒砂 酸化鉄分多量  
 35 2.5Y8/4淡黄色～2.5GY7/1明オーブ灰色砂質シルト  
 36 5G2/1緑黒色粘土質シルト ラミナ状に植物遺体  
 37 2.5Y4/1黄灰色シルト  
 38 10BG5/1青灰色砂質シルト 酸化鉄分  
 39 N4/0灰色粘土 ラミナ状に植物遺体  
 40 10BG6/1青灰色粘土質シルト～シルト  
 41 2.5Y8/4淡黄色～10BG7/1明青灰色極細粒砂  
 42 N4/0灰色粘土 ラミナ状に植物遺体  
 43 5G5/1オーブ灰色極細粒砂混シルト  
 44 10BG6/1青灰色砂質シルト  
 45 10BG3/1暗青灰色シルト 植物遺体  
 46 N8/0灰白色シルト～中粒砂  
 47 N4/0灰色粘土質シルト

48 10BG7/1明青灰色砂質シルト  
 49 N4/0灰色粘土質シルト  
 50 10BG7/1明青灰色粘土  
 51 N4/0灰色粘土質シルト 植物遺体多量  
 52 N3/0暗灰色シルト ラミナ状に植物遺体  
 53 N7/0灰白色中粒砂  
 54 N4/0灰色粘土質シルト  
 55 N4/0灰色中粒砂混粘土質シルト  
 56 5PB4/1暗青灰色粘土 植物遺体少量  
 57 10GY7/1明緑灰色シルト  
 58 5GY7/1明オーブ灰色シルト  
 59 10BG7/1明青灰色極細粒砂～シルト  
 60 5PB7/1明青灰色砂質シルト  
 61 N4/0灰色粘土 ラミナ状に植物遺体  
 62 5PB6/1青灰色シルト質粘土 管状マンガン  
 63 10BG4/1暗青灰色粘土質シルト ラミナ状に植物遺体  
 64 5PB4/1暗青灰色シルト混粘土 ラミナ状に植物遺体  
 65 5Y3/1オーブ黑色シルト質粘土  
 66 10GY2/1緑黒色粘土  
 67 5B2/1青黑色砂礫混粘土  
 VII 68 2.5GY4/1暗オーブ灰色シルト～極細粒砂  
 VIII 69 5PB7/1明青灰色中粒砂

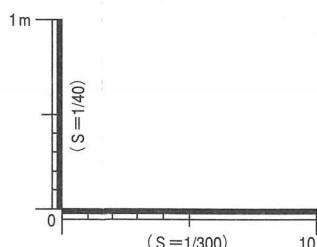


第6図 2調査区基本層序

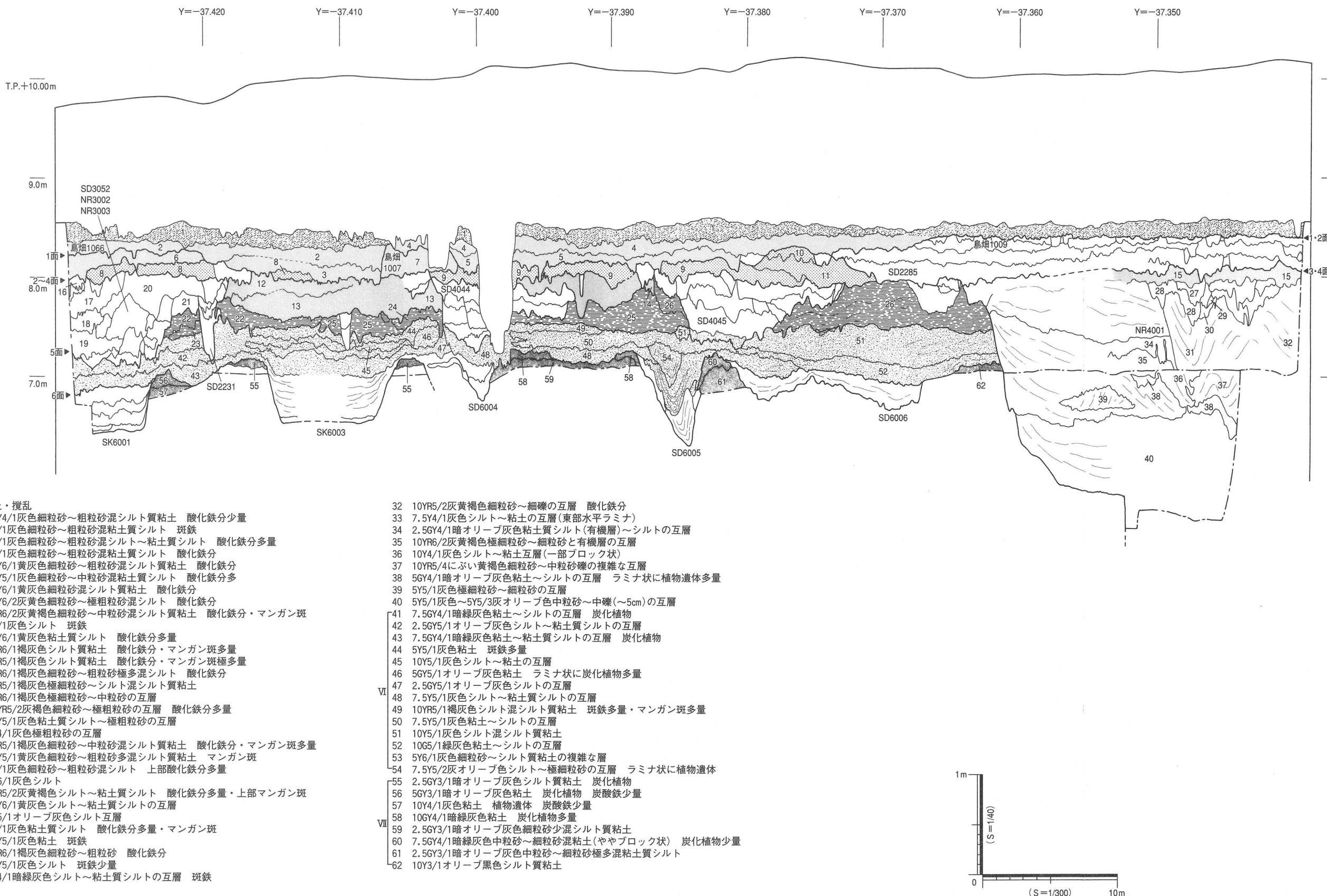


- 0-0 客土・搅乱
- I-1 10BG3/1暗青灰色細粒砂混粘土質シルト  
7.5Y5/1灰色中粒砂～粗粒砂多混シルト(固く締まる) 酸化鉄分  
3 5B5/1青灰色細粒砂～粗粒砂混シルト(固く締まる)  
4 2.5Y6/1黄灰色細粒砂～粗粒砂混シルト質粘土 酸化鉄分  
5 2.5Y6/1黄灰色細粒砂～粗粒砂混シルト マンガン斑・酸化鉄分多量  
II-6 7.5Y5/1灰色細粒砂混シルト 斑鉄少量  
7 5B5/1青灰色細粒砂～粗粒砂混粘土質シルト  
8 10BG5/1青灰色細粒砂～粗粒砂混粘土質シルト  
9 2.5GY5/1オリーブ灰色粗粒砂～細礫シルト 酸化鉄分少量  
10 5Y6/1灰色粗粒砂～中粒砂混粘土質シルト 斑鉄多量  
11 10YR6/1褐灰色シルト～細粒砂(ブロック状) マンガン  
12 2.5Y6/1黄灰色細粒砂～中粒砂混シルト 酸化鉄分多量  
13 2.5Y6/1黄灰色細粒砂～粗粒砂多混シルト 酸化鉄分多量  
III-14 10YR5/2灰黄褐色細粒砂～中粒砂混シルト 酸化鉄分多量・マンガン斑少量  
15 10YR5/3にぶい黄褐色粗粒砂～細礫混シルト 酸化鉄分多量  
16 2.5Y6/1黄灰色細粒砂～細礫多混シルト 酸化鉄分多量  
17 2.5Y6/2黄灰色粘土質シルト 酸化鉄分多量  
18 10YR5/3にぶい黄褐色細粒砂～粗粒砂多混シルト 酸化鉄分多量  
19 5Y5/2灰オリーブ色細粒砂～極粗粒砂多混シルト質粘土 酸化鉄分多量  
20 2.5Y5/1黄灰色細粒砂～極粗粒砂少混粘土 斑鉄多量・マンガン斑少量  
21 10YR5/1褐灰色細粒砂～粗粒砂混粘土質シルト 斑鉄・マンガン斑  
22 2.5Y5/1黄灰色中粒砂～極粗粒砂多混シルト質粘土 斑鉄多量  
23 10YR5/2灰黄褐色細粒砂～粗粒砂混シルト質粘土 斑鉄・マンガン斑  
24 7.5Y4/1灰色シルト粘土(ブロック状) 上部斑鉄  
25 10YR5/2灰黄褐色粗粒砂～細礫多混粘土質シルト 酸化鉄分多量・マンガン多量  
26 10YR6/1褐灰色中粒砂～粗粒砂混粘土質シルト 酸化鉄分多量・マンガン多量  
IV-27 10YR5/1褐灰色細粒砂～極粗粒砂ブロック混粘土質シルト 酸化鉄分・マンガン斑  
28 10YR6/1褐灰色中粒砂～細礫多混シルト マンガン多量  
29 10YR5/1褐灰色粘土質シルト 酸化鉄分多量・マンガン多量  
30 10YR5/1褐灰色粘土質シルト 上部に炭化植物少量 酸化鉄分多量・マンガン斑  
31 10YR6/1褐灰色細粒砂～粗粒砂少混シルト 酸化鉄分  
32 10YR6/1褐灰色中粒砂～細礫少混粘土質シルト 酸化鉄分  
33 10YR6/1褐灰色中粒砂～細礫多混シルト 酸化鉄分多量  
34 10YR6/1褐灰色シルト質粘土～極粗粒砂の互層  
35 2.5Y6/2灰黄褐色極細粒砂～シルトの互層 酸化鉄分多量  
36 10YR5/2灰黄褐色シルト～細礫の複雑な互層 酸化鉄分多量

- 37 2.5Y6/1黄灰色細粒砂～細礫の互層(下部にシルトブロック)  
38 2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘土質シルト(ブロック状)  
39 5GY5/1オリーブ灰色細粒砂～粗粒砂の互層  
40 2.5Y5/2暗灰黃褐色細粒砂～細礫少混粘土質シルト 酸化鉄分多量・マンガン斑少量  
41 7.5YR6/2灰褐色中粒砂～粗粒砂ブロック混シルト 酸化鉄分多量・マンガン斑  
42 2.5Y5/2暗灰黃褐色極細粒砂～極粗粒砂(ラミナ不明瞭) 酸化鉄分多量  
43 10YR6/2灰黄褐色シルト～極粗粒砂の互層 下部酸化鉄分多量・上部マンガン多量  
44 10GY4/1暗綠灰色粘土質シルト～シルトの複雑な堆積 斑鉄極少量  
45 2.5Y5/3黄褐色粘土質シルト 斑鉄多量・マンガン斑  
46 10YR6/2灰黃褐色細粒砂～中粒砂混粘土質シルト 酸化鉄分少量・マンガン斑多量  
47 7.5Y4/1灰色シルト～極細粒砂の互層  
48 10GY4/1暗綠灰色シルト質粘土 斑鉄少量  
49 2.5Y6/1黄灰色粘土質シルト～極細粒砂の互層 酸化鉄分多量・上部マンガン多量  
50 10YR6/1褐灰色シルト混シルト質粘土 炭化植物少量・管鉄多量・マンガン  
V-51 2.5Y6/1黄灰色粘土質シルト～シルトの互層 斑鉄多量  
52 10YR6/2灰黃褐色粘土質シルト 酸化鉄分多量・マンガン斑  
53 10YR6/1褐灰色シルト混粘土質シルト 管鉄多量・マンガン斑  
54 2.5Y6/2灰黃褐色シルト 上部酸化鉄分・マンガン少量  
55 5Y4/1灰色シルト質粘土 炭化植物多量・斑鉄  
56 10YR5/1褐灰色シルト質粘土 酸化鉄分多量・上部マンガン斑多量  
57 5BG4/1暗青灰色粘土 ラミナ状に炭化植物多量  
58 2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘土 ラミナ状に炭化植物多量  
59 5GY4/1暗オリーブ灰色粘土～粘土質シルトの互層 ラミナ状に炭化植物多量  
VI-60 2.5GY5/1オリーブ灰色シルト～粘土の互層 炭化植物多量  
61 7.5GY4/1暗綠灰色シルト～粘土の互層 ラミナ状に炭化植物多量  
62 2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘土 シルトラミナ 植物遺体  
63 7.5Y4/1灰色シルト質粘土 ラミナ状に炭化植物  
64 2.5GY4/1暗オリーブ灰色細粒砂～粗粒砂少混粘土 植物遺体  
65 5GY4/1暗オリーブ灰色粘土～シルト質粘土 ラミナ状に炭化植物多量  
66 2.5Y5/1黄灰色粘土(シルトブロック含む) 炭化植物多量・斑鉄  
67 7.5Y4/1灰色粘土質シルト～極細粒砂互層 酸化鉄分少量  
68 5GY3/1暗オリーブ灰色粘土(シルトブロック含む) 炭化植物多量  
69 7.5Y4/1灰色シルト質粘土～シルトの互層 鉄分少  
70 7.5Y4/1灰色シルト 酸化鉄分少量  
VII-71 7.5GY4/1暗綠灰色粘土質シルト ラミナ状に炭化植物多量 炭酸鉄粒  
72 5GY4/1暗オリーブ灰色細粒砂～粗粒砂混粘土



第7図 3調査区基本層序



第8図 4調査区基本層序

### 第3節 検出遺構と出土遺物

#### 1) 各調査面の概要

##### 第1面（第9・10図、図版三～五）

1調査区～4調査区で検出した。現地表下1.4～1.9m(T.P.+7.8～8.3m)前後に存在する第Ⅲ層上面を構築面としている。第1面では、中河内地区の近世時期に特有な「島畠」で構成される耕地形態が全域で検出されている。従って、検出された遺構の大半は近世初頭～昭和初期に至る生産域に関連した遺構であるが、「島畠」の構築に際して削平を受けた水田部分の下位面からは、平安時代前半以降の遺構が一部で検出されている。

出土遺物については、耕地改変による攪拌が随所で行われたことに起因して、細片化が進行した古墳時代中期～近世に至る遺物が混在して出土している。第1面で検出した遺構には、井戸12基(S E 1001～S E 1012)、土坑14基(S K 1001～S K 1014)、溝251条(S D 1001～S D 1251)、小穴23個(S P 1001～S P 1023)、島畠9基(島畠1001～島畠1009)、水田9筆(水田1001～水田1009)、畦畔3条(畦畔1001～畦畔1003)がある。

##### 井戸(S E)

井戸は4調査区を除く調査区から12基を検出している。全て農耕用の井戸と推定される。特に、1調査区の中央部から東部にかけて集中する部分が認められた。基本的には島畠上面の端部分に構築された井戸と、水田部分に構築された井戸がある。前者は井戸枠や上部に瓦枠を持つものが多く、後者は素掘り井戸に限定される。前者については、大蔵永常による近世農書である『綿圃要務』『農具便利論』の綿作りの風景の中に描かれている「撥ね釣瓶」を伴う井戸と推定されるものである。時期的には、同様な形態の井戸が多数検出されている大阪府東大阪市・八尾市にまたがる池島・福万寺遺跡の例では、大和川の付け替えらえる江戸時代中期の宝永元年(1704)以降のものとされている。後者については、埋土からみて短期間のみの使用が想定され、旱魃時に緊急に開削された井戸であった可能性がある。なお、井戸側を伴うものについては、平面面図を掲載した。

##### S E 1001

1調査区北西部のVII-19-3 D・E地区で検出した。円形を呈する素掘り井戸で、径1.4～1.5m、深さ0.9mを測る。埋土は逆台形を呈する断面形状に沿って粘土質シルトを中心とする8層が堆積している。遺物は上層から土師器、須恵器の破片が極少量出土しているが、時期を明確にし得たものはない。

##### S E 1002

1調査区中央部のVII-19-4 D・E地区で検出した。隅丸方形で、掘方断面が逆台形を呈する素掘り井戸である。規模は、長辺1.6m、短辺1.35m、深さ0.53mを測る。埋土は5層から成るが一部はブロックを含む不均質な層相である。遺物は上層から、土師器、須恵器の破片が少量出土しているが、時期を明確にし得たものはない。

##### S E 1003

1調査区北中部のVII-19-4 G地区で検出した。素掘り井戸である。掘方の東部はS K 1008によって切られるが、平面の形状はほぼ円形を呈するものと思われる。規模は、径2.5m前後を測る。掘方断面の形状は西部の一部が袋状を呈する。深さについては、検出面から0.6m前後を掘削

した時点では湧水が著しく、さらに周壁が崩壊したことから掘削を断念したため詳細は不明である。埋土はシルト～粘土質シルトの6層から成り、東部からの漸次的な埋戻しが想定される。遺物は上層から土師器壺・甕・高杯、国産陶磁器では瀬戸美濃焼皿・肥前系碗の各破片が出土した。遺構の構築時期は、近世中葉以降が推定される。

#### S E 1004

1調査区中央部のVII-19-4 F・G地区で検出した。径1.25m前後を測る円形の掘方の中央部に、径0.7m前後の桶を井戸側とした井戸である。井戸側に使用された桶の竹製箍の一部が残存していたが、桶を構成する板材は全て抜かれていた。断面形状は逆台形で、深さ0.45mを測る。埋土は掘方内が青灰色粘土質シルト、井戸側内は上層が黒褐色シルト、下層は青灰色砂質シルトである。遺物は井戸側内埋土上層の1層から国産陶磁器類のほか、屋瓦類が極少量出土している。遺構の構築時期は、近世中葉以降が推定される。

#### S E 1005

1調査区中央部のVII-19-4・5 G地区で検出した。南北に長い楕円形を呈する素掘り井戸である。規模は長径4.0m、短径2.7mを測る。深さは、検出面から0.6m前後まで掘削した時点で多量の湧水のため掘削を中止せざるを得なかつたため詳細は不明である。なお掘方断面の形状は一部袋状を呈する部分がある。埋土は8層に分層が可能であるが、互層が中心の層相が大半であり、短期間に埋戻されたものではないことがわかる。遺物は上層から17世紀前半代の京焼碗の完形品が1点出土したほか、土師器皿の破片が少量出土している。

#### S E 1006

S E 1003の東側に隣接している。円形を呈する素掘り井戸である。規模は径3.0m前後を測る。深さについては、検出面から0.6m前後まで掘削した時点でS E 1003と同様、著しい湧水のため底部まで掘削ができなかつたので詳細は不明である。埋土は検出部分で3層が確認され、最下層を除く上部層はブロックを含む不均質なもので、短期間に埋戻しが行われたようである。遺物は上層から陶磁器や平瓦の破片が極少量出土している。遺構の構築時期は、近世中葉以降が推定される。

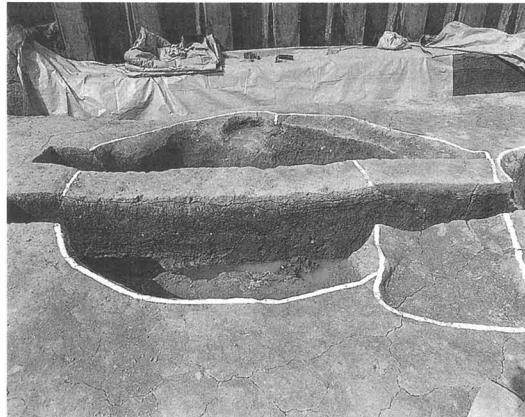


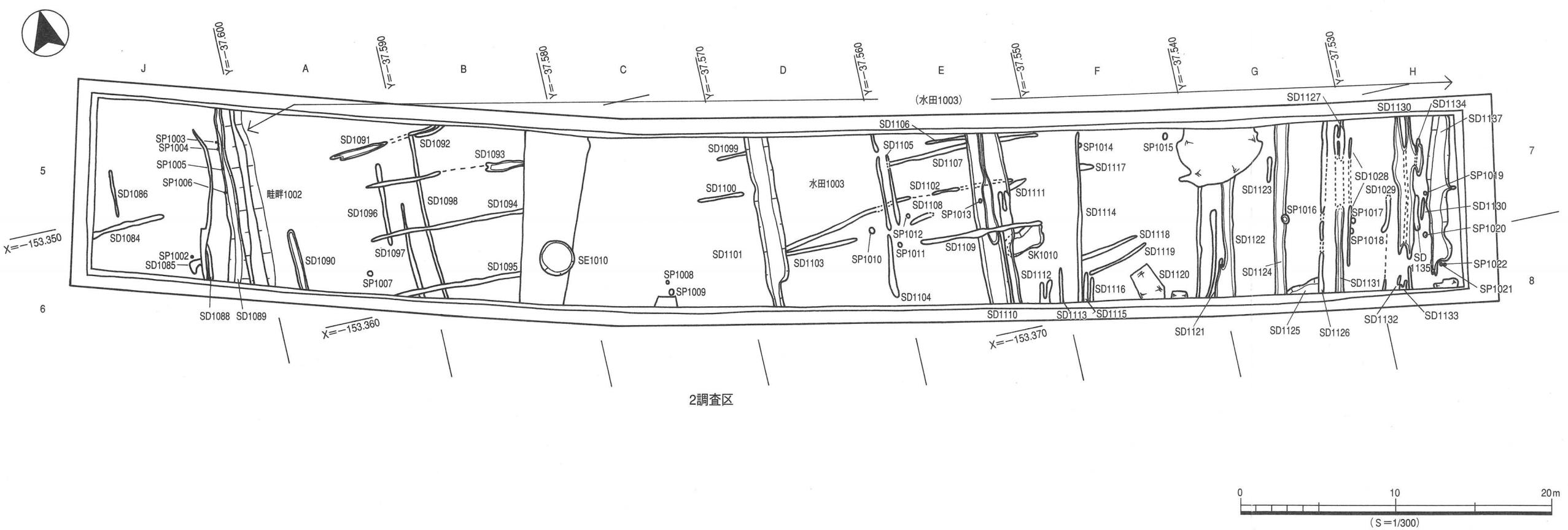
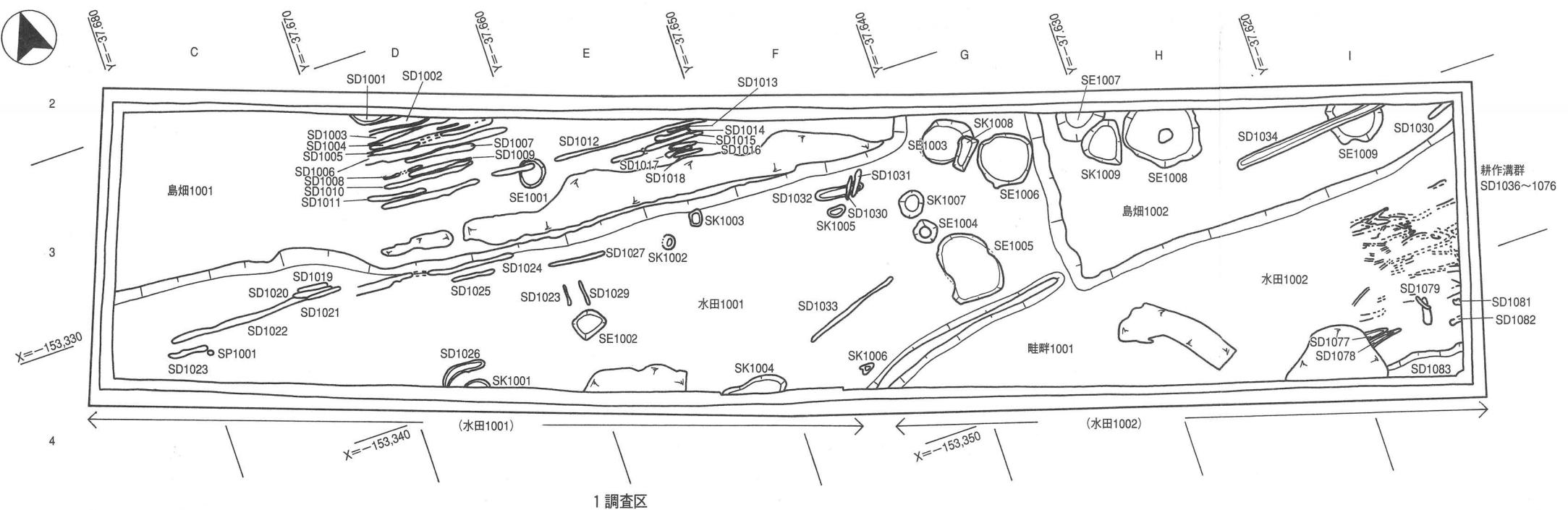
写真2 S E 1003・SK 1008検出状況(南から)



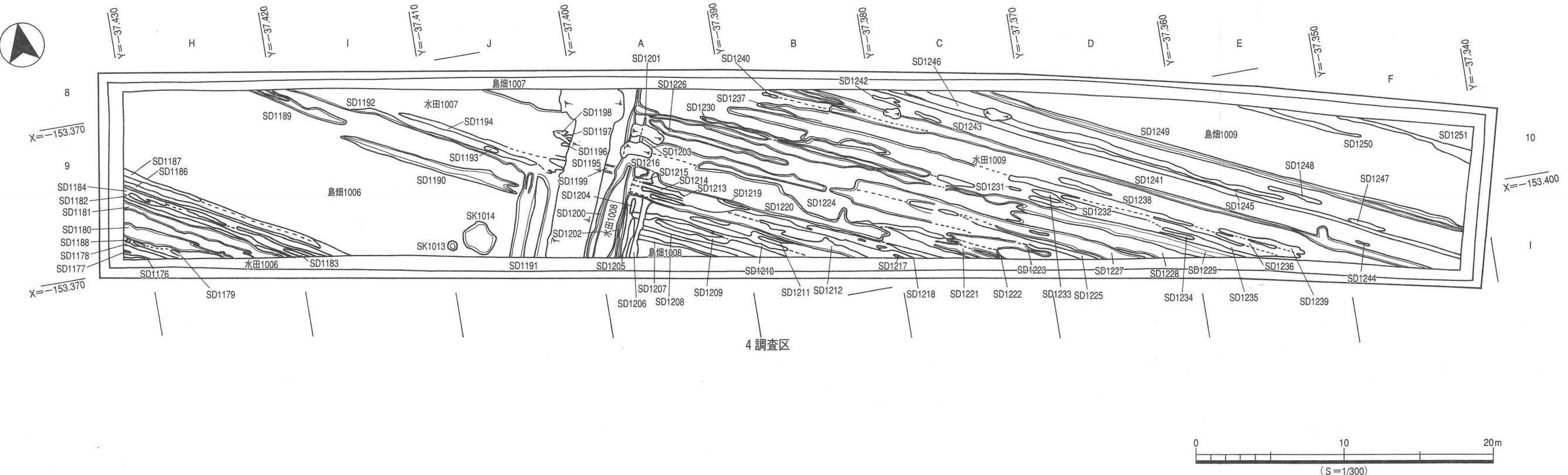
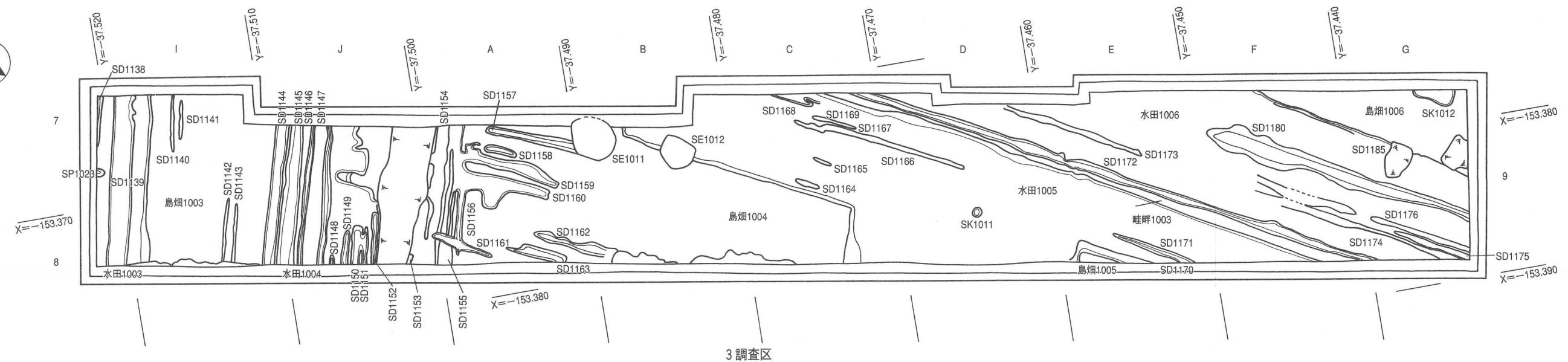
写真3 S E 1005検出状況(南から)



写真4 S E 1006検出状況(南から)



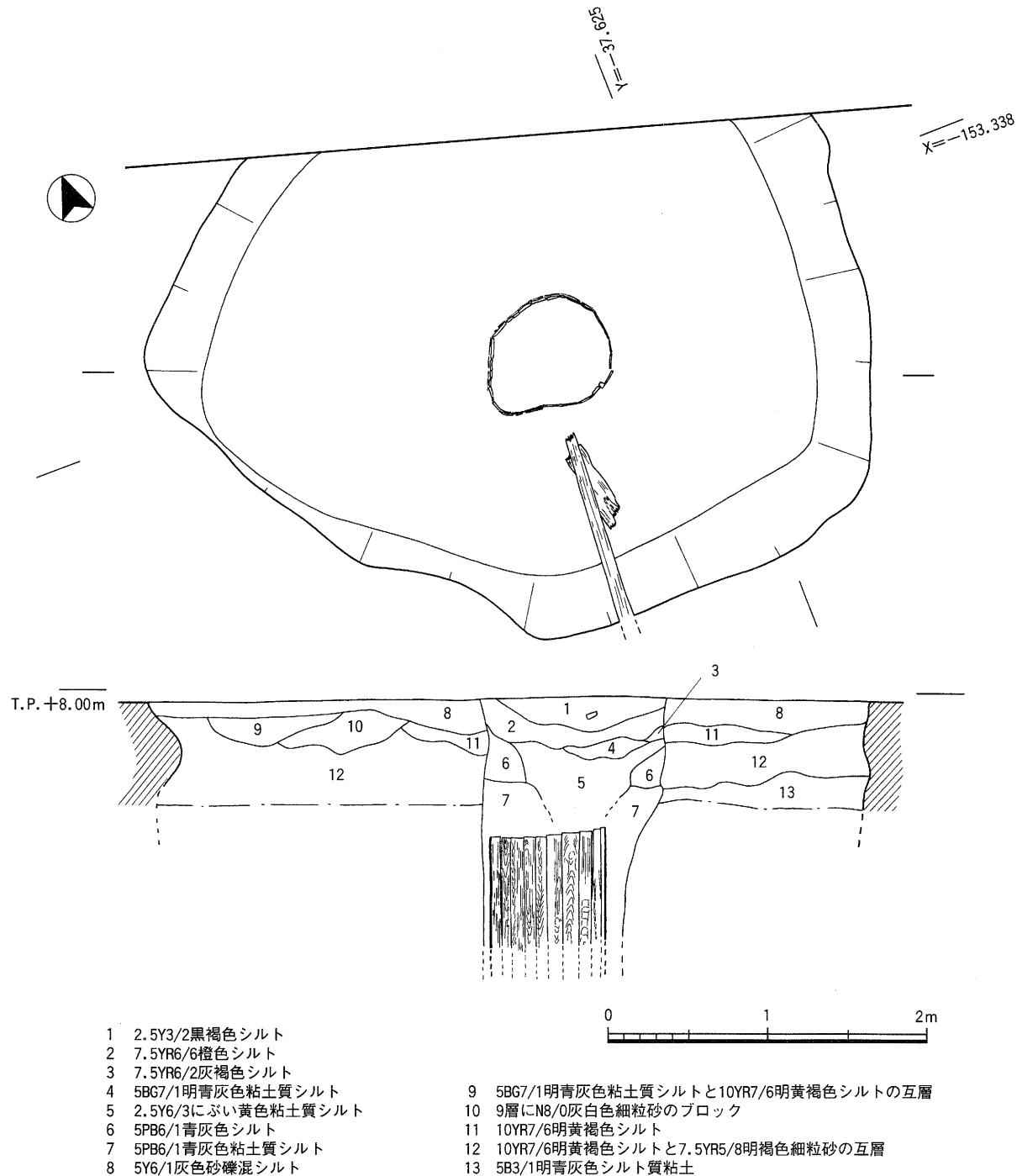
第9図 1・2調査区 第1面検出遺構平面図



第10図 3・4調査区 第1面検出遺構平面図

### S E 1007

1 調査区北東部のⅦ-19-4 G・H地区で検出した。位置的には島畠1002の西辺にあたり、南部はS K 1009に切られている。北部が調査区外に至るため全容は不明であるが、井戸側については、抜取った痕跡が断面から窺える。検出部分で、東西幅2.7m、南北幅1.7m、深さ0.85mを測る。埋土は井戸側内と推定されるところが明青灰色粘土質シルトと明黄褐色砂質シルトの互層である。一方、掘方にあたるところは上層がオリーブ黒色砂礫混シルト、下層が青灰色シルトの2層に分層される。遺物は出土していない。



第11図 S E 1008平面図



写真5 S E 1008検出状況(北から)



写真6 S E 1008細部(西から)

#### S E 1008 (第11図、図版三)

1調査区北東部のVII-19-4 H地区で検出した。S E 1007と同様、島畠1002内に位置する。円形を呈する掘方で北部は調査区外に至る。検出部分で東西幅4.56m、南北幅3.15mを測る。井戸側は掘方のほぼ中央部に設置されており、下部は桶、上部は井戸側用瓦を使用すると推定されるが、上部の井戸側は調査時点では抜かれており、その一部が下部井戸側から出土している。また、掘方内の南部には幅0.15m、高さ0.1m、残存長約1.4mを測る断面「U」形をした木製の樋管が井戸側の南部に伸びている。ただ、構築レベルは井戸側に近い部分が約0.1m低いことから、井戸側に流入する形をとるものであったことが推定される。検出面から0.7m前後まで掘削した時点で湧水と壁面崩壊の為にそれ以上調査を続行することができなかつたため、本来の深さは不明である。検出できた部分の埋土については、井戸側内がシルト～粘土質シルトを主体とする7層(1～7層)で、掘方内は6層(8～13層)がほぼ水平に堆積している。遺物は井戸側内および掘方内の各層から、土師器の甕や羽釜、肥前系磁器、屋瓦類の破片が少量出土している。遺構の構築時期は、近世中葉以降が推定される。

#### S E 1009

1調査区北東部のVII-19-4・5 I地区で検出した。位置的には島畠1002の南部にあたる。北部が調査区外に至る他、上部はS D 1034に切られている。井戸側は確認されていない。検出部分で、東西幅3.0m、南北幅2.0m、深さ0.9mを測る。埋土は1層で、互層から成る不均質な層相である。遺物は出土していない。

#### S E 1010

2調査区中西部のVII-20-6 B地区で検出した。平面形が円形を呈する素掘りの井戸であるが、上部は削平を受けている。規模は径2.2m、深さ0.8mで底部は湧水層に至っている。掘方はほぼ垂直に掘られており断面形状は方形を呈する。埋土は4層がブロック状に堆積する不均質なもので、短期間に埋戻しが行われたことが想定される。遺物は出土していない。

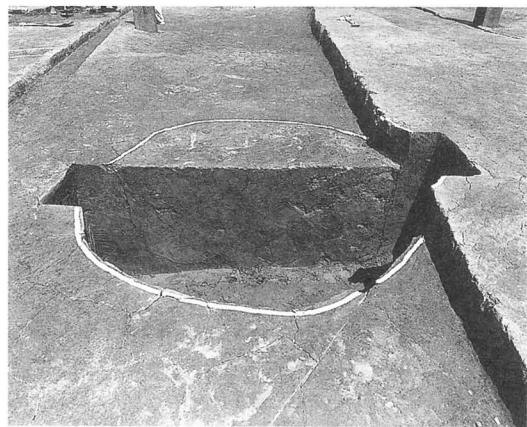


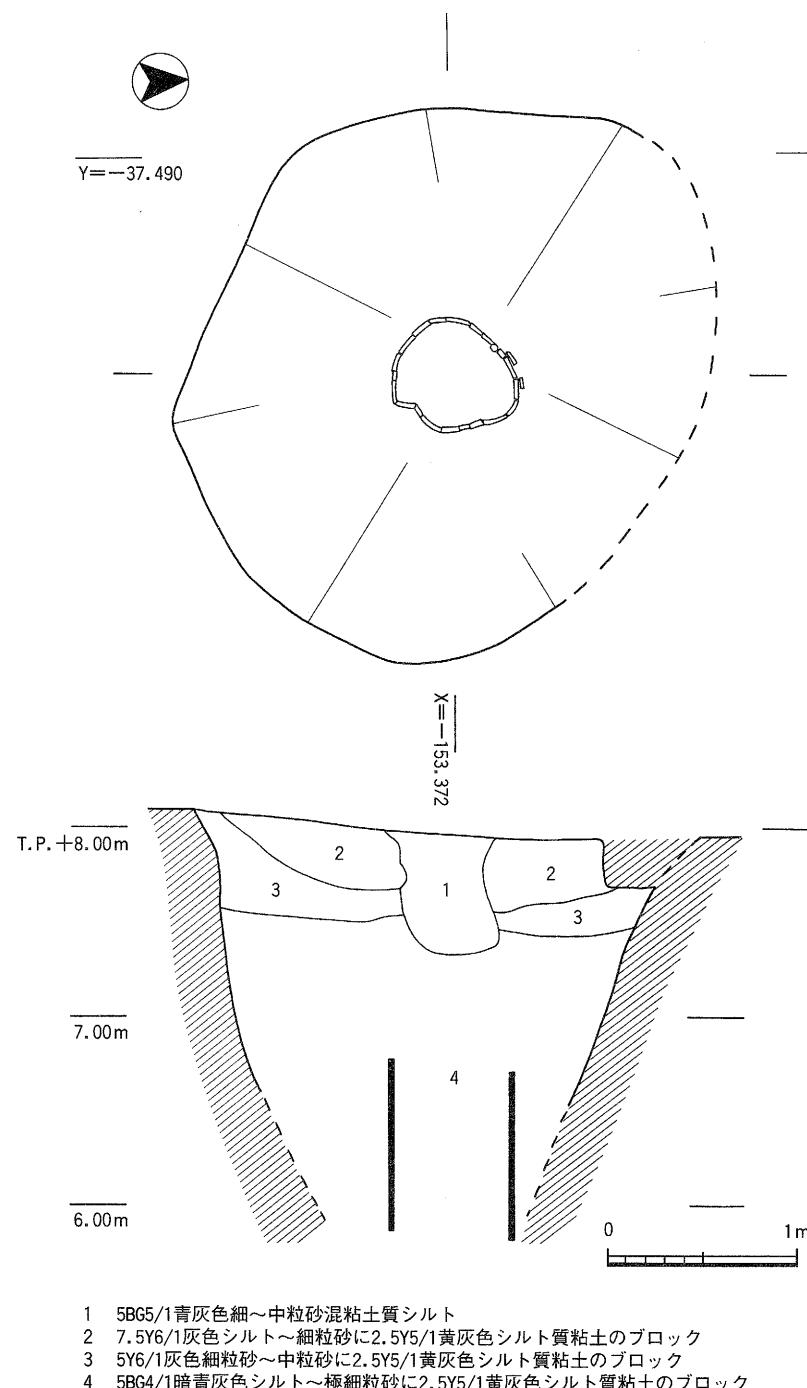
写真7 S E 1010検出状況(南から)

### S E 1011 (第12図、図版五)

3 調査区中央部のⅧ-16-7・8B地区で検出した。位置的には島畠1004の北辺にあたる。掘方の平面形は径2.5~3.1mの不整円形を呈し、断面逆台形で深さは2.15m以上を測る。検出面から約1.2m掘り下げた段階で、直径65cm、高さ90cmの桶枠を検出したが、完掘していないため以下の構造等は不明である。検出した部分の埋土は4層に分層が可能で、いずれもブロックを含む層相で短期間に埋戻しが行われたことが推定される。これらの埋土の堆積状況からみて、井戸廃絶時点に井戸側の上部が抜き取られたことが推定される。遺物は時期不明の土師器、木材の他、上部の枠材であろう井戸側用瓦2点が出土している。遺構の構築時期は、江戸時代中期以降が推定される。

### S E 1012

S E 1011の東で検出した井戸で、掘方間の距離は約2.9mを測る。S E 1011と同様、島畠1004の北辺に位置する。掘方の平面形は径1.85~2.3mの不整円形を呈する。断面形状は逆台形で深さ1.95mを測る。埋土は6層に分層が可能で大半がブロックを多量に含む層相である。検出面から約1.95mまで掘り下げたところでは井戸枠は検出されなかったが、約1.7mの所に竹製籠二段が残存していることから、桶枠が設置されていたことが確認された。遺物としては弥生土器、土師器、須恵器の破片が数点出土しているが、構築時期としてはS E 1011と同様、江戸時代中期以降が推定される。



第12図 S E 1011平断面図

## 土坑（SK）

### SK 1001

1 調査区南西部のVII-19-4 D 地区で検出した。南部が調査区外に至る。検出部分で東西幅1.5m、南北幅0.4m、深さ0.16mを測る。埋土は暗灰黄色砂礫混シルトの単一層である。遺物は時期不明の土師器の破片が少量出土した。

### SK 1002

1 調査区中央部のVII-19-4 E 地区で検出した。西肩の一部が攪乱によって切られるが、検出状況から円形を呈するものと思われる。検出部分で径0.8m前後、深さ0.48mを測る。埋土は明褐色シルトに浅黄橙色粘土質シルトと灰色粘土質シルトがブロックで混入する。遺物は出土していない。

### SK 1003

1 調査区中央部のVII-19-4 E 地区で検出した。掘方の平面形はやや南北が長い隅丸長方形を呈する。規模は長辺0.9m、短辺0.7m、深さ0.06mを測る。埋土は上層が明褐色シルト、下層が浅黄橙色シルトの2層に分層できる。遺物は江戸時代中期に比定される唐津焼碗の破片が1点出土した。

### SK 1004

1 調査区中南部のVII-19-5 E 地区で検出した。南部が調査区外に至る。検出部分で東西幅3.7m、南北幅0.3~1.0m、深さ0.15mを測る。埋土はにぶい黄橙色シルトの単一層である。遺物は土師器、須恵器、肥前系磁器の破片が少量出土したほか、混入遺物として平安時代前期に比定される黒色土器碗（A類）の破片が出土している。出土遺物には時期幅が認められるが、遺構の構築時期は江戸時代中期以降が推定される。

### SK 1005

1 調査区北中部のVII-19-4 F 地区で検出した。東-西に長い楕円形を呈する。規模は、長径1.1m、短径0.6m、深さ0.16mを測る。埋土はにぶい黄橙色シルトの単一層である。遺物は土師器の破片が極少量出土したが、時期は明確でない。

### SK 1006

1 調査区南中部のVII-19-5 F 地区で検出した。不定形を呈する。規模は、東西幅0.7~0.8m、南北幅0.4~0.6m、深さ0.15mを測る。埋土はにぶい黄橙色シルトの単一層である。遺物は土師器、須恵器の破片が極少量出土したが、時期は明確でない。

### SK 1007

1 調査区北中部のVII-19-4 F・G 地区で検出した。ほぼ円形を呈するもので、規模は、径1.5m前後、深さ0.18mを測る。埋土は灰黄褐色砂礫混シルトの単一層である。遺物は出土していない。

### SK 1008

1 調査区北中部で検出したSE 1003の東部を切る。南-北に長い長方形を呈する。規模は、長辺1.83m、短辺0.72~0.96m、深さ0.2mを測る。埋土は灰黄褐色砂礫混シルトの単一層である。遺物は時期不明の土師器甕の破片が1点出土した。

#### S K 1009

S E 1008の西側で検出した。平面形状については、東部は明瞭に検出できたものの、西部については上部が攪拌を受けており、やや掘り下げた段階で捉えている。検出部分で東西幅2.2m、南北幅2.5m、深さ0.2mを測る。埋土は褐灰色砂礫混シルトの単一層である。遺物は須恵器、平瓦の破片が極少量出土したが、時期を明確にし得たものはない。

#### S K 1010

2調査区中東部のⅦ-20-7 E地区で検出した。不定形を呈するもので、東西幅2.7m、南北幅1.1m、深さ0.41mを測る。断面形は「U」字状を呈し、埋土は3層の互層から成る不均質な層相であるため短期間に埋め戻しが行われたことが推定される。遺物は時期不明の土師器片が2点出土している。

#### S K 1011

3調査区中東部のⅧ-16-8・9 D地区で検出した。ほぼ円形を呈するもので径0.6mを測る。内部には直径約40cmの曲物が設置されており、底板から高さ約4cmが遺存している。埋土は5G4/1暗緑灰色粗粒砂混粘質シルトの単一層である。遺物は出土していない。

#### S K 1012

3調査区北東隅のⅧ-16-8 G地区で検出した。島畠1006上面で検出したもので、北側は調査区外に続く。検出部分で東西幅2.8m、南北幅1.1m、深さ0.06mを測る。断面形状は皿形を呈し、埋土は7.5Y4/1灰色細粒砂～粗粒砂混シルト(グライ化する)である。遺物は出土していない。

#### S K 1013

4調査区中西部のⅧ-16-10 I・J地区で検出した。島畠1006の東部に位置する。円形を呈するもので、径0.65～0.7m、深さ0.41mを測る。断面形状は台形である。埋土は断面形状に沿って、粘土質シルトを主体とする3層がレンズ状に堆積している。遺物は土師器、須恵器、瓦器の破片が極少量出土しているが、時期を明確にし得たものはない。

#### S K 1014

4調査区中西部のⅧ-16-10 J地区で検出した。S K 1013と同様、島畠1006の東部に位置する。不定形を呈するもので、東西幅2.3m、南北幅2.0m、深さ0.09mを測る。断面形状は皿形である。埋土は細粒砂～粗粒砂を含むシルトの2層から成る。遺物は土師器、須恵器、瓦器の破片が極少量出土しているが、時期を明確にし得たものはない。

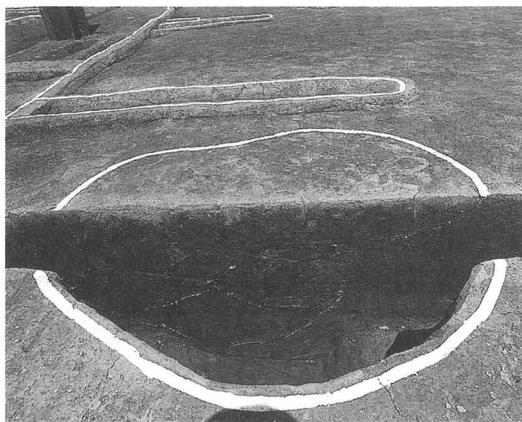


写真8 S K 1010検出状況(南から)

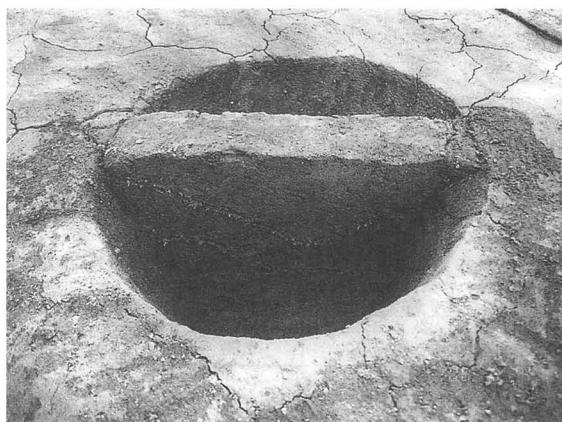


写真9 S K 1013検出状況(東から)

## 溝（SD）

### SD 1001～SD 1018

1調査区の西部に位置する島畠1001上面で検出された溝群で、SD 1001を除けば小溝が大半を占める。島畠1001の構築方向である東－西方向に直線的に伸びるもので、密集し重複する部分がある。規模は、検出長1.5～18.5m、幅0.03～2.3m、深さ0.02～0.11mを測る。埋土は、SD 1017以外はN3/0暗灰色シルトの単一層である。遺物は、古墳時代中期～江戸時代に至る土器類が出土しているが、全て小片化しており図化し得たものはない。各溝の規模・詳細については第3表に示した。

第3表 1調査区 SD 1001～SD 1018法量表(単位m)

遺構番号	地区	全長 (検出長)	幅 (最大)	深さ	埋 土	出土遺物
SD1001	VII-19-3D	2.20	2.30	0.10	N3/0暗灰色シルト	土師器、須恵器
SD1002	〃	3.10	1.30	0.10	〃	土師器、黒色土器(A類)、瓦
SD1003	〃	4.80	0.50	0.05	〃	
SD1004	〃	5.70	0.60	0.05	〃	
SD1005	〃	7.00	0.30	0.04	〃	土師器、国産陶磁器
SD1006	VII-19-3D·E	8.10	0.50	0.09	〃	
SD1007	VII-19-3D	4.00	0.40	0.05	〃	土師器、須恵器
SD1008	〃	2.30	0.20	0.02	〃	
SD1009	〃	3.60	0.40	0.03	〃	土師器
SD1010	〃	5.20	0.40	0.03	〃	
SD1011	〃	3.30	0.30	0.03	〃	土師器、須恵器、瓦器
SD1012	VII-19-3D～F	18.50	0.40	0.05	〃	土師器、須恵器、黒色土器
SD1013	VII-19-3E	1.50	0.08	0.11	〃	
SD1014	〃	2.10	0.03	0.03	〃	
SD1015	〃	5.30	0.30	0.04	〃	
SD1016	VII-19-4E	1.70	0.30	0.03	〃	
SD1017	〃	1.60	0.40	0.03	2.5Y3/2黒褐色シルト	土師器
SD1018	〃	1.90	0.20	0.05	N3/0暗灰色シルト	土師器

### SD 1019～SD 1033

1調査区の中央部から西部に位置する水田1001の下位面で検出された溝群である。小溝を中心としており、構築方向は東－西方向、南－北方向がある。規模は、検出長1.3～8.9m、幅0.2～0.5m、深さ0.03～0.13mを測る。埋土は、全て単一層である。遺物は古墳時代中期～江戸時代に至る土器類が出土しているが、全て小片化しており図化し得たものはない。各溝の規模・詳細については第4表に示した。

第4表 1調査区 SD 1019～SD 1033法量表(単位m)

遺構番号	地区	全長 (検出長)	幅 (最大)	深さ	埋 土	出土遺物
SD1019	VII-19-4C	1.60	0.20	0.10	2.5Y3/2黒褐色シルト	土師器Ⅲ、国産磁器
SD1020	〃	2.20	0.40	0.12	〃	土師器、平瓦
SD1021	〃	1.90	0.30	0.13	〃	
SD1022	VII-19-4B·C	7.60	0.40	0.03	〃	土師器、須恵器、平瓦

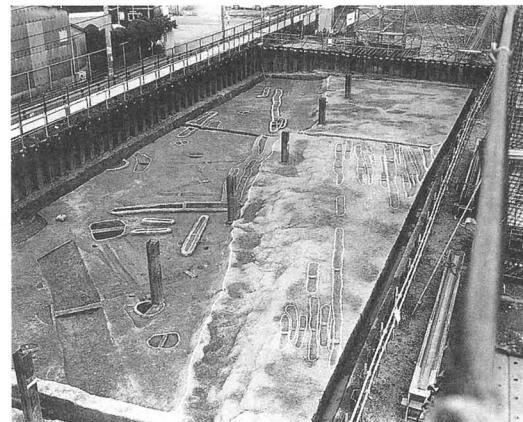


写真10 島畠1001上部で検出された溝群(東から)

遺構番号	地区	全長 (検出長)	幅 (最大)	深さ	埋土	出土遺物
S D 1023	VII-19-4B·C	2.30	0.40	0.05	2.5Y3/2黒褐色シルト	土師器
S D 1024	VII-19-4C·D	8.90	0.40	0.08	〃	土師器、須恵器
S D 1025	VII-19-4D	2.50	0.30	0.06	〃	土師器
S D 1026	〃	3.00	0.50	0.07	2.5Y5/2暗灰黄色礫混シルト	土師器
S D 1027	VII-19-4D·E	3.20	0.30	0.03	2.5Y3/2黒褐色シルト	土師器
S D 1028	〃	1.30	0.20	0.03	〃	土師器
S D 1029	VII-19-4E	1.60	0.20	0.13	〃	土師器
S D 1030	VII-19-4F	1.50	0.30	0.04	10YR7/8黄橙色シルト	土師器、国産陶器
S D 1031	〃	1.60	0.40	0.07	〃	土師器
S D 1032	〃	2.80	0.50	0.12	〃	土師器、須恵器
S D 1033	VII-19-5F	5.70	0.20	0.07	〃	土師器、須恵器、黑色土器、瓦器

### S D 1034・S D 1035

1調査区東部に位置する島畠1002の上面で検出されたもので、島畠に並行して開削されている。規模は、S D 1034が検出長9.8m、幅0.5m、深さ0.08m、S D 1035が検出長1.6m、幅0.3m、深さ0.08mを測る。埋土は2.5Y5/2暗灰黄色礫混シルトの単一層である。遺物は共に土師器の小片が極少量出土しているが、時期は明確でない。

### S D 1036～S D 1089

1調査区東部から2調査区の西部に位置する水田1002の下位面で検出された溝群である。そのうち、1調査区の東部で検出されたS D 1036～S D 1076については、重複する部分が多く遺構の輪郭が不明瞭で痕跡程度のものも含まれているが、概ね東一西方向に伸びる耕作溝群と推定される。S D 1086～S D 1089は、水田1002の東部で検出されたもので、水田1002の東端を区画する畦畔1002に沿って南北方向に伸びている。なかでも、畦畔1002の西側に接するS D 1089については、畦畔1002に付随した用水路の性格が推定される。各溝の規模・詳細については第5表に示した。

第5表 1・2調査区 S D 1036～S D 1089法量表(単位m)

遺構番号	地区	全長 (検出長)	幅 (最大)	深さ	埋土	出土遺物
S D 1036	VII-19-5 I	2.20	0.20	—	5Y5/1灰色粘土質シルト	
S D 1037	〃	0.80	0.10	—	〃	
S D 1038	〃	1.20	0.20	—	〃	
S D 1039	〃	0.80	0.20	—	〃	
S D 1040	〃	0.70	0.20	—	〃	
S D 1041	〃	0.50	0.10	—	〃	
S D 1042	〃	1.30	0.15	—	〃	
S D 1043	〃	5.90	2.00	—	〃	
S D 1044	〃	0.80	0.10	—	〃	
S D 1045	〃	0.40	0.15	—	〃	
S D 1046	〃	1.00	0.15	—	5Y5/1灰色粘土質シルト	



写真11 1調査区東部溝群検出状況(東から)

遺構番号	地区	全長 (検出長)	幅 (最大)	深さ	埋 土	出土遺物
S D1047	Ⅷ-19-5 I	0.20	0.10	—	5Y5/1灰色粘土質シルト	
S D1048	"	0.20	0.10	—	"	
S D1049	"	1.50	0.20	—	"	
S D1050	"	1.20	0.10	—	"	
S D1051	"	0.20	0.10	—	"	
S D1052	"	2.20	0.10	—	"	
S D1053	"	5.00	0.20	—	"	
S D1054	"	1.20	0.20	—	"	
S D1055	"	0.40	0.10	—	"	
S D1056	"	1.90	0.20	—	"	
S D1057	"	0.50	0.15	—	"	
S D1058	"	0.60	0.10	—	"	
S D1059	"	0.80	0.10	—	"	
S D1060	"	0.80	0.15	—	"	
S D1061	"	3.50	0.20	—	"	
S D1062	"	0.20	0.10	—	"	
S D1063	"	1.20	0.20	—	"	
S D1064	"	0.70	0.15	—	"	
S D1065	"	1.40	0.15	—	"	
S D1066	"	0.70	0.15	—	"	
S D1067	Ⅷ-19-6 I	0.10	0.05	—	"	
S D1068	"	1.20	0.15	—	"	
S D1069	"	1.80	0.10	—	"	
S D1070	"	2.70	0.10	—	"	
S D1071	"	0.50	0.30	—	"	
S D1072	"	0.50	0.55	—	"	
S D1073	"	0.40	0.15	—	"	
S D1074	"	1.30	0.35	—	"	
S D1075	"	0.50	0.35	—	"	
S D1076	"	0.50	0.45	—	"	
S D1077	"	1.40	0.50	0.05	10YR6/3にぶい黄橙色シルト	
S D1078	"	1.90	0.50	0.04	"	
S D1079	"	1.00	0.20	0.02	"	
S D1080	"	2.10	0.50	0.04	"	
S D1081	"	0.40	0.30	0.04	"	
S D1082	"	0.70	0.40	0.03	"	
S D1083	"	4.50	1.80	0.07	5G2/1緑黒色粘土質シルト	丸瓦
S D1084	Ⅷ-19-6 J	3.10	0.17	0.03	7.5Y4/3褐色と7.5Y4/1褐色砂礫混シルト	
S D1085	"	4.80	0.35	0.03	"	土師器
S D1086	Ⅷ-19-5 J	0.80	0.50	0.04	7.5YR6/6橙色シルト	
S D1087	Ⅷ-19-5·6 J	9.40	0.50	0.05	7.5Y4/3褐色と7.5Y4/1褐色砂礫混シルト	須恵器、黑色土器
S D1088	Ⅷ-19-6 J	2.10	0.30	0.05	7.5YR6/6橙色シルト	
S D1089	Ⅷ-19-5·6 J	11.60	1.40	0.05	2.5GY6/6オリーブ灰色粘土質シルト	土師器、須恵器、屋瓦

### S D1090～S D1139（図版五五）

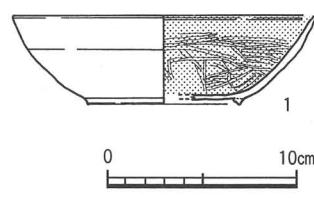
2調査区西部から3調査区西端に位置する水田1003の下位面で検出された。小溝を中心とする溝群で総数50条を数える。方向的には、東一西に伸びるS D1091～S D1095・S D1099・S D1100・S D1102・S D1103・S D1106～S D1109・S D1118・S D1119・S D1125とそれ以外の

南一北に伸びるものに区別される。規模は、検出長0.6~15.1m、幅0.13~2.8m、深さ0.02~0.2mを測る。埋土には、単一層のものと不均質な層相で互層を成すものがある。遺物は古墳時代中期~江戸時代に至る土器類が出土しているが、小片化したものが大半である。2点(1・2)を図化した。1はSD1094から出土した黒色土器A類碗である。

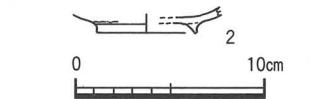
復元口径16.0cmを測る。体部が深い大形の碗で、口縁端部内側に沈線が巡る。高台は断面三角形を呈する低い貼り付け高台である。

0.5~1mm程度の長石を多く含む粗製品である。10世紀前半の所産と推定される。2はSD1111から出土した瓦器碗である。瓦器碗の高台部から底部にかけての小片である。高台は貼り付け高台で、断面三角形を呈する。二次焼成ないしは風化のためか内外面共に炭素の付着が認められない。13世紀前半の所産と推定される。各溝の規模・詳細については第6表に示した。

第13図 SD1094出土遺物実測図



第14図 SD1111出土遺物実測図



第6表 2・3調査区 SD1090~SD1139法量表 (単位m)

遺構番号	地区	全長 (検出長)	幅 (最大)	深さ	埋 土	出土遺物
SD1090	VII-20-6A	3.90	0.55	0.05	7.5Y4/3褐色と7.5Y4/1褐色 灰色砂礫混シルトの互層	
SD1091	VII-20-5A・B	7.20	0.55	0.04	〃	土師器
SD1092	VII-20-5B	2.00	0.25	0.03	〃	
SD1093	VII-20-6A・B	10.40	0.55	0.07	〃	
SD1094	〃	10.00	0.30	0.02	〃	黒色土器(第13図)
SD1095	〃	8.40	0.60	0.03	〃	
SD1096	VII-20-6A	5.30	0.37	0.04	7.5YR6/6橙色シルト	
SD1097	〃	6.00	0.36	0.02	〃	
SD1098	VII-20-5・6B	10.70	0.25	0.03	〃	
SD1099	VII-20-6D	1.90	0.18	0.04	7.5Y4/3褐色と7.5Y4/1褐色 灰色砂礫混シルトの互層	
SD1100	VII-20-6C・D	3.10	0.24	0.03	〃	
SD1101	VII-20-6・7D	11.00	1.55	0.09	〃	土師器、須恵器
SD1102	VII-20-7D・E	15.10	0.32	0.03	7.5YR6/6橙色シルト	土師器、須恵器
SD1103	VII-20-7D	4.40	0.23	0.03	〃	土師器
SD1104	VII-20-6・7D・E	10.50	0.51	0.07	7.5Y4/3褐色と7.5Y4/1褐色 灰色砂礫混シルトの互層	土師器、須恵器
SD1105	VII-20-6・7E	4.60	0.20	0.04	〃	
SD1106	VII-20-6E	2.60	0.17	0.03	〃	
SD1107	VII-20-6E・F	9.80	0.31	0.07	〃	瓦器、平瓦
SD1108	VII-20-7E	1.40	0.32	0.14	7.5YR6/6橙色シルト	
SD1109	〃	8.00	0.44	0.12	7.5Y4/3褐色と7.5Y4/1褐色 灰色砂礫混シルトの互層	土師器
SD1110	VII-20-6・7E	11.10	2.40	0.13	〃	土師器、須恵器、国産磁器
SD1111	VII-20-7E	1.30	0.32	0.04	〃	土師器、須恵器、瓦器(第14図)
SD1112	VII-20-7E	1.60	0.68	0.05	7.5Y5/6明褐色シルトと7.5Y5/1褐色 灰色砂礫混シルトの互層	
SD1113	VII-20-7E・F	2.30	0.22	0.04	〃	
SD1114	VII-20-6・7F	10.90	0.30	0.11	〃	土師器、須恵器、黒色土器、瓦器
SD1115	VII-20-7F	1.90	0.20	0.03	〃	

遺構番号	地区	全長 (検出長)	幅 (最大)	深さ	埋土	出土遺物
S D1116	VII-20-7F	0.90	0.16	0.03	〃	
S D1117	〃	1.00	0.41	0.11	にぶい橙色シルト	
S D1118	〃	3.90	0.32	0.04	7.5Y5/6明褐色シルトと7.5Y5/1 褐灰色砂礫混シルトの互層	土師器、須恵器、瓦器
S D1119	〃	4.20	0.25	0.04	〃	
S D1120	VII-20-7·8F·G	7.30	0.40	0.06	〃	土師器
S D1121	〃	5.70	0.50	0.05	〃	須恵器
S D1122	〃	7.50	1.25	0.06	7.5YR4/3褐色と7.5YR4/1 褐灰色砂礫混シルトの互層	土師器
S D1123	VII-20-7G	1.60	0.32	0.06	〃	
S D1124	VII-20-7·8G	10.40	0.83	0.20	〃	土師器、須恵器、瓦器
S D1125	VII-20-8G	2.20	0.32	0.09	7.5YR4/2灰褐色シルト	
S D1126	VII-20-7·8G	10.80	0.40	0.04	7.5YR4/3褐色と7.5YR4/1 褐灰色砂礫混シルトの互層	土師器、須恵器
S D1127	〃	10.80	0.71	0.02	〃	土師器、須恵器、瓦器
S D1128	VII-20-7G·H	8.10	0.21	0.02	〃	土師器
S D1129	VII-20-7·8H	5.80	0.32	0.03	〃	土師器
S D1130	VII-20-7·8H	9.10	1.35	0.04	〃	
S D1131	VII-20-8H	0.60	0.13	0.02	〃	
S D1132	〃	0.60	0.43	0.07	〃	
S D1133	〃	1.50	0.17	0.02	〃	土師器、須恵器
S D1134	VII-20-7H	2.40	0.47	0.04	〃	
S D1135	〃	1.90	0.35	0.02	〃	
S D1136	〃	1.20	0.13	0.02	〃	
S D1137	VII-20-7·8H	10.10	1.40	0.11	〃	土師器、須恵器
S D1138	VII-20-7H	2.80	0.15	0.04	〃	
S D1139	VII-20-7·8H·I	10.75	2.80	0.10	〃	

### S D1140～S D1143

3調査区西部のVII-20-7·8 I 地区で検出した。島畠1003の上面に位置する小溝群で、島畠1003の構築方向に沿って北北東－南南西に直線的に伸びる。規模は、検出長2.6～4.1m、幅0.25m、深さ0.02～0.03mを測る。埋土はやや不均質な2.5GY5/1オリーブ灰色シルト～粘土の単一層である。遺物は出土していない。各溝の規模・詳細については第7表に示した。

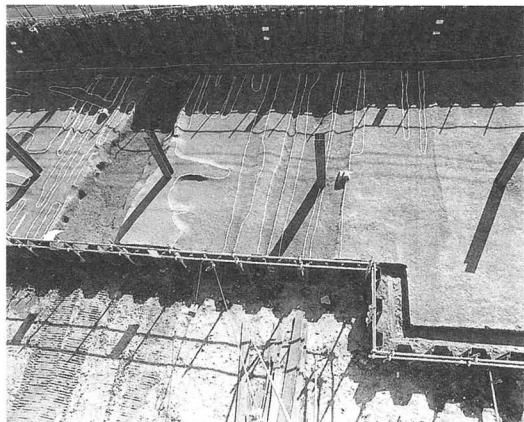


写真12 3調査区西部溝群検出状況(北から)

第7表 3調査区 S D1140～S D1143法量表 (単位m)

遺構番号	地区	全長 (検出長)	幅 (最大)	深さ	埋土	出土遺物
S D1140	VII-20-7I	3.75	0.25	0.02	2.5GY5/1オリーブ灰色シルト～粘土	
S D1141	〃	2.60	0.25	0.02	〃	
S D1142	VII-20-8I	4.10	0.25	0.02	〃	
S D1143	〃	3.85	0.25	0.03	〃	

### S D 1144～S D 1152

3調査区西部のⅦ-20-7・8I・J地区で検出した。全て水田1004の下位面で検出された小溝群で、北北東-南南西に直線的に伸びる。規模は、検出長0.7～8.9m、幅0.35～1.15m、深さ0.03～0.13mを測る。埋土は10BG5/1青灰色細粒砂～粗粒砂混粘土質シルトの単一層である。遺物は出土していない。各溝の規模・詳細については第8表に示した。

第8表 S D 1144～S D 1152法量表(単位m)

遺構番号	地区	全長 (検出長)	幅 (最大)	深さ	埋 土	出土遺物
S D 1144	Ⅶ-20-7-8I・J	8.90	0.80	0.08	10BG5/1青灰色細粒砂～粗粒砂混粘土質シルト	
S D 1145	”	8.85	1.15	0.04	”	
S D 1146	Ⅶ-20-7-8J	8.85	0.40	0.13	”	
S D 1147	”	8.80	0.55	0.04	”	
S D 1148	Ⅶ-20-8J	0.70	0.35	0.06	”	
S D 1149	”	2.25	0.35	0.05	”	
S D 1150	”	2.55	0.70	0.03	”	
S D 1151	”	2.40	0.40	0.04	”	
S D 1152	”	3.40	0.45	0.05	”	

### S D 1153～S D 1163

3調査区中西部のⅧ-16-7・8A・B、Ⅶ-20-8J地区で検出した。全て島畠1004の上面で検出した小溝群である。S D 1153～S D 1156が北北東-南南西に伸びる以外は、島畠1004の構築方向である北西-南東に並行するものである。規模は検出長2.15～9.0m、幅0.45～2.1m、深さ0.05～0.15mを測る。埋土は5Y6/1灰色中粒砂～細礫混シルトの単一層である。遺物は出土していない。各溝の規模・詳細については第9表に示した。

第9表 3調査区 S D 1153～1163法量表(単位m)

遺構番号	地区	全長 (検出長)	幅 (最大)	深さ	埋 土	出土遺物
S D 1153	Ⅶ-20-8J	4.30	0.80	0.08	5Y6/1灰色中粒砂～細礫混シルト	
S D 1154	Ⅶ-20-8J Ⅷ-16-7-8A	9.00	0.90	0.05	”	
S D 1155	Ⅶ-20-8J Ⅷ-16-8A	9.00	0.85	0.07	”	
S D 1156	Ⅷ-16-8A	2.80	0.45	0.15	”	
S D 1157	Ⅷ-16-7-8A	6.10	0.70	0.06	”	
S D 1158	Ⅷ-16-8A	2.15	0.45	0.10	”	
S D 1159	”	6.30	1.00	0.10	”	
S D 1160	”	5.50	2.10	0.10	”	
S D 1161	Ⅶ-20-8J Ⅷ-16-8A	3.95	0.50	0.05	”	
S D 1162	Ⅷ-16-8A-B	4.85	0.85	0.15	”	
S D 1163	Ⅷ-16-8A	4.00	0.75	0.12	”	

### S D 1164～S D 1171

3調査区中央部から東部にかけて検出した。水田1005の下位面で検出された溝群である。構築方向は北西-南東方向である。規模は、検出長1.2～9.8m、幅0.2～0.55m、深さ0.02～0.12mを測る。埋土は極細粒砂～細粒砂を多く含むシルト質粘土である。遺物は出土していない。各溝の規模・詳細については第10表に示した。

第10表 3調査区 S D 1164～S D 1171法量表(単位m)

遺構番号	地区	全長 (検出長)	幅 (最大)	深さ	埋 土	出土遺物
S D 1164	Ⅷ-16-8C	1.55	0.30	0.06	5BG4/1暗青灰色極細粒砂 ～細粒砂混シルト質粘土	
S D 1165	〃	1.20	0.20	0.06	〃	
S D 1166	Ⅷ-16-8C・D	9.80	0.35	0.10	〃	
S D 1167	Ⅷ-16-8C	2.90	0.30	0.04	〃	
S D 1168	〃	2.55	0.35	0.06	〃	
S D 1169	〃	1.20	0.50	0.04	〃	
S D 1170	Ⅷ-16-9E	4.40	0.55	0.12	7.5Y5/1灰色細粒砂～粗粒 砂多混シルト質粘土	
S D 1171	〃	5.40	0.45	0.02	〃	

### S D 1172～S D 1188

3調査区東部から4調査区西部で検出したもので、水田1006の下位面で検出された小溝群である。構築方向はS D 1188が南北方向、他は北西～南東方向である。規模は、検出長0.3～36.0m、幅0.1～1.2m、深さ0.04～0.15mを測る。埋土は、細粒砂～粗粒砂を多く含むシルト～粘土質シルトである。遺物はS D 1187からのみ出土している。各溝の規模・詳細については第11表に示した。

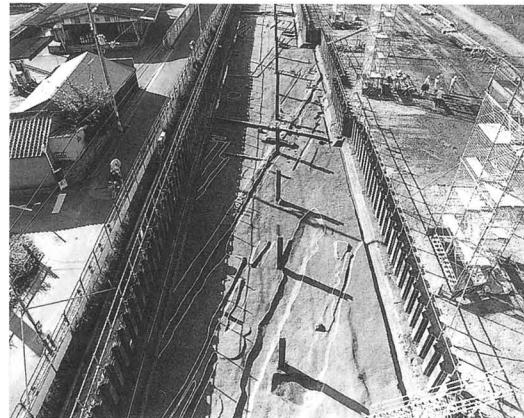


写真13 3調査区東部溝検出状況(東から)

第11表 3・4調査区 S D 1172～1188法量表(単位m)

遺構番号	地区	全長 (検出長)	幅 (最大)	深さ	埋 土	出土遺物
S D 1172	Ⅷ-16-8・9C～G	36.00	0.70	0.07	10G4/1暗緑灰色粘土質シルト	
S D 1173	Ⅷ-16-8D・E	9.60	0.45	0.04	5BG4/1暗青灰色細粒砂多混 粘土質シルト	
S D 1174	Ⅷ-16-9F・G	13.70	0.45	0.12	2.5Y5/1黄灰色細粒砂～粗粒 砂多混シルト	
S D 1175	Ⅷ-16-9G	5.30	0.30	0.04	〃	
S D 1176	Ⅷ-16-9F・G	16.50	0.50	0.06	〃	
S D 1177	Ⅷ-16-9G	0.35	0.10	0.12	5BG4/1暗青灰色細粒砂～粗 粒砂多混シルト質粘土	
S D 1178	Ⅷ-16-9G・H	3.80	0.26	0.09	〃	
S D 1179	〃	3.30	0.15	0.05	〃	
S D 1180	Ⅷ-16-8～10F～H	25.60	1.20	0.15	〃	
S D 1181	Ⅷ-16-9・10G・H	11.10	0.60	0.08	〃	
S D 1182	〃	11.70	0.50	0.13	〃	
S D 1183	Ⅷ-16-10H・I	1.70	0.10	0.04	〃	
S D 1184	Ⅷ-16-9・10G～I	15.40	0.30	0.14	〃	
S D 1185	Ⅷ-16-8F・G	15.50	0.30	0.12	〃	
S D 1186	Ⅷ-16-9・10G～I	15.50	0.30	0.12	〃	
S D 1187	〃	16.30	0.35	0.07	〃	土師器、須恵器、国産磁器、丸瓦
S D 1188	Ⅷ-16-9G	0.30	0.10	0.05	〃	

### S D 1189～S D 1191

4調査区西部で検出した島畠1006上面に位置する。S D 1189・S D 1190が北西一南東、S D 1191が北東一南西に直線的に伸びる。規模は、検出長5.45～12.45m、幅0.7～1.1m、深さ0.08～0.15mを測る。埋土は2.5Y6/2灰黄色細粒砂～粗粒砂混シルト質粘土の単一層である。遺物は出土していない。各溝の規模・詳細については第12表に示した。



第12表 4調査区 S D 1189～S D 1191法量表(単位m)

写真14 4調査区西部溝群検出状況(東から)

遺構番号	地区	全長 (検出長)	幅 (最大)	深さ	埋 土	出土遺物
S D 1189	Ⅷ-16-8·9H·I	6.90	0.70	0.08	2.5Y6/2灰黄色細粒砂～粗粒砂混シルト質粘土	
S D 1190	Ⅷ-16-9 I · J	12.45	1.10	0.11	〃	
S D 1191	Ⅷ-16-9 · 10J	5.45	1.00	0.15	〃	

### S D 1192～S D 1198

4調査区中西部で検出した。水田1007の下位面で検出した小溝群である。構築方向は北西一南東である。規模は、検出長0.5～13.15m、幅0.2～0.8m、深さ0.02～0.27mを測る。埋土は5Y6/1灰色細粒砂～粗粒砂混シルト～粘土質シルトの単一層である。遺物は出土していない。各溝の規模・詳細については第13表に示した。

第13表 4調査区 S D 1192～S D 1198法量表(単位m)

遺構番号	地区	全長 (検出長)	幅 (最大)	深さ	埋 土	出土遺物
S D 1192	Ⅷ-16-9I·J	13.15	0.80	0.27	5Y6/1灰色細粒砂～粗粒砂混シルト～粘土質シルト	
S D 1193	Ⅷ-16-9J	1.10	0.20	0.05	〃	
S D 1194	Ⅷ-16-9I·J	11.80	0.35	0.10	〃	
S D 1195	Ⅷ-16-9J	0.70	0.20	0.02	〃	
S D 1196	〃	0.50	0.20	0.08	〃	
S D 1197	〃	2.00	0.35	0.06	〃	
S D 1198	〃	0.90	0.20	0.08	〃	

### S D 1199～S D 1203

4調査区中央部で検出した。水田1008の下位面で検出した小溝群である。S D 1199は北西一南東、他は北東一南西に伸びている。規模は、検出長0.4～11.6m、幅0.1～0.7m、深さ0.05～0.33mを測る。埋土は黄色～灰色で細粒砂～粗粒砂混シルト質粘土が主体となっている。遺物は出土していない。各溝の規模・詳細については第14表に示した。

第14表 4調査区 S D 1199～S D 1203法量表(単位m)

遺構番号	地区	全長 (検出長)	幅 (最大)	深さ	埋 土	出土遺物
S D 1199	Ⅷ-17-9A	0.60	0.50	0.05	5Y6/1灰色細粒砂～粗粒砂混シルト～粘土質シルト	
S D 1200	Ⅷ-16-10J Ⅷ-17-9 · 10A	11.60	0.70	0.20	2.5Y6/1黄灰色細粒砂～粗粒砂混シルト質粘土	
S D 1201	Ⅷ-17-9A	1.60	0.15	0.11	〃	
S D 1202	Ⅷ-17-9 · 10A	6.45	0.35	0.33	〃	
S D 1203	Ⅷ-17-9A	0.40	0.10	0.08	〃	

### S D 1204～S D 1211

4調査区中南部で検出した島畑1008の上面に位置する小溝群である。S D 1204～S D 1206が北東～南西に伸びる他は、北西～南東に伸びる。規模は、検出長1.1～11.8m、幅0.2～0.65m、深さ0.06～0.12mを測る。埋土は5Y6/1灰色細粒砂～粗粒砂混シルト～粘土質シルトの単一層である。遺物はS D 1207・S D 1208から土師器、須恵器、瓦器の小片が出土したが、図化し得たものはない。各溝の規模・詳細については第15表に示した。

第15表 4調査区 S D 1204～S D 1211法量表(単位m)

遺構番号	地 区	全長 (検出長)	幅 (最大)	深さ	埋 土	出土遺物
S D 1204	VII-17-10A	1.10	0.20	0.06	5Y6/1灰色細粒砂～粗粒砂混シルト～粘土質シルト	
S D 1205	〃	2.70	0.40	0.08	〃	
S D 1206	〃	3.85	0.65	0.12	〃	
S D 1207	〃	5.55	0.20	0.09	〃	土師器、須恵器、瓦器
S D 1208	VII-17-10A·B	7.75	0.30	0.11	〃	土師器、須恵器、瓦器
S D 1209	VII-17-10A	6.20	0.40	0.08	〃	
S D 1210	VII-17-10A·B	11.80	0.40	0.10	〃	
S D 1211	〃	11.30	0.60	0.08	〃	

### S D 1212～S D 1249

4調査区の中央部から東部にかけて検出した。水田1009の下位面で捉えた溝群である。S D 1216が北東～南西方向、他は北西～南東方向に直線的に伸びるもので、重複した箇所が多く輪郭の不明瞭なものが多かった。溝群の性格としては、水田の下位面からの検出であるため、牛馬耕による犁溝と考えられる。規模は、検出長0.6～47.3m、幅0.1～1.95m、深さ0.03～0.37mを測る。埋土は細粒砂～粗粒砂が混じったシルトの層相である。そのうち、遺物が出土したものはS D 1230・S D 1236・S D 1244・S D 1249で、古墳時代中期～江戸時代に比定される土器・陶磁器・屋瓦類が出土しているが、いずれも小片で図化し得たものはない。各溝の規模・詳細については第16表に示した。

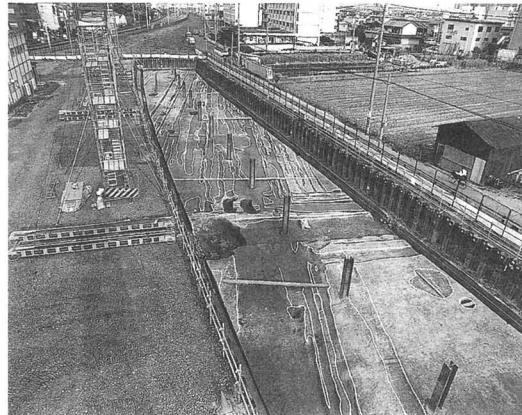


写真15 4調査区中央部から東部溝群検出状況  
(西から)

第16表 4調査区 S D 1212～S D 1249法量表(単位m)

遺構番号	地 区	全長 (検出長)	幅 (最大)	深さ	埋 土	出土遺物
S D 1212	VII-17-10A·B	16.70	0.90	0.24	5Y6/1灰色細粒砂～粗粒砂混シルト	
S D 1213	VII-17-10A	3.70	0.20	0.09	〃	
S D 1214	〃	3.70	0.30	0.14	〃	
S D 1215	VII-17-9·10A	1.40	0.20	0.07	〃	
S D 1216	〃	0.80	0.70	0.10	〃	
S D 1217	VII-17-10B·C	0.60	0.10	0.04	〃	
S D 1218	VII-17-10A~C	13.50	0.50	0.20	〃	
S D 1219	VII-17-10A·B	2.35	0.15	0.04	〃	

遺構番号	地区	全長 (検出長)	幅 (最大)	深さ	埋 土	出土遺物
S D1220	VII-17-9・10A～C	24.40	1.95	0.16	5Y6/1灰色細粒砂～粗粒砂混シルト	
S D1221	VII-17-10C	4.45	0.50	0.13	“	
S D1222	VII-17-10B・C	11.00	0.30	0.17	“	
S D1223	VII-17-10C・D	7.20	0.30	0.18	“	
S D1224	VII-17-9・10A・B VII-17-10B～D	12.30	0.70	0.18	“	
S D1225	VII-22-1D	18.60	0.90	0.14	“	
S D1226	VII-17-9・10A・B VII-17-10B～D	9.90	0.40	0.20	“	
S D1227	VII-22-1D VII-17-10C・D	20.20	0.90	0.17	“	
S D1228	VII-22-1D VII-17-9・10A～D	13.25	0.80	0.10	“	
S D1229	VII-22-1D・E	42.90	0.90	0.31	“	
S D1230	VII-17-9・10A～C	15.60	0.90	0.20	“	土師器、須恵器、陶器、屋瓦
S D1231	VII-17-10C	0.85	0.20	0.11	“	
S D1232	VII-17-10C・D	3.25	0.35	0.11	“	
S D1233	“	3.20	0.35	0.08	“	
S D1234	VII-17-10D VII-22-1D・E	2.40	0.10	0.03	“	
S D1235	VII-17-10D・E VII-22-1D・E	15.00	0.30	0.11	“	
S D1236	VII-17-9・10B～E VII-22-1E	40.00	1.10	0.12	“	土師器、須恵器
S D1237	VII-17-9B	6.50	0.65	0.08	“	
S D1238	VII-17-10D	3.75	0.39	0.93	“	
S D1239	VII-22-1E	6.10	0.30	0.05	“	
S D1240	VII-17-9・10B・C	11.90	0.55	0.10	“	
S D1241	VII-17-9・10B～E VII-22-1E・F	47.30	1.10	0.20	“	
S D1242	VII-17-9C	2.00	0.25	0.05	“	
S D1243	“	1.95	0.20	0.05	“	
S D1244	VII-22-1F	1.00	0.10	0.09	“	須恵器
S D1245	VII-17-9・10C～E VII-22-1E・F	41.50	0.30	0.26	“	
S D1246	VII-17-9・10C～E	26.60	0.40	0.37	2.5Y6/2灰黄色細粒砂混シルト	
S D1247	VII-22-1F	2.60	0.20	0.19	“	
S D1248	VII-17-10E	3.85	0.20	0.10	5Y6/1灰色細粒砂～粗粒砂混シルト	
S D1249	VII-17-9・10C～F VII-22-1F	39.00	0.30	0.31	“	土師器、須恵器、国産磁器、屋瓦

### S D1250・S D1251

4調査区の北東隅で検出した。島畠1009の上面に位置する。S D1250は検出長8.65m、幅0.5m、深さ0.13mを測る。S D1251は検出長9.8m、幅0.85m、深さ0.14mを測る。埋土は2.5Y6/1黄灰色細粒砂～粗粒砂混粘土質シルトである。遺物は土師器、須恵器、丸瓦の破片が極少量出土している。

### 小穴 (S P)

#### S P1001

1調査区のVII-19-4 C地区で検出した。平面形状は円形、断面は皿形を呈する。規模は、径0.22m、深さ0.05mを測る。埋土は黒褐色シルトの単一層である。遺物は出土しなかった。

## S P 1002～S P 1022

2調査区全域に分散している。総数で21個（S P 1002～S P 1022）検出した。平面の形状は、円形を呈するものが大半である。法量は、径0.05～0.54m、深さ0.02～0.26mを測る。S P 1003～S P 1006はS D 1089の西側に並行する位置に配置されており生産遺構に関連した杭痕と考えられる。S P 1007・S P 1009・S P 1015は断面形が2段掘りになることから、柱穴と考えられるが、配置等から建物を復元できる規則性は見受けられない。他は單一層の小穴である。なお、各小穴の法量等の詳細は第17表に示した。

第17表 2調査区 S P 1002～S P 1022法量表(単位m)

遺構番号	地 区	平面図	長 径	短 径	深 さ	埋 土	出土遺物
S P 1002	VII-19-6J	楕円形	0.15	0.10	0.04	10YR4/4褐色～10YR6/1褐灰色砂礫混シルト	
S P 1003	VII-19-5J	"	0.12	0.05	0.10	"	
S P 1004	"	"	0.15	0.08	0.03	"	
S P 1005	"	"	0.15	0.10	0.09	"	
S P 1006	"	円形	0.20	0.18	0.05	"	
S P 1007	VII-20-6A	"	0.33	0.32	0.15	"	
S P 1008	VII-20-7C	不整円形	0.25	0.20	0.03	"	
S P 1009	"	"	0.38	0.30	0.26	"	
S P 1010	VII-20-7D	円形	0.42	0.40	0.04	"	
S P 1011	VII-20-7E	"	0.22	0.22	0.18	"	
S P 1012	"	楕円形	0.30	0.27	0.12	"	
S P 1013	"	円形	0.22	0.21	0.07	"	
S P 1014	VII-20-6F	不整円形	0.25	0.20	0.04	"	
S P 1015	"	"	0.40	0.35	0.25	"	
S P 1016	VII-20-7G	円形	0.54	0.53	0.10	7.5YR7/1明褐色シルト・7.5YR6/1 褐灰色砂礫混シルトの互層	
S P 1017	"	不整円形	0.35	0.30	0.03	"	
S P 1018	"	"	0.36	0.23	0.03	"	
S P 1019	VII-20-7H	楕円形	0.20	0.15	0.02	10YR4/4褐色～10YR6/1褐灰色砂礫混シルト	
S P 1020	"	"	0.30	0.25	0.02	"	
S P 1021	VII-20-8H	円形	0.13	0.12	0.03	"	
S P 1022	"	"	0.17	0.15	0.05	"	

## S P 1023

3調査区西端のVII-20-7H地区で検出した。西側は調査区外に続いている。検出部分で東西0.5m、南北0.5m、深さ0.2mを測る。断面は皿形を呈し、埋土は上層が5Y5/1灰色シルト混極細粒砂～細粒砂、下層が5BG6/1青灰色細粒砂混粘土質シルト（斑鉄多く含む）である。遺物は出土していない。

島畑（島畑）

島畑1001

1調査区北西部のVII-19-2～4B～G地区で検出した。南側は水田1001が存在しており、両者の高低差は0.25mを測る。北部および西部は調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で東西幅42.7m、南北幅1.5～10.5m、高さ0.5m前後を測る。



写真16 1調査区島畑1001検出状況(西から)  
[手前右一水田1001]

島畠の盛土は、上層—5Y4/2灰オリーブ粘土質シルト、下層—2.5Y6/2灰黄色シルトの2層からなり、下層が近世前半に客土された島畠構築初期のもの、上層が近世後半に再度客土されたものと考えられる。

#### 島畠1002

1調査区北東部のⅦ-19-4・5G～I地区で検出した。南側に水田1002、西側に水田1001が存在する。両者との高低差は水田1001が0.31m、水田1002が0.37mを測る。北部および東部は調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で東西幅23.2m、南北幅9.8m、高さ0.2m前後を測る。島畠の盛土および構築時期は、島畠1001と同様と思われる。

#### 島畠1003

3調査区西部のⅦ-20-7・8I・J地区で検出した。北・南は調査区外に至るが、東側に水田1004、西側に水田1003が存在している。上面の標高は約T.P.+8.1m前後で、水田面との高低差は水田1003が0.21m、水田1004が0.19mを測る。検出部分で東西幅8.0m、南北幅11.0m以上を測る。作土層は灰色中～粗粒砂多混シルトで、鉄分を含み、よく攪拌され土壤化が著しく非常に固く締まる。構築層からは近世までの土器、磁器、瓦片が出土している。上面では耕作に関連すると思われる南北方向の溝4条(S D 1140～S D 1143)を検出した。なお上面の締まりが強固であることから道路状遺構である可能性も考えられる。

#### 島畠1004

3調査区中央から西部のⅦ-20-7・8J、Ⅷ-16-7～9A～C地区で検出した。南側及び北西部は調査区外に続き、西部は近代の搅乱により削平されている。西側に水田1004、北側および東側に水田1005が存在している他、上面の北辺にSE 1011、SE 1012がある。北辺から見た構築方向は北西～南東方向で、規模は東西幅31.0m、南北幅9.0m以上を測り、西側の島畠1003との間隔は約6.0m、東側の島畠1005との間隔は約14.0mを測る。標高はT.P.+8.1m前後を測り、水田面との高低差は水田1004が0.21m、水田1005が0.23mを測る。作土層は灰黄褐色中粒砂～粗粒砂混シルト質粘土で、鉄分を多く含み土壤化が著しく固く締まる。なお、東部の約7mに

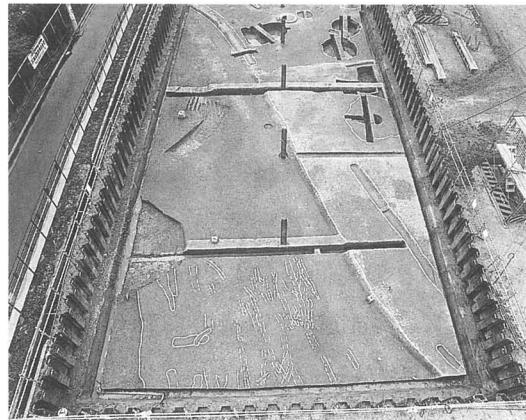


写真17 1調査区島畠1002検出状況(東から)  
〔手前左一水田1002〕

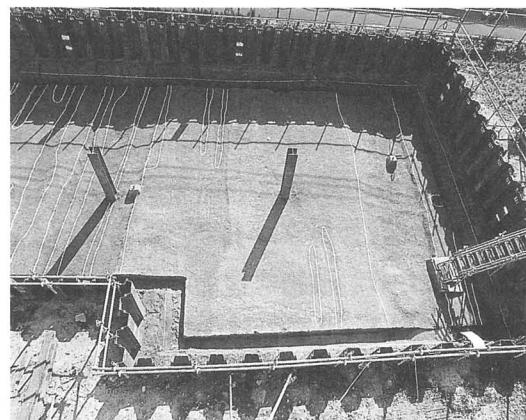


写真18 3調査区島畠1003検出状況(北から)  
〔島畠1003の右一水田1003、左一水田1004〕

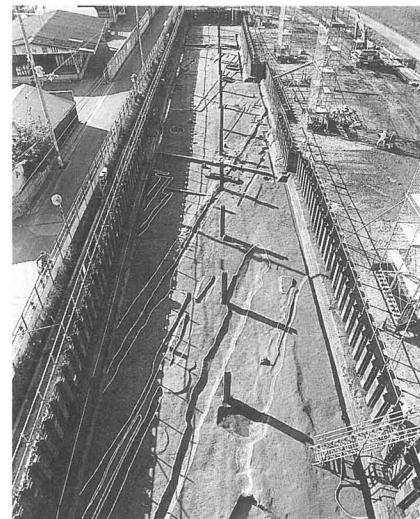


写真19 3調査区島畠1004～島畠1006  
検出状況(東から)  
〔右下ー島畠1006、左奥ー島畠1005、  
島畠1004〕

については拡張が行われている。上面では耕作に関連する南北方向の溝4条(S D1153～S D1156)、東西方向の溝7条(S D1157～S D1163)を検出した。作土層からは近世までの土器が、また盛土内からは平安時代頃の土器が出土している。

#### 島畠1005

3調査区東南部のⅧ-16-9E地区で検出した。北西隅を検出したもので、詳細は不明であるが島畠である可能性が高い。上面の標高はT.P.+8.0m前後を測り、北側および西側に存在する水田1005との高低差は0.15mを測る。作土層は黄灰色細粒砂～極細粒砂混シルト質粘土で、鉄分を含みグライ化している。西側の島畠1004との間隔は約14.0m、北側の島畠1006との間隔は約13.0mを測る。

#### 島畠1006

3調査区北東隅から4調査区西部のⅧ-16-8～10F～J地区で、島畠の北・南・東辺を検出した。東側に水田1008、南側に水田1006、北側に水田1007が存在する。検出部分で東西幅45.0m、南北幅8.9mを測る。上面の標高はT.P.+8.3m前後を測り、各水田面との高低差は水田1006が0.32m、水田1007が0.24m、水田1008が0.13mを測る。作土層は黄灰色細粒砂～粗粒砂混シルトで、鉄分を多く、マンガン斑を少量含む。遺物は作土からは近世までの土器が出土している。上面では土坑3基(S K1012～S K1014)、北辺に並行する溝2条(S D1189・S D1190)、東辺に並行する溝1条(S D1191)を検出した。

#### 島畠1007

4調査区北西部のⅧ-16-9J地区で島畠の南東隅部を検出した。検出部分で東西幅1.4m、南北幅0.5mを測る。東側に水田1008、南側に水田1007が存在する。上面の標高はT.P.+8.3m前後で、水田面との高低差は水田1007が0.24m、水田1008が0.13mを測る。詳細は不明であるが、島畠1006の北側に平行するものと考えられ、水田1007を挟んで間隔は約5mを測る。作土層は2.5Y6/1黄灰色細粒砂混シルト質粘土でグライ化し、鉄分を含み固く締まる。

#### 島畠1008

4調査区中南部のⅧ-17-10A・B地区で検出した。南部は調査区外に続いているが、島畠1006の東側に並行するものと考えられる。検出部分で東西幅15.7m、南北幅4.2mを測る。上面の標高はT.P.+8.2m前後を測る。西側に水田1008、北側に水田1009が存在する。水田面との高低差は水田1008が0.14m、水田1009が0.07mを測る。作土層は10YR6/1褐灰色細粒砂～粗粒砂多混シルトでグライ化し、斑鉄を多く含む。上面では、西辺に平行する溝3条(S D1204～S D1206)、北辺に平行する溝5条(S D1207～S D1211)を検出した。

#### 島畠1009

4調査区北東部のⅧ-17-9・10C～F、Ⅷ-22-1F地区で検出した島畠で、南辺のみを確認したが、平面長方形を呈すると考えられる。南側に水田1009が存在している。検出部分で東西

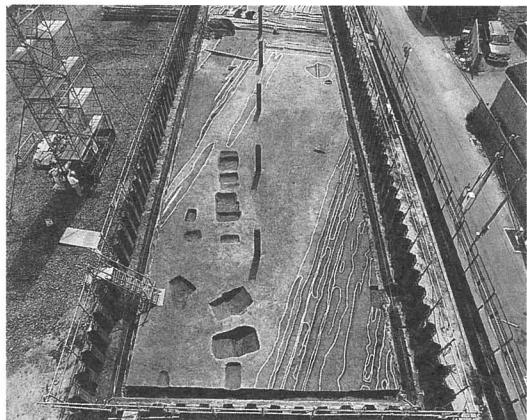


写真20 4調査区西部遺構検出状況(東から) [中央部が島畠1006、右が水田1006、左が水田1007]

幅33.3m、南北幅6.5mを測る。上面の標高はT.P. +8.4m前後を測る。盛土はほとんど削平されており、検出段階で南の水田1009との高低差は最大約0.2mである。作土層は部分的に確認できたもので、5Y5/1灰色細粒砂～粗粒砂混シルトでグライ化し、斑鉄・管鉄を多く含む。上面では、南辺に平行する溝2条（S D1250・S D1251）が検出された。

#### 水田（水田）

##### 水田1001

1調査区の中央部から西部で検出した。島畠1001、島畠1002と畦畔1001に区画される。上面の標高は約T.P. +7.7mを測る。検出部分で東西幅53.0m、南北幅12.0mを測る。上面には井戸5基（S E1002～S E1006）、土坑8基（S K1001～S K1008）、溝15条（S D1019～S D1033）、小穴1個（S P1001）が存在している。特に、井戸については東部に集中しており、その大半が素掘り井戸であるため、旱魃時に一筆耕地のみの灌漑を目的として短期間の使用されたものと推定される。

##### 水田1002

1調査区中南部から2調査区西部で検出した。南部は調査区外に至る。北側を畦畔1001、島畠1002に、東側を畦畔1002に区画されている。上面の標高は約T.P. +7.6mを測る。検出部分で東西幅45.0m、南北幅13.0mを測る。1調査区東部で多数の耕作溝群が検出されている。

##### 水田1003

2調査区の西部で検出した畦畔1002と、3調査区の西部で検出した島畠1003の間を水田1003とした。上面の標高は約T.P. +7.6mを測る。検出部分で東西幅89.0m、南北幅11.5mを測る。水田下位面から多数の溝、小穴が検出されている。

##### 水田1004

島畠1003と島畠1004の間を水田1004とした。検出部分で東西幅7.5m、南北幅9.3mを測る。上面の標高は約T.P. +7.9mを測る。作土を除去した水田下位面で、島畠1003と平行する溝9条（S D1144～S D1152）を検出した。

##### 水田1005

3調査区中央部から東部で検出した畦畔1003の南側、島畠1004・島畠1005に区画された範囲を水田1005とした。検出部分で東西幅53.0m、南北幅10.0mを測る。上面の標高は約T.P. +7.9mを測る。作土を除去した水田下位面で、畦畔1003と平行する溝8条（S D1164～S D1171）、土坑1基（S K1011）を検出した。

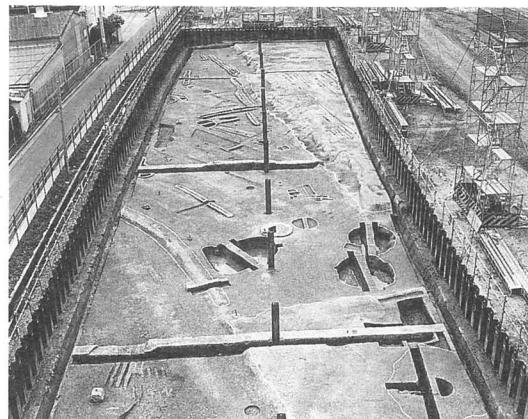


写真21 1調査区中西部遺構検出状況(東から)  
〔奥左一水田1001、奥右一島畠1001、  
手前左一水田1002、手前右一島畠1002〕

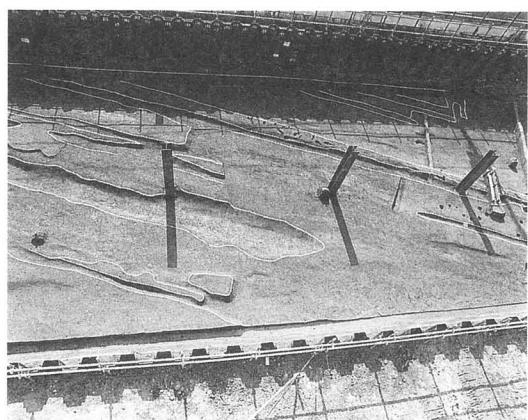


写真22 3調査区水田1005、水田1006検出状況  
〔北から〕〔手前一水田1006、奥一水田1005〕

### 水田1006

3調査区東部から4調査区西部で検出した島畠1006と畦畔1003の間を水田1006とした。検出部分で東西幅55.0m、南北幅8.0mを測る。上面の標高は約T.P.+7.9mを測る。作土は5BG4/1暗青灰色細粒砂～粗粒砂混シルト質粘土でグライ化し、斑鉄を多く含む。この作土を除去した水田下位面で、畦畔1003と並行して伸びる溝17条（S D1172～S D1188）を検出した。

### 水田1007

4調査区西部で検出した島畠1006と島畠1007の間を水田1007とした。検出部分で東西幅19.5m、南北幅4.2mを測る。上面の標高は約T.P.+7.9mを測る。作土は5Y6/1灰色細粒砂～粗粒砂混シルト～粘土質シルトでグライ化し、鉄分を多く含み攪拌が著しい。作土中で、島畠1006北辺に並行する溝8条（S D1192～S D1198）を検出した。

### 水田1008

4調査区中央部から西部で検出した島畠1006と島畠1008の間を水田1008とした。検出部分で東西幅5.5m、南北幅12.5mを測る。上面の標高は約T.P.+8.1mを測る。作土は2.5Y6/1黄灰色細粒砂～粗粒砂混シルト質粘土で、グライ化し、鉄分を多く含む。作土中で、島畠1006東辺と並行する溝4条（S D1200～S D1203）と、これらに直交する方向の溝1条（S D1199）を検出した。

### 水田1009

4調査区中央部から東部で検出した島畠1008と島畠1009の間を水田1009とした。検出部分で東西幅55.0m、南北幅13.0mを測る。上面の標高は約T.P.+8.1mを測る。作土は5Y6/1灰色細粒砂～粗粒砂混粘土質シルトでグライ化し、鉄分を多く含む。作土中で島畠1009南辺と並行する溝38条（S D1212～S D1249）を検出した。VII-17-9 A区作土中で、農具と思われる鉄製品の小片が出土した。

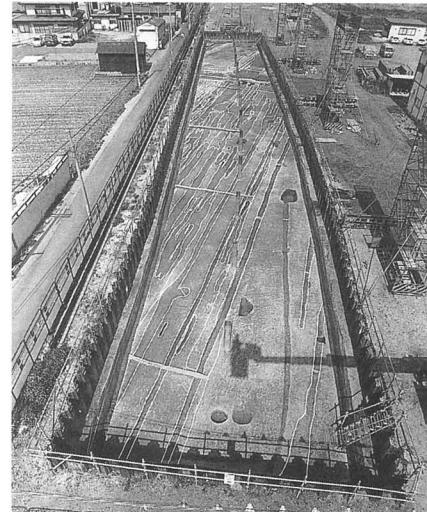


写真23 4調査区水田1009検出状況(東から) [中央一水田1009、手前右一島畠1009、奥左一島畠1008、島畠1006]

### 畦畔(畦畔)

#### 畦畔1001

1調査区中央部のVII-19-5 F・G地区で検出した。島畠1002の南西隅部から西に伸びるもので、水田1001と水田1002を区画している。検出長12.5m、上幅0.6m、基底幅1.25m、高さ0.12～0.3mを測る。7.5YR6/2灰褐色砂礫混シルトで構築されている。

#### 畦畔1002

2調査区西部のVII-19-5・6 J地区、VII-20-5・6 A地区で検出した。南一北に伸びるもので、水田1002と水田1003を区画している。西側には側溝

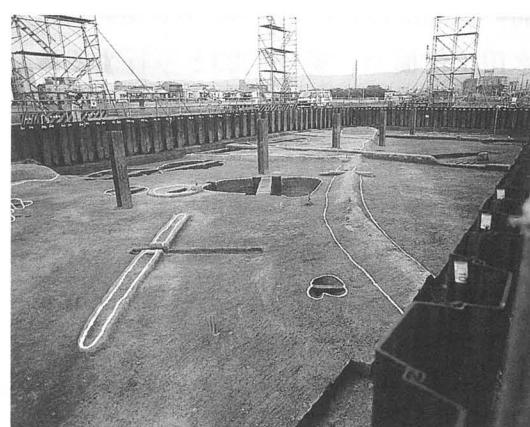


写真24 1調査区畦畔1001検出状況(南西から) [左一水田1001、右一水田1002]

としてSD1089が並行している。検出長11.4m、上幅0.12~0.27m、基底幅0.85~1.0m、高さ0.11~0.24mを測る。構築盛土は、上層が暗オリーブ灰色砂礫混シルト、下層が明褐色粘土質シルトの2層を台形状に盛り上げている。遺物は、盛土内から土師器片、瓦器片が少量出土している。

### 畦畔1003

3調査区中央部から東部にかけてのⅢ-16-8・9C~F地区で検出した。水田1005と水田1006を区画している。北西~南東に約36mにわたって直線的に伸びるもので、高さ約0.2m、上幅0.6m、基底幅0.8mを測る。オリーブ灰色細粒砂~粗粒砂多混シルトの盛土で構築され、鉄分を多く含んでいる。北側には側溝としてSD1172が平行している。後世まで踏襲されており、第Ⅱ層上面では道路状遺構として機能している。

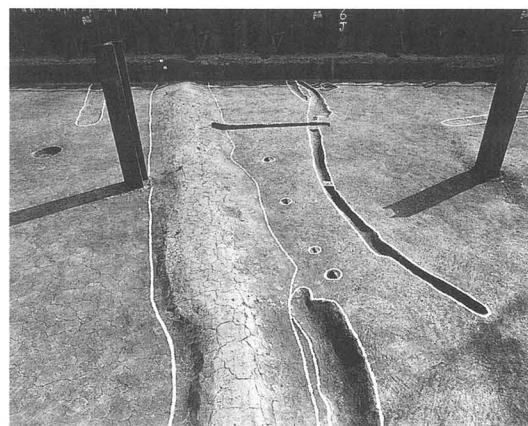
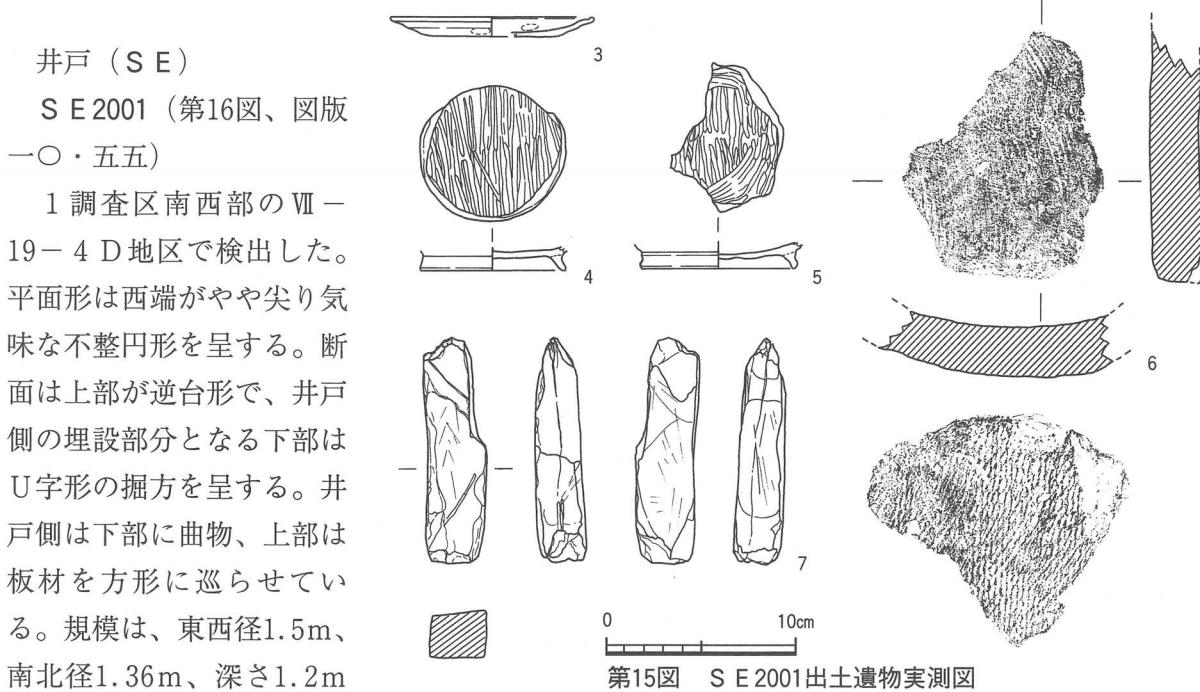


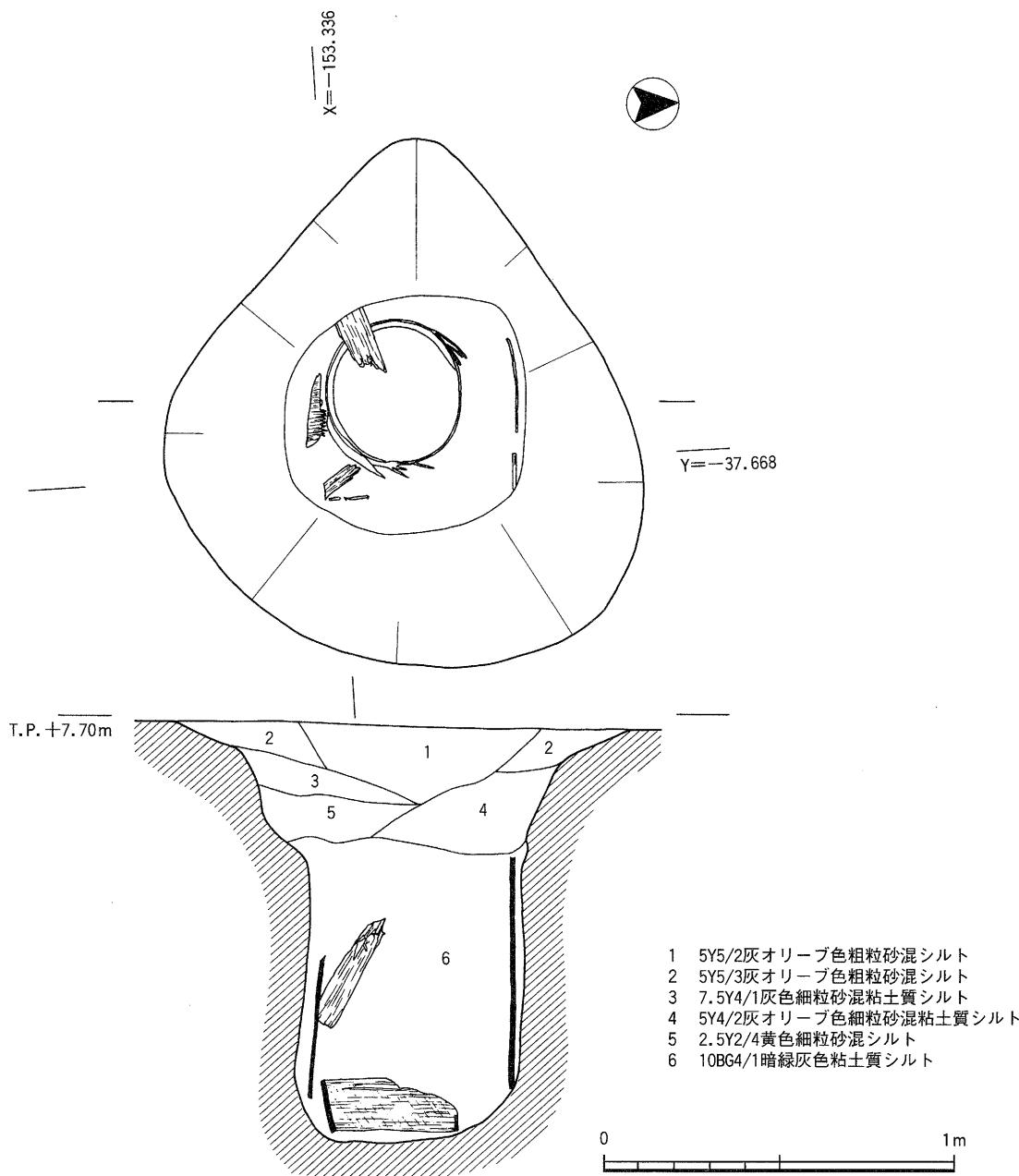
写真25 2調査区畦畔1002検出状況(北から)  
[左一水田1003、右一水田1002]

### 第2面 (第17・18図、図版六~九)

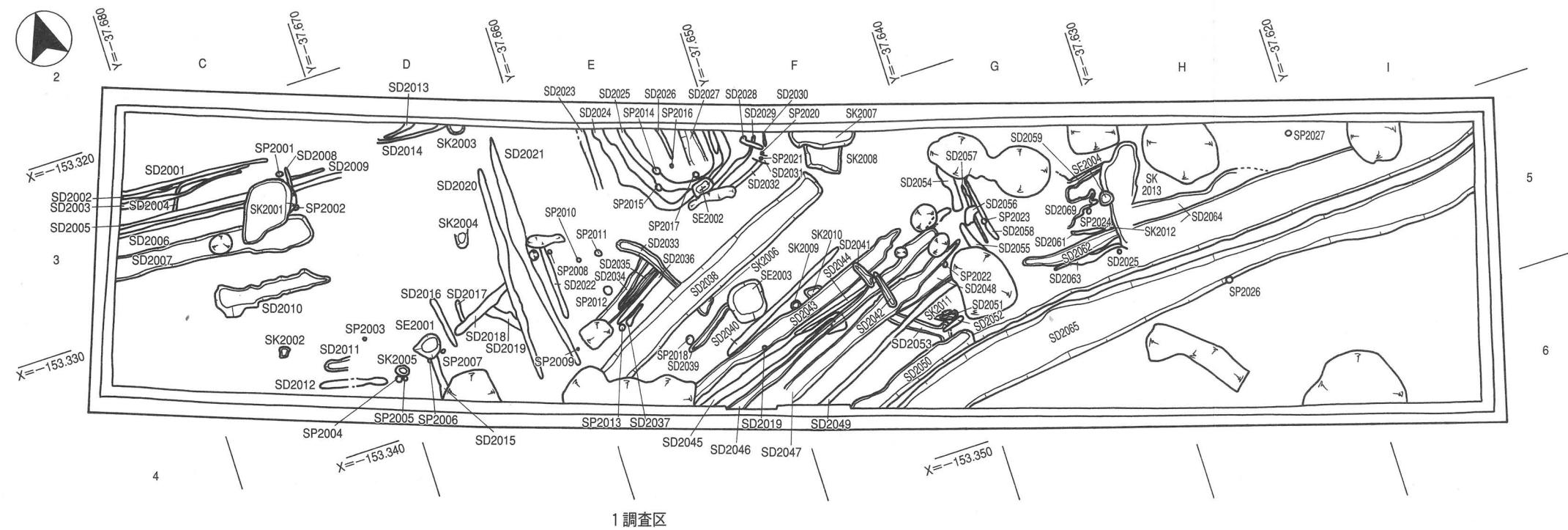
第2面は、概ね第1面で検出した島畠の高まりおよび水田作土を除去した段階で捉えた面に存在する第Ⅲ層上面~下面で検出した。第2面では1調査区・2調査区を中心として、奈良時代~鎌倉時代に至る居住域に関連した遺構群が検出された他、3調査区・4調査区では第1面で検出された生産域を構成する溝遺構群の下層部分で、第1面と構築方向が共通する多条の溝で構成される生産域が検出されている。第2面で検出した遺構としては、井戸4基(SE2001~SE2004)、土坑21基(SK2001~SK2021)、溝286条(SD2001~SD2286)、小穴51個(SP2001~SP2051)、自然河川1条(NR2001)がある。

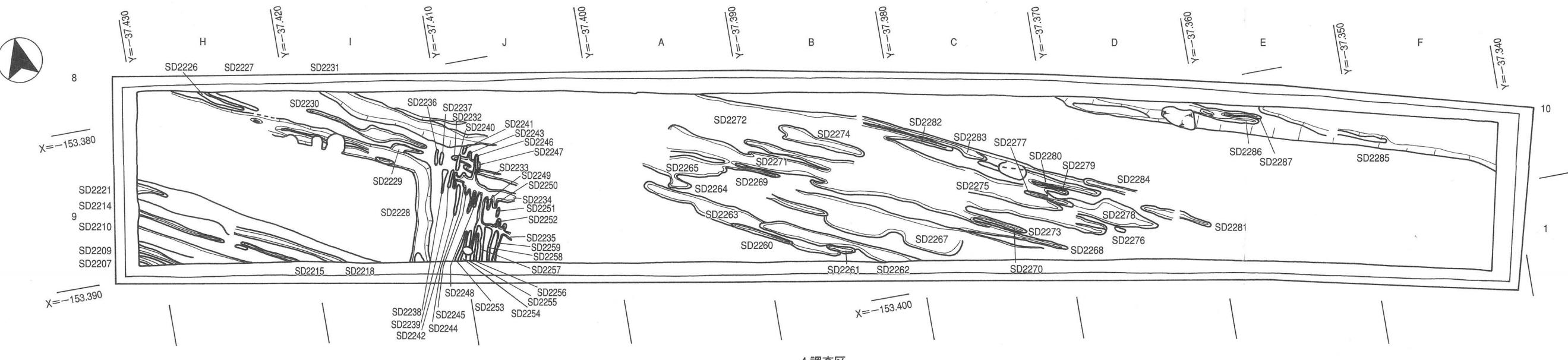
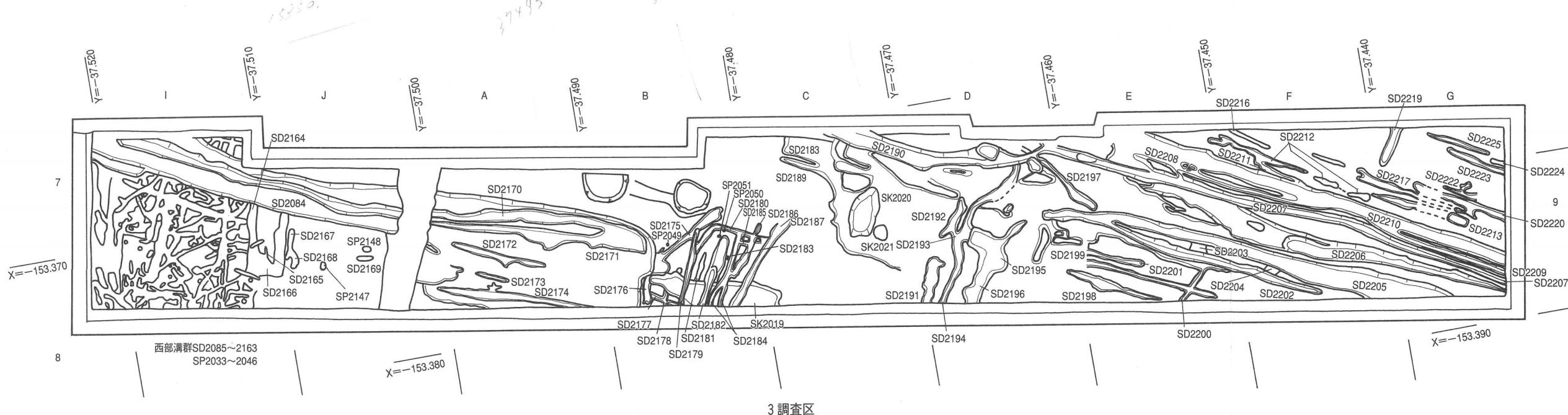


を測る。埋土は上部が5層（1層～5層）、井戸側内は1層（6層）に分層される。井戸側として使用されている板材は、幅10cm前後、長さ50～70cm、厚さ0.5cmの縦板を樺皮で繋ぎ合わせてあるものが一部見られるが、遺存状況が悪く、本来の形状等の詳細は不明である。最下部で検出された曲物は、板材で区割された中央に一段が埋設されている。曲物の法量は径40cm、高さ15cm、厚み0.7cmを測る。遺物は、井戸側内から土師器皿・甕、平瓦、砥石が出土した。5点（3～7）を図化した。3は「て」の字状口縁を呈する土師器小皿である。4・5は黒色土器碗で4がA類、5がB類である。共に高台高は高く「ハ」の字状に貼り付けられている。6は平瓦片で凹面にはハケメ、凸面には縦方向のやや細い縄目タタキが施されている。7は棒状で断面四角形を呈する砥石で、4面に使用痕が認められる。石材は粘板岩である。出土遺物からみて、遺構の帰属時期は平安時代中期後半の11世紀中葉が推定される。



第16図 S E 2001平面断面図





第18図 3・4調査区 第2面検出遺構平面図

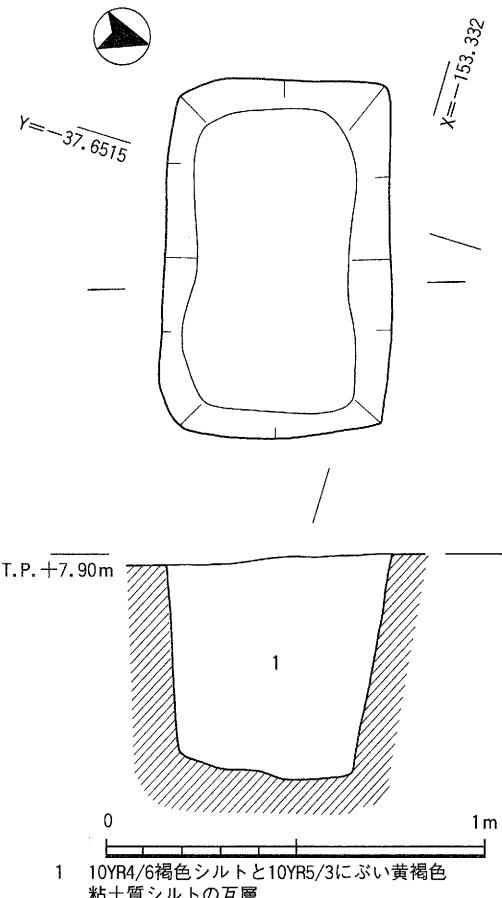
S E 2002 (第19図、図版六)

1 調査区中央部のVII-19-4 E 地区で検出した。東西に長い隅丸長方形を呈する素掘り井戸である。断面は、ほぼ垂直に掘られている。規模は長辺0.95m、短辺0.6m、深さ0.59mを測る。埋土は褐色シルトとにびい黄褐色粘土質シルトの互層である。遺物は土師器の破片が少量出土したが図化し得たものはなく時期等は不明である。

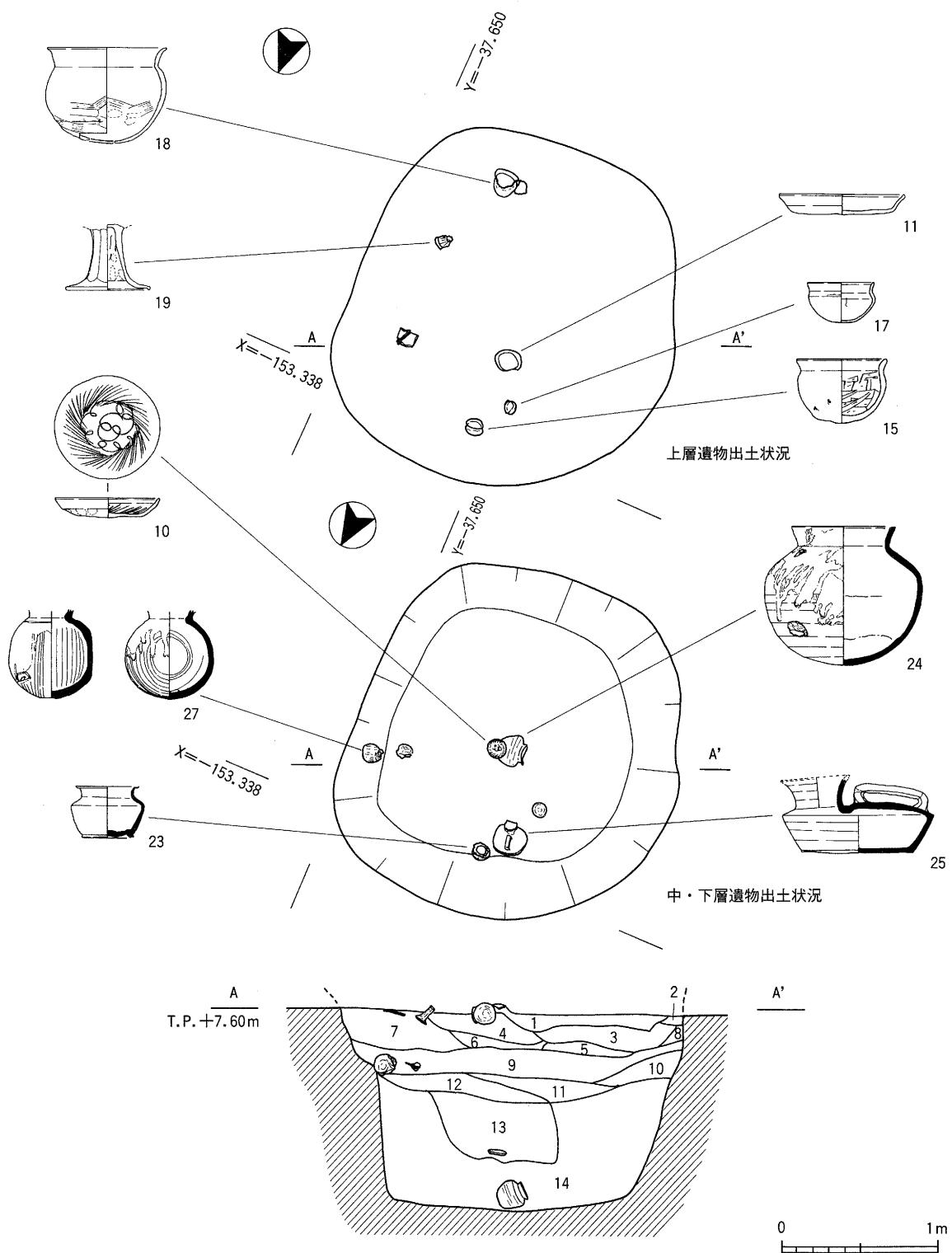
S E 2003 (第20図、図版二・五五～五七)

1 調査区中央部のVII-19-4 E 地区で検出した。円形状を呈する素掘り井戸で、東西径2.1m、南北径2.25m、深さ1.25mを測る。埋土は灰色系のシルトを主体とする上層(1～8層)、灰色系のシルト～粘土を主体とする中層(9～12層)、暗緑灰色～オリーブ色系の粘土質シルトないしはシルト質粘土の下層(13・14層)から成る。遺物は上層から土師器甌、中層から須恵器平瓶・提瓶・小形壺、内面に螺旋状暗文を施した土師器皿、土師器小形壺、下層から内面に連結輪状暗文を施した土師器皿、須恵器の壺が出土した。20点(8～27)を図化した。内訳は土師器12点(8～19)、須恵器8点(20～27)である。8～13は土師器杯で10が杯Cで他は杯Aに分類される。

8・9は共に口縁部付近で小さく外反した後、口縁端部が内側に肥厚する。調整はb0手法である。内面の暗文は見込み部が螺旋状、体部下半が斜放射状である。10は完形で口径13.2cm、器高2.6cmを測る。体部外面中位以下に指頭圧痕が顯著に残る。口縁部内外面は丁寧なヨコナデで端面は内傾する面を有する。内面の暗文は8・9と同様である。淡い褐灰色の色調で、実体鏡(30倍)では角閃石が観察される。河内産である。11は一部口縁部を欠く以外は完存している。口径15.8cm、器高2.7cmを測る。底部外面中央に黒斑が認められる。12・13は体部がやや深目の杯である。調整はb0手法である。14は高台が付く土師器皿Bである。復元口径28.5cmを測る。口縁部は小さく外反し上方に丸味を持って大きく肥厚する端部を形成している。体部内面に斜放射状暗文が施されている。15～18は土師器壺である。完形ないしは一部口縁部を欠く程度のものである。いずれも半球形の体部に強いヨコナデにより外反気味に伸びる口縁部が付く。口径8.5cm、器高5.3cmを測る17が小形品、口径11.5cm、器高8.3cmを測る15・16が中形品、口径15.3cm、器高12.4cmを測る18が大形品に分類される。16が褐灰色、15・17・18が赤褐色系の色調で、胎土に微細な長石粒を多く含む。18の底部に穿孔が認められる。19は土師器高杯の脚部である。柱状部外面は面取りにより八角に区画されている。時期的には平城宮IIIの指標とされる750年前後のものと推定される。20・21は須恵器杯身で21には高台が付く。20は半分が残存しており口径14.4cm、器高3.7cmを測る。底部裏面に墨書による点の文様がある。22は須恵器甌である。体部外面は縦位のタタキ、内面は青海波タタキ調整が行なわれている。23・24は須恵器壺で、共に口縁部の一部を欠く以外は完存している。23は高台部から斜上方に伸びた後、肩部に稜を持つもので、

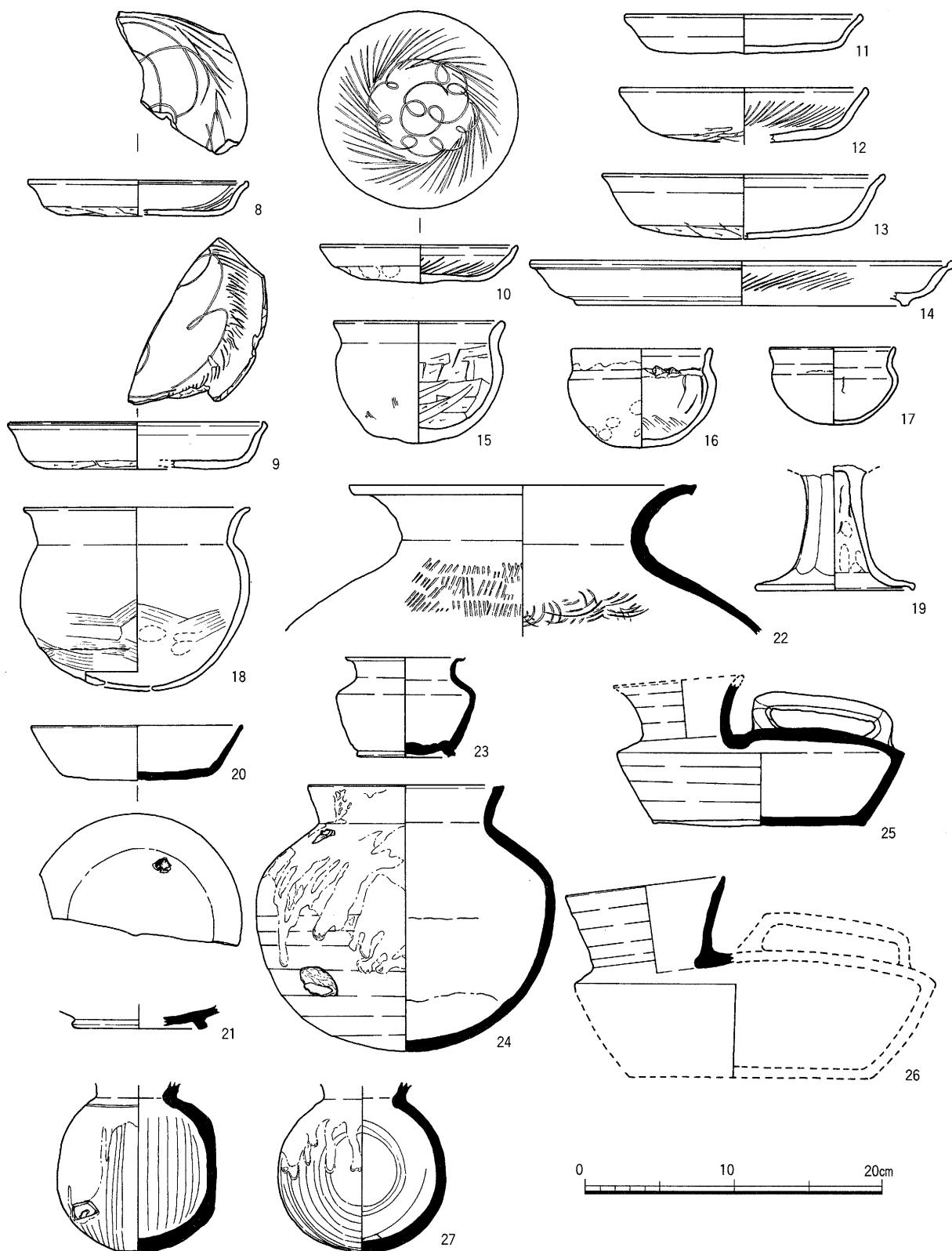


第19図 S E 2002平面面図



- |                   |                          |
|-------------------|--------------------------|
| 1 10Y4/2オリーブ灰色シルト | 9 5Y5/1灰色シルト             |
| 2 10Y5/1灰色シルト     | 10 10Y5/1灰色シルト質粘土        |
| 3 5Y4/1灰色粘土       | 11 10Y4/1灰色粘土            |
| 4 7.5Y5/1灰色シルト    | 12 5G3/1暗緑灰色粘土           |
| 5 5Y5/1灰色シルト      | 13 7.5GY3/1暗緑灰色シルト質粘土    |
| 6 5Y4/2灰オリーブ色シルト  | 14 2.5GY3/1暗オリーブ灰色粘土質シルト |
| 7 5Y4/1灰色シルト      |                          |
| 8 5Y5/2灰オリーブ色シルト  |                          |

第20図 S E 2003平面面図



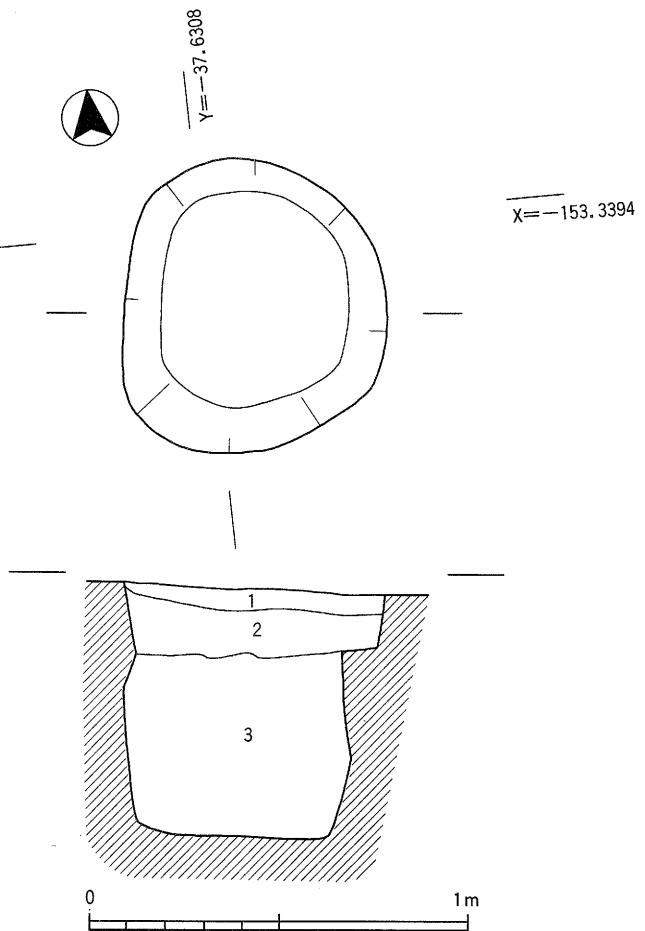
第21図 S E 2003出土遺物実測図

頸部は直立した後大きく外反し広い口縁部を形成する。小形壺Hに分類される。口径8.2cm、器高6.8cm、肩部径9.5cm、高台高0.5cmを測る。24は肩部にわずかな稜を有する球形の体部から斜上方に口縁部が伸びるもので、口縁端部は内傾する面を有する。中形品で口径13.3cm、器高17.9

cm、体部最大径20.2cmを測る。口縁部から体部外面中位にかけて自然釉・灰かぶりが広範囲に認められる他、体部外面上半と体部外面下半の2箇所に須恵器片の付着を認める。25・26は平瓶である。25は口縁部の一部を欠く以外は完存している。体部が稜角を成すもので、逆「U」の字形の把手が付けられている。復元口径8.8cm、復元器高10.2cm、体部最大径19.3cm、底径14.3cmを測る。26は平瓶の口頸部で、口頸部は完存している。口径10.8cm、口頸部高6.1cmを測る。27は小形の提瓶で口頸部以外は完存している。体部高10.4cm、体部幅10.7cmを測る。体部は球形であるが側面の一方は平坦な面を有する。体部上半から中位にかけて自然釉が認められる他、体部中位よりやや下に須恵器片の付着が認められる。上部から出土した遺物からみて遺構廃絶時期は平城宮Ⅲ（750年前後）が想定される。なお、口縁部を欠く土器が多く、これらは井戸廃絶に関わる祭祀遺物である可能性が高い。

#### S E 2004（第22図、図版一〇）

1 調査区北東部のVII-19-4・5 G 地区で検出した。平面ほぼ円形を呈する素掘り井戸で、断面はほぼ逆台形を呈する。規模は、径0.7~0.78m、深さ0.65mを測る。埋土は3層がほぼ水平に堆積している。遺物は土師器の破片が少量出土したが図化し得たものはない。



- 1 10YR6/1褐色シルト
- 2 10YR7/1灰白色細粒砂と10YR4/2灰黄褐色粘土質シルトの互層
- 3 10YR7/2灰黄褐色粘土質シルト

第22図 S E 2004平面面図

#### 土坑（S K）

##### S K 2001（第23図、図版一二）

1 調査区北西部のVII-19-3 C 地区で検出した。不定形を呈する大形の土坑で、上部で東西に伸びる3条の溝（S D 2005～S D 2007）を切っている。規模は、東西幅2.45m、南北幅2.7~3.25m、深さ0.96mを測る。断面は椀形で、一部袋状になる部分が認められる。埋土は8層に分層でき、上層の1・2層はブロックを含む層相である。遺物は各層から、土師器、須恵器、瓦器椀、丹波焼擂鉢、国産陶磁器、平瓦の破片が出土したが図化し得たものはない。

##### S K 2002

1 調査区南西部のVII-19-4 C 地区で検出した。不定形を呈するもので、東西幅0.5m、南北幅0.64m、深さ0.11mを測る。埋土は5 Y5/2灰オリーブ色中砂混シルトの単一層である。遺物は出土していない。

### S K 2003

1 調査区北西部のVII-19-3 D 地区で検出した。北部は調査区外に至る。検出部分で東西幅0.9m、南北幅0.46m、深さ0.39mを測る。埋土は10YR8/8黄橙色砂礫混シルトである。遺物は土師器の破片が極少量出土したが図化し得たものはない。

### S K 2004

1 調査区西部のVII-19-4 D 地区で検出した。北部は搅乱により削平を受けている。検出部分で東西幅0.7m、南北幅0.82m、深さ0.19mを測る。埋土は10YR6/4にぶい黄褐色シルトの単一層である。遺物は出土していない。

### S K 2005

1 調査区西部のVII-19-4 C・D 地区で検出した。南側でS P 2004とS P 2005に接している。東西方に向かって長い楕円形で長径0.65m、短径0.56m、深さ0.07mを測る。埋土は7.5Y5/2灰オリーブ色中粒砂混シルトの単一層である。遺物は出土していない。

### S K 2006

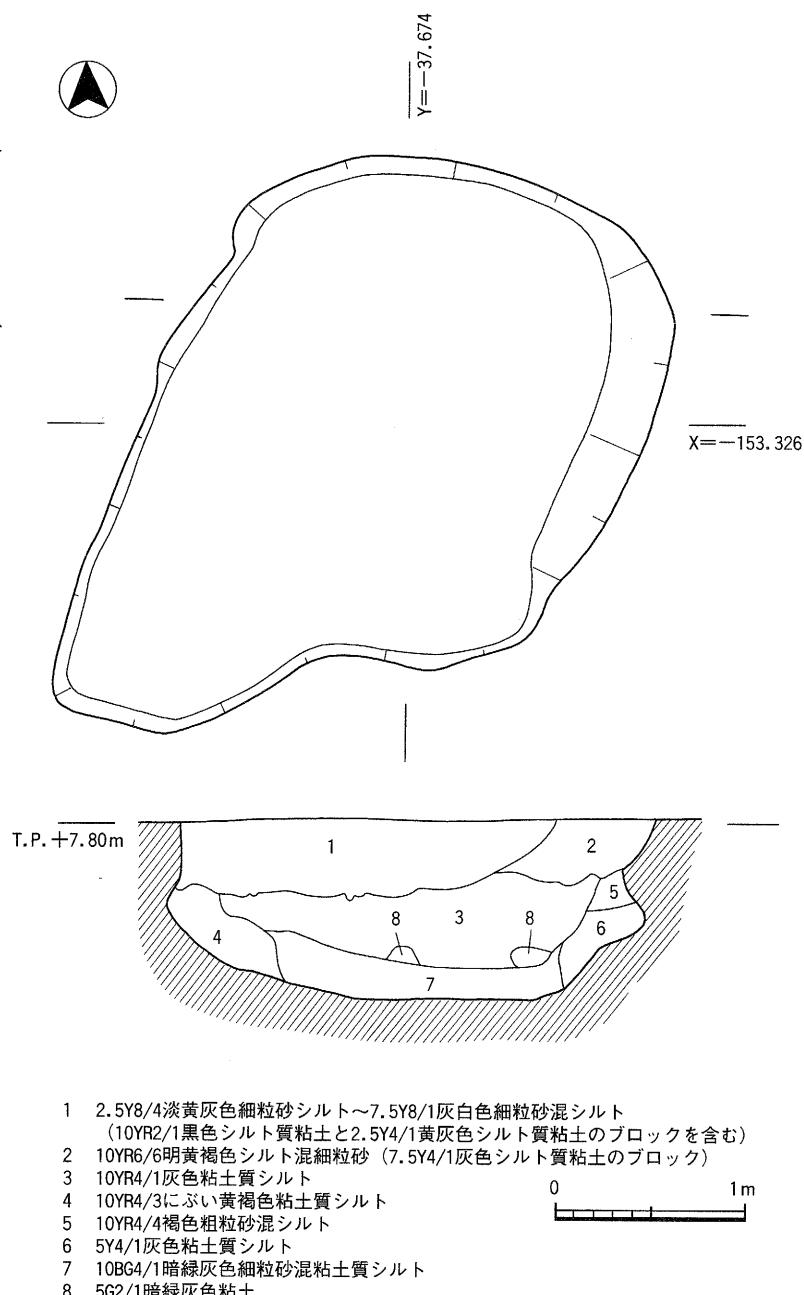
1 調査区中央部のVII-19-4 E 地区で検出した。北側がS D 2038 に切られているが、検出部分からみて楕円形を呈するものと推定される。規模は、東西幅0.5m、南北幅1.15m、深さ0.07mを測る。埋土は10YR3/2黒褐色粘土質シルトの単一層である。遺物は出土していない。

### S K 2007

1 調査区北中部のVII-19-4 F 地区で検出した。南部でS K 2008を切り、北部は調査区外に至る。検出部分で、東西幅3.7m、南北幅0.7~1.1m、深さ0.33mを測る。埋土は灰オリーブ系のシルト~粘土質シルトの3層から成る。遺物は出土していない。

### S K 2008

S K 2007の南側で検出した。北部はS K 2007に切られている。検出部分の規模は、東西幅1.9



第23図 S K 2001平面面図

m、南北幅1.1~1.6m、深さ0.35mを測る。埋土は上層から灰オリーブ色中粒砂混シルト、灰色シルト、灰オリーブ色砂質シルト、暗オリーブ灰色細粒砂混じり粘土質シルトの4層に分層される。遺物は各層から土師器、須恵器、瓦器、国産陶磁器の破片が極少量出土した。

#### S K 2009

1調査区中央部のVII-19-4 F地区で検出した。南部はS D 2043に切られている。検出部分で東西幅0.55m、南北幅0.27m、深さ0.09mを測る。埋土は10YR3/2黒褐色粘土質シルトの単一層である。遺物は須恵器の破片が極少量出土している。

#### S K 2010

S K 2009に近接している。S K 2009と同様、南部はS D 2043に切られている。検出部分で東西幅0.95m、南北幅0.35m、深さ0.11mを測る。埋土は10YR3/2黒褐色粘土質シルトの単一層である。遺物は土師器の破片が極少量出土している。

#### S K 2011

1調査区中央部のVII-19-5 F地区で検出した。南部はS D 2051に切られている。検出部分で東西幅0.66m、南北幅0.17m、深さ0.07mを測る。埋土は10YR3/2黒褐色粘土質シルトの単一層である。遺物は出土していない。

#### S K 2012

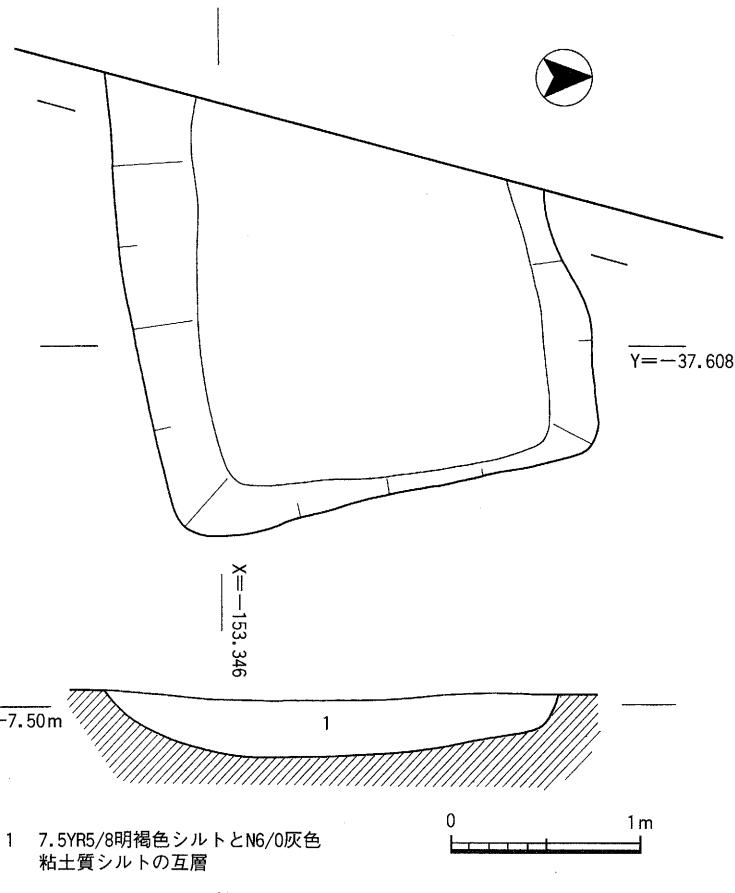
1調査区東部のVII-19-5 G地区で検出した。東側をS K 2013、南側をS D 2062に切られている。検出部分で東西幅0.63m、南北幅0.4m、深さ0.03mを測る。埋土は10YR3/2黒褐色粘土質シルトの単一層である。遺物は出土していない。

#### S K 2013

1調査区北東部のVII-19-4・5 G・H地区で検出した。南-北方向に溝状に伸びる土坑で、S K 2012・S D 2059・S D 2062・S D 2064を切り、S E 2004に切られている。規模は、東西幅1.1~2.0m、南北幅5.8m、深さ0.19mを測る。埋土は黄灰色砂礫混シルトの単一層である。遺物は土師器の破片が少量出土したが、図化し得たものはない。

#### S K 2014 (第24図、図版一二)

2調査区北西端のVII-19-5 J T.P.+7.50m地区で検出した。S D 2065を切っており、西は調査区外に至る。検出部では方形に近く、規模は東西幅1.45~2.5m、南北幅2.4m、深



第24図 S K 2014平面図

さ0.3mを測る。断面形状は逆台形を呈する。埋土は互層で構成される不均質な層相である。遺物は土師器・須恵器・瓦器・屋瓦の小片が出土している。出土遺物としては、奈良時代～中世のものが混在しているが、最も新しい遺物である瓦器碗片からみて中世頃の遺構であると推定される。

#### S K 2015（第25図、図版一二）

S K 2014の東部に近接するVII-19-5 J 地区で検出した土坑で、S D 2065を切っている。東一西に長い楕円形を呈するもので、長径2.15m、短径1.74m、深さ0.35mを測る。断面は逆台形を呈し、西部にテラス状の部分を有する。埋土は互層で構成される1層から成る。遺物は土師器、須恵器の破片が少量出土したが、図化し得たものはない。

#### S K 2016

2調査区西端のVII-19-5 J 地区で検出した。西は調査区外に至る。検出部の平面形は半円形で、検出部分で東西幅0.8m、南北幅0.83m、深さ0.15mを測る。断面は皿形を呈し、埋土は明褐色シルトと灰色粘土質シルトの互層である。遺物は出土していない。

#### S K 2017

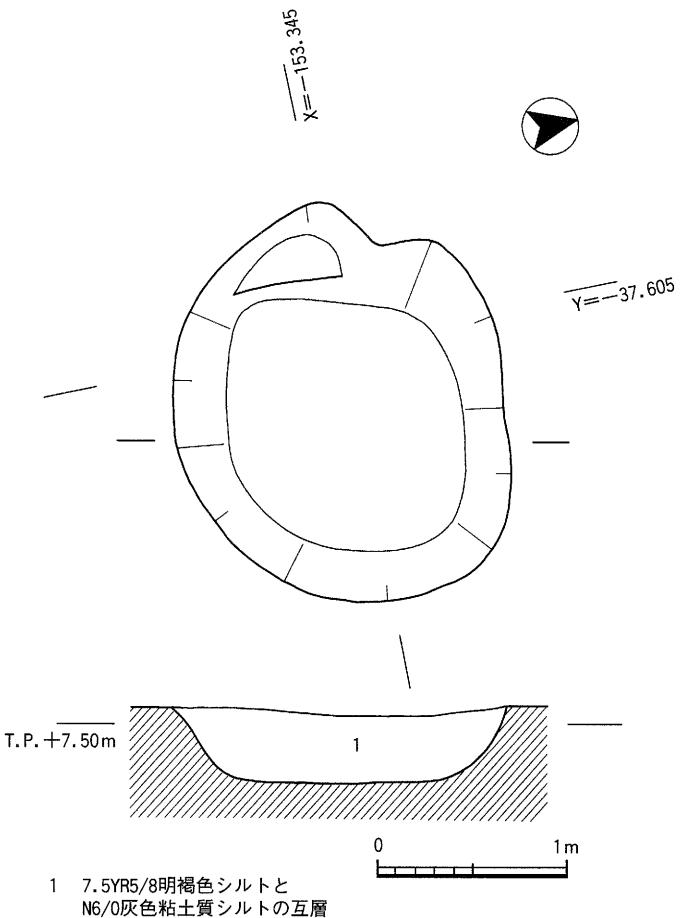
2調査区中西部のVII-20-6 B 地区で検出した。南北に長い楕円形を呈する。長径0.96m、短径0.7m、深さ0.08mを測る。断面は皿形を呈し、埋土は黒褐色砂礫混シルトの単一層である。遺物は出土していない。

#### S K 2018

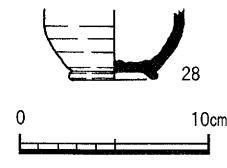
2調査区南東部のVII-20-7・8 F 地区で検出した。南部は調査区外に至る。検出部分で東西幅2.13m、南北幅0.98m、深さ0.15mを測る。埋土は7.5YR5/6明褐色シルトの单一層である。遺物は出土していない。

#### S K 2019（第26図、図版八・五七）

3調査区中央部のVII-16-8・9 B・C 地区で検出した。S D 2179・S D 2182・S D 2184・S D 2187に切られていおり、南部は調査区外に至る。検出部分は東西に長く、東に行くほど幅を増しており、東西幅8.6m、南北幅0.6～1.5m、深さ約0.4mを測る。埋土は上部が褐灰色系のシルト質粘土・粘土質シルト、最下層は10YR6/2灰黄褐色極細粒砂～粗粒砂多混シルトで、全体にマンガン斑・斑鉄を多く含んでいる。遺物は奈良時代後半を中心とする土師器、須恵器が少量出土している。須恵器壺1点(28)を図化した。28は須恵器小形壺で体部中位以下が残存している。高台径4.7cm、高台高0.4cmを測る。奈良時代後半の所産である。



第25図 S K 2515平面図



第26図 S K 2019出土遺物  
実測図

### S K 2020

3調査区中央部のⅧ-16-8C地区で検出した。南北に長い楕円形を呈する。長径3.5m、短径1.7m、深さ0.8mを測る。断面形状は逆台形を呈する。埋土はN5/0灰色粘土質シルト～シルトのブロック状を呈し、上部に鉄分を多く含んでいる。埋土の様相が第1面検出の井戸に類似しており、当遺構は本来第1面の遺構の可能性がある。遺物は出土していない。

### S K 2021

S K 2020の南東に隣接する。不整円形を呈するもので、径0.9m、深さ0.1mを測る。断面皿形を呈し、埋土は7.5Y5/1灰色細粒砂～中粒砂混シルトで鉄分を多く含む。遺物は出土していない。

### 溝（S D）

1調査区および2調査区北西部にかけては65条（S D 2001～S D 2065）を検出した。やや規模の大きいS D 2007、S D 2038、S D 2064、S D 2065の4条を除けば幅0.2～1.0m、深さ0.05～0.18m程度の小溝が大半である。また、溝の開削方向は東～西方向、南～北方向、北東～南西方向、北西～南東方向がある。溝の開削方向の違いとしては、検出された遺構が8世紀中葉～近世の長期間に及ぶことに起因するものと考えられる。溝の性格としては、居住域内を区画するものや、耕作に関連したものがある。本文では、やや規模の大きいS D 2007・S D 2038・S D 2064・S D 2065の4条および出土遺物を掲載したS D 2021・S D 2022・S D 2024・S D 2062についてのみ記し、それ以外の溝は第18表に示した。

### S D 2007

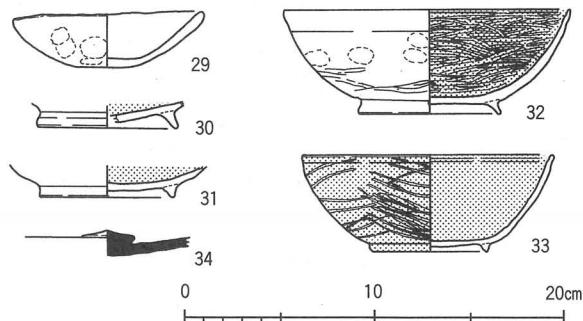
1調査区北西部のⅧ-19-3B・C地区で検出した。東～西に伸びるもので、東部でS K 2001に切られている。検出長10.8m、幅1.2～1.8mを測る。深さは西部で0.12m、東部で0.15mと東部が若干低い。埋土は皿形を呈する。埋土は灰色粗粒砂混粘土質シルトの単一層である。遺物は黒色土器碗（A類）、瓦器碗をはじめ土師器、須恵器の破片が少量出土した。

### S D 2021（第27図、図版六・五八）

1調査区西部のⅧ-19-3・4D地区で検出した。南～北に伸びるもので、全長13.3m、幅0.3～0.9m、深さ0.35mを測る。埋土は10YR3/3暗褐色シルトの単一層である。遺物は土師器、須恵器、黒色土器の小片が少量出土している。黒色土器2点（30・31）を図化した。共に黒色土器A類碗の小片である。31は高台部が完存しており、高台径7.1cm、高台高0.6cmを測る。11世紀前半の所産と推定される。

### S D 2022（第27図、図版六・五八）

S D 2021の東に隣接して並行に伸びる。全長4.0m、幅0.2～0.3m、深さ0.08mを測る。埋土は10YR3/3暗褐色シルトの単一層である。遺物は奈良時代に比定される土師器、須恵器等の小片が極少量出土している。須恵器杯蓋1点（34）を図化した。須恵器杯蓋のつまみ部分の小片である。奈良時代の所産であるが、小片のため時期は限定できない。



第27図 S D 2021(30・31)、S D 2022(34)、S D 2024(29・32・33)出土遺物実測図

#### S D 2024 (第27図、図版六・五八)

1調査区中北部のⅦ-19-3・4E・F地区で検出した。検出部分で「U」字状を呈する。幅0.5~1.3m、深さ0.22mを測る。埋土は10YR3/3暗褐色シルトの単一層である。遺物は土師器、須恵器、黒色土器が少量出土している。3点(29・32・33)を図化した。29は土師器杯である。2/3以上が残存している。手づくね成形によるもので、口縁部の一部は波状口縁を成す。口径9.9cm、器高2.8cmを測る。32・33は黒色土器碗である。32は深目の体部に「ハ」の字に貼り付けられた高台が付くA類碗である。口縁部の一部を欠く以外は完存している。口径15.2cm、器高5.5cm、高台高0.8cmを測る。外面体部の調整は下半のヘラミガキを除けば弱いナデを中心で、中位の一箇所に糲の痕跡がある。体部外面には横位の密なヘラミガキ調整が全面に施されている。33は黒色土器B類碗で2/3以上が残存している。体部はやや深目で、口縁端部からやや下った位置に沈線が巡る。高台高はやや低くほぼ垂直に貼り付けられている。法量は口径13.2cm、器高5.1cm、高台径6.0cm、高台高0.4cmを測る。体部外面は密なヘラミガキとナデにより平滑にされており光沢を放つ。炭素付着は深く浸透しており器壁も黒い。11世紀中葉の所産と推定される。

#### S D 2038

1調査区中央部のⅦ-19-4・5E・F地区で検出した。北東-南西に伸びるが、南端部は攪乱によって切られている。検出長15.5m、幅1.5~1.7m、深さ0.2m前後を測る。埋土はオリーブ黒色砂礫混粘土質シルトの単一層である。遺物は、奈良時代に比定される土師器、須恵器の破片が少量出土したが図化し得るものはない。

#### S D 2062 (第28図、図版六・五八)

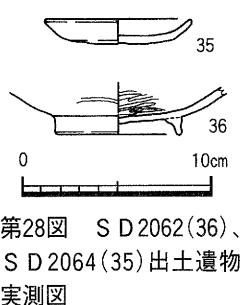
1調査区の東部で検出した。東-西方向に伸びる。検出長5.4m、幅0.5~0.8m、深さ0.1mを測る。埋土は10YR6/4にぶい黄橙色粘土質シルトの単一層である。遺物は土師器、須恵器、黒色土器の破片が極少量出土している。黒色土器1点(36)を図化した。B類に分類される。高台部は完存しており、高台径6.6cm、高台高1.0cmを測る。11世紀後半の所産と推定される。

#### S D 2064 (第29図、図版六・五八)

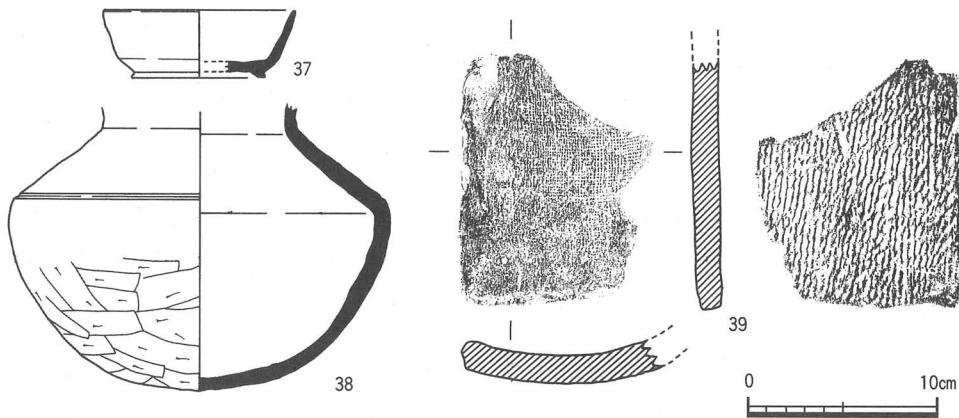
1調査区北東部のⅦ-19-5G~I地区で検出した。南側に隣接するS D 2065に並行して、北東-南西に伸びるが、東端部はS E 1009によって切られている。検出長13.0m、幅2.3m前後を測る。深さは南西部で0.24m、北東部で0.14mと南西部がやや低くなる。埋土は上層がにぶい褐色シルト、下層が褐灰色粘土質シルトの2層に分層される。遺物は下層から土師器、須恵器、黒色土器、屋瓦等の破片が極少量出土した。土師器小皿1点(35)を図化した。扁平な底部から斜上方へ口縁部が短く伸びる。口径7.7cm、器高1.2cmを測る。13世紀後半の所産か。

#### S D 2065 (第29図、図版六・五八)

1調査区東部から2調査区の北西部で検出した。S D 2064の南側に隣接して並行に伸びるもので、2調査区の北西部ではS K 2014・S K 2015に切られている。検出長44.5m、幅1.3~2.7mを測る。深さは、南西部で0.06m、北東部で0.46mと北東部へ向かうほど低くなる。埋土はにぶい黄橙色シルトの単一層である。遺物には、土師器皿・甕・高杯・羽釜、須恵器壺、屋瓦のほか、馬歯がある。3点(37~39)を図化した。37は高台を有する須恵器杯身である。図面上で復元される法量は、口径10.2cm、器高3.6cm、高台径7.2cm、



第28図 S D 2062(36)、  
S D 2064(35)出土遺物  
実測図



第29図 SD 2065出土遺物実測図

高台高0.3cmを測る。38は須恵器壺で頸部下半以下約1/2が残存している。底部は丸底で体部上位の稜角を境として肩部は内傾している。体部と肩部の境に沈線が巡るほか、体部の中位以下に板ナデによる調整が行なわれている。須恵器であるが、焼成が不良のため視覚的には瓦質製品と見紛う。7世紀中葉の所産か。39は平瓦片で、凹面にやや粗い布目、凸面に縦位の縄目タタキを施す。図化掲載した遺物は時期差があるが、37の遺物から見て奈良時代中葉頃迄は機能を果たしていたものと推定される。

第18表 1・2調査区 SD 2001～SD 2063法量表(単位m)

遺構番号	地区	全長 (検出長)	幅 (最大)	深さ	埋土	出土遺物
SD 2001	VII-19-3B・C	8.10	0.30	0.10	5Y7/2灰白色シルト	
SD 2002	"	3.60	0.20	0.07	"	
SD 2003	"	6.70	0.40	0.07	"	土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、瓦
SD 2004	VII-19-3C	5.30	0.20	0.04	"	
SD 2005	VII-19-3B・C	7.10	0.50	0.07	"	
SD 2006	VII-19-3B～D	12.50	0.30	0.09	"	
SD 2008	VII-19-3C	1.20	0.20	0.06	10YR6/4にぶい黄橙色シルト	土師器、須恵器杯、瓦
SD 2009	"	1.90	0.20	0.05	"	
SD 2010	VII-19-3・4C	6.40		0.10	5Y6/3オリーブ色黄色粘土質シルト	
SD 2011	VII-19-4C	1.20	0.60	0.07	5Y6/3オリーブ黄色細粒砂混シルト	
SD 2012	"	3.70	0.30	0.10	5Y5/3灰オリーブ色粗粒砂混シルト	
SD 2013	VII-19-3D	1.60	0.40	0.04	10YR6/4にぶい黄橙色粘土質シルト	
SD 2014	"	3.70	0.30	0.04	"	土師器、須恵器、黒色土器碗(A類)
SD 2015	VII-19-4D	2.20	0.50	0.07	5Y2/3灰オリーブ色細粒砂混シルト	
SD 2016	"	3.00	0.30	0.07	"	
SD 2017	"	1.40	0.20	0.05	"	
SD 2018	"	3.80	0.50	0.08	7.5Y4/2灰オリーブ色粗粒砂混シルト	
SD 2019	"	2.10	0.60	0.08	5Y5/2灰オリーブ色粗粒砂混シルト	
SD 2020	VII-19-3・4D	11.70	0.60	0.32	10YR3/3暗褐色シルト	土師器、黒色土器(A類)、須恵器
SD 2023	VII-19-3・4E	3.40	0.40	0.09	"	
SD 2025	"	9.10	0.60	0.12	"	土師器、須恵器
SD 2026	"	1.60	0.30	0.05	"	

遺構番号	地 区	全長 (検出長)	幅 (最大)	深さ	埋 土	出土遺物
S D 2027	VII-19-3・4E	1.90	1.00	0.20	10YR3/3暗褐色シルト	土師器、黒色土器(A類)、須恵器
S D 2028	VII-19-4F	1.30	0.20	0.05	"	
S D 2029	"	3.80	0.20	0.06	"	
S D 2030	"	0.80	0.20	0.04	10YR6/2灰褐色シルト	土師器、須恵器
S D 2031	"	1.05	0.45	0.10	10YR3/3暗褐色シルト	土師器、須恵器
S D 2032	"	1.90	0.40	0.08	"	土師器、須恵器
S D 2033	VII-19-4E	4.10	0.60	0.08	2.5Y4/1黄灰色粘土質シルト	
S D 2034	"	3.90	0.40	0.05	2.5Y3/1黒褐色粘土質シルト	
S D 2035	"	3.90	0.40	0.05	"	
S D 2036	"	3.60	0.30	0.05	"	
S D 2037	"	1.50	0.40	0.11	"	
S D 2039	VII-19-4・5E	3.20	0.50	0.05	"	
S D 2040	VII-19-4・5E・F	8.40	0.50	0.05	7.5YR5/1褐灰色砂礫混粘土質シルト	土師器皿・甕、黒色土器(A類)、須恵器
S D 2041	VII-19-4・5F	1.60	0.40	0.05	"	土師器、須恵器
S D 2042	"	2.20	0.30	0.07	7.5Y4/1灰色粘土質シルト	土師器皿、須恵器
S D 2043	VII-19-4・5E・F	11.10	1.00	0.04	10YR6/4にぶい黄橙色粘土質シルト	
S D 2044	VII-19-4・5F	4.90	0.30	0.03	7.5YR5/1褐灰色砂礫混粘土質シルト	土師器皿、黒色土器(A類)
S D 2045	VII-19-5E・F	8.70	0.80	0.11	10YR6/4にぶい黄橙色粘土質シルト	土師器、須恵器、平瓶
S D 2046	VII-19-4・5E～G	15.80	1.00	0.05	7.5YR5/1褐灰色砂礫混粘土質シルト	土師器、須恵器
S D 2047	"	13.00	1.30	0.12	10YR3/1黒褐色粘土質シルト	土師器、須恵器、瓦器、屋瓦
S D 2048	VII-19-5F	5.10	1.20	0.01	"	
S D 2049	"	9.70	0.40	0.04	7.5YR5/1褐灰色砂礫混粘土質シルト	土師器、須恵器
S D 2050	"	7.00	2.00	0.03	7.5YR8/8黄橙色粘土質シルト	土師器、須恵器、瓦
S D 2051	"	1.40	0.40	0.08	2.5Y4/2暗灰黄色砂礫混シルト	
S D 2052	"	1.40	0.40	0.07	"	
S D 2053	"	3.30	0.60	0.08	7.5Y4/1灰色粘土質シルト	土師器
S D 2054	VII-19-4G	2.00	0.70	0.09	10YR6/4にぶい黄橙色粘土質シルト	土師器、須恵器
S D 2055	VII-19-4・5G	1.50	0.40	0.14	"	
S D 2056	VII-19-4G	1.10	0.60	0.06	"	
S D 2057	"	3.40	0.20	0.05	"	
S D 2058	"	3.70	0.50	0.08	"	
S D 2059	"	2.20	0.50	0.05	"	
S D 2060	VII-19-4・5G	1.70	1.50	0.05	"	
S D 2061	VII-19-5G	1.80	0.30	0.04	"	
S D 2063	"	3.80	0.40	0.14	"	

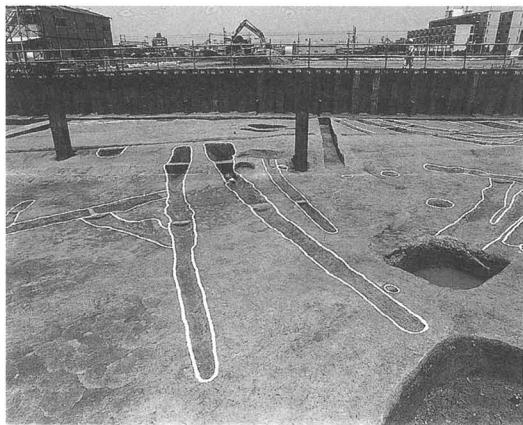


写真26 1調査区西部溝検出状況(南から)

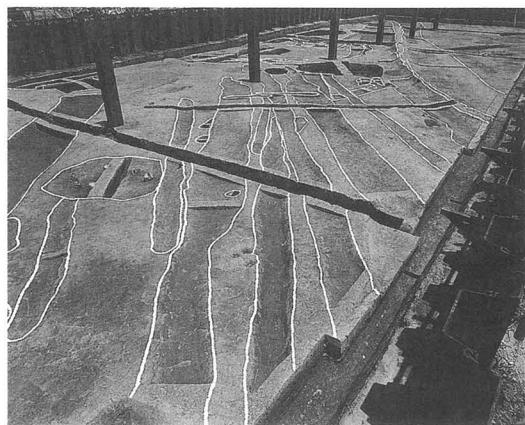


写真27 1調査区中央部溝検出状況(南西から)

### S D 2066

2調査区西部のVII-20-5・6A地区で検出した。北東-南西に伸びる。規模は検出長10.8m、幅0.7~1.2m、深さ0.5m前後を測る。断面は楕形を呈し、埋土は上層が明褐色シルト、下層が明褐色細粒砂の2層から成る。遺物は出土していない。

### S D 2067

2調査区のVII-20-6・7B地区に位置する南-北に伸びる溝で、規模は検出長10.2m、幅0.42~0.7m、深さ0.18~0.34mを測る。断面は楕形を呈し、埋土は上層が灰白色細粒砂~粗粒砂、下層が灰白色極細粒砂である。遺物は出土していない。

### S D 2068

2調査区西部のVII-20-6・7C・D地区で検出した。北東-南西に伸びるもので、検出長16.6m、幅0.4~0.58m、深さ0.08m前後を測る。断面は楕形を呈し、埋土は灰白色極細粒砂と明褐色シルトの互層である。遺物は須恵器高杯脚部・甕口縁などが出でている。

### S D 2069

2調査区中央部のVII-20-7C・D地区で検出した。北東-南西に伸びる部分と、東-西に枝状に伸びる部分がある他、南端部分は幅広となっている。検出長4.5m、幅約0.38~2.4m、深さ0.03~0.11mを測る。断面は皿形を呈し、埋土は灰白色極細粒砂と明褐色シルトの互層である。遺物は出土していない。

### S D 2070

2調査区中央部のVII-20-6E地区で検出した。東-西に伸びるもので、全長1.7m、幅0.2~0.34m、深さ0.04mを測る。断面は皿形を呈し、埋土は暗褐色砂礫混シルトの単一層である。遺物は出土していない。

### S D 2071

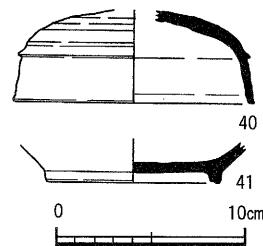
2調査区東部のVII-20-7E・F地区で検出した。東-西に伸びるもので、全長5.67m、幅0.5~0.8m、深さ0.17mを測る。断面は皿形を呈し、埋土は暗褐色砂礫混シルトの単一層である。遺物は土師器、須恵器の破片が出でしている。

### S D 2072

2調査区東部のVII-20-7E・F地区で検出した。東部でNR2001を切っている。東-西に伸びるもので、検出長12.5m、幅0.3~0.87m、深さ0.03~0.07mを測る。断面は皿形を呈し、埋土は褐灰色シルトの単一層である。遺物は出土していない。

### S D 2073~S D 2075 (第30図、図版七・五八)

2調査区北東部のVII-20-6・7F地区で検出した。3本とも南-北に伸びるもので、検出長1.2~4.3m、幅約0.32~1.15m、深さ0.06~0.12mを測る。断面は皿形を呈し、埋土はいずれの溝も黄褐色シルトの単一層である。遺物はSD2074から須恵器片、SD2075から土師器、須恵器の破片がそれぞれ出土している。SD2075から出土した須恵器2点(40・41)を図化した。40は須恵器杯蓋である。TK23型式(5世紀後半)に比定される。41は体部の立ち上がり角度からみて壺ないしは鉢と推定される。復元高台径9.2cm、高台高0.5cmを測る。俠雜遺物である40を除けば、SD



第30図 S D 2075出土  
遺物実測図

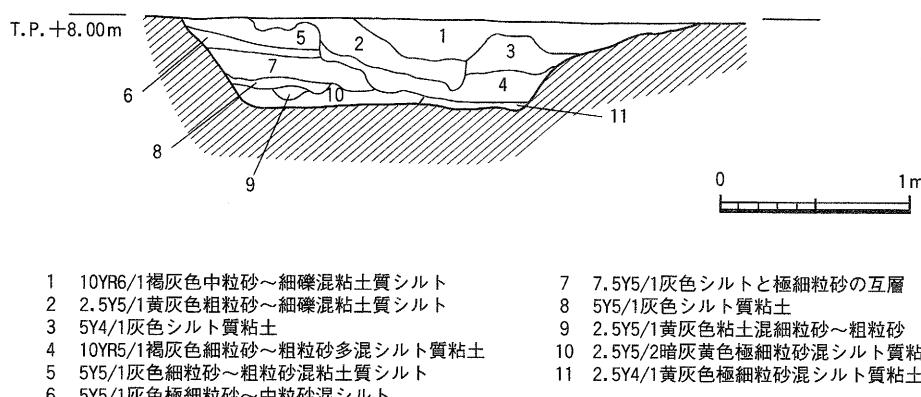
2075の帰属時期は奈良時代中葉が推定される。

#### S D 2076～S D 2083

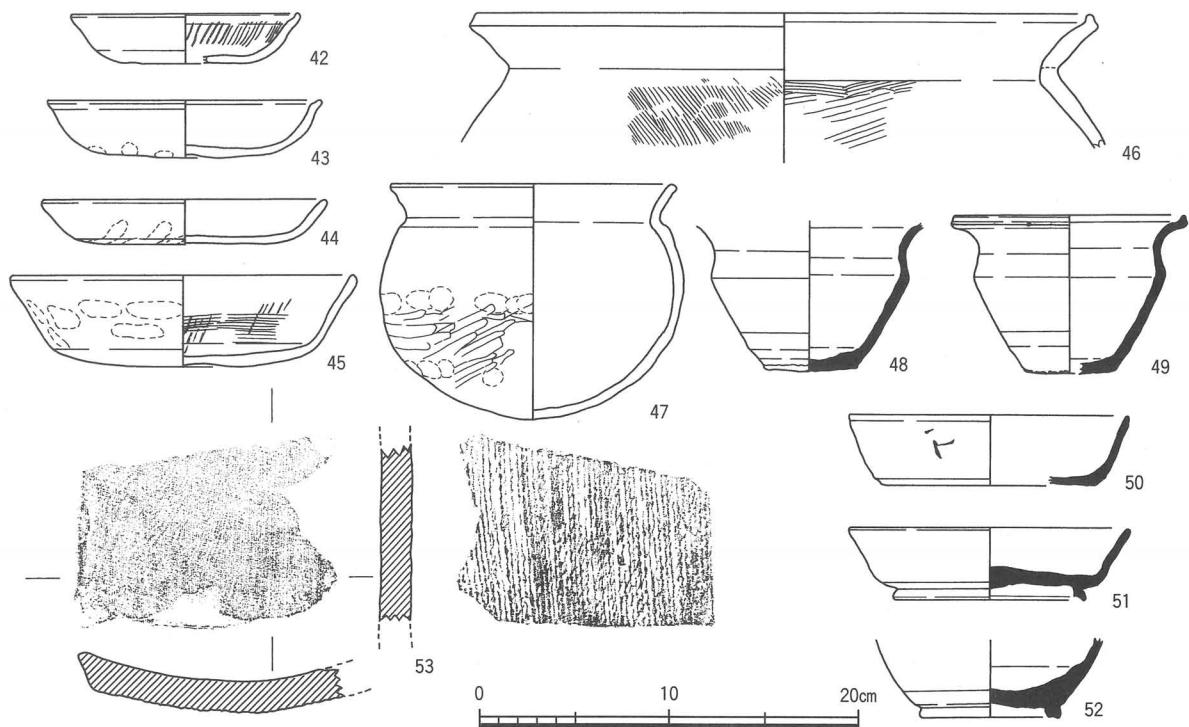
2 調査区東部のⅦ-20-7・8 F～H地区で検出した溝群である。全長ならびに検出長1.0～7.9m、幅0.14～2.03m、深さ0.03～0.09mを測る。断面はS D 2077・S D 2082が楕円形で、他は皿形を呈する。埋土はS D 2078が明褐色シルト、S D 2079が暗褐色砂礫混シルト、S D 2082が暗褐色シルト、他は褐灰色シルトの単一層である。遺物はS D 2079から土師器片が出土しているが小片のため時期は明確でない。

#### S D 2084（第31図、図版一三・五九）

3 調査区北西部で検出した。北西～南東に伸びるもので、検出長44m、幅3.0m、深さ0.5mを測る。断面形状はほぼ逆台形を呈するが、底部の一部は溝状に窪む部分がある。埋土は11層に分層が可能で、上層が褐灰色系の砂混粘土質シルト、中層が灰色系のシルト～中粒砂、下層が黄灰色系のシルト質粘土で、全体に鉄分を、また上層にはマンガン斑を多く含んでいる。遺物は土師器、須恵器の土器類の他、屋瓦が少量出土している。12点（42～53）を図化した。42～45は土師器杯である。42は体部内面に斜放射状暗文を施す。43は口径14.4cm、器高3.0cm、44は口径14.8cm、器高2.3cmを測る。口縁端部が小さく外折して内傾する面を持つ43と丸く終わる44がある。44は灯明皿として使用されたもので、口縁部内面に灯芯油痕が3本認められる。45は大形の杯で口径18.0cm、器高4.8cmを測る。内面体部に斜放射状暗文が一部残存するが大半は器面剥離のため不明である。46は土師器甕である。復元口径32.6cmを測る。体部外面には左上がりのハケ調整が行われている。47は球形に近い体底部に強く外反する口縁部が付く土師器甕である。口径14.9cm、体部最大径16.0cm、器高12.4cmを測る。0.5～1mm程度の長石・石英粒を多量に含む胎土が使用されている。48・49は肩部に稜角を成す小形の須恵器広口壺である。平城京分類の壺Hの最終段階の形態と推定される。2点は別固体であるが、形態、法量、調整ともに共通しており、同一工人の手による可能性が高い。50・51は須恵器杯身である。51は高台を有するもので、高台端面は内傾している。50は体部外面に「ト」の墨書が記されている。52は須恵器壺の底部と推定される。高台部は完存しており、高台径7.4cm、高台高0.6cmを測る。53は平瓦片である。凹面には細かい布目、凸面には縦位の縄目タタキが施されている。出土遺物のうち53を除くものについては、奈良時代後半に比定される。



第31図 S D 2084西壁断面図



第32図 SD 2084出土遺物実測図

#### SD 2085～SD 2168（第33図、図版八）

3調査区西部のⅦ-20-7・8H～J地区で検出した。第1面の島畑1003の下位で検出した溝群である。一定方向に並行するものが数条あるものの、それ以外に規則性は認められず切り合い関係は明確でない。幅0.15～0.4m程度の規模の溝が大半を占める。断面は逆台形・皿状を呈し、深さは0.01～0.27mを測る。検出面は第Ⅲ層上面であるが、遺構構築面は、第Ⅲ層上部にこの付近にのみ堆積する層厚約0.1mを測る7.5Y5/1灰色粘質シルト混じり粗粒砂～細礫層上面（T.P.+8.0m）である。溝埋土は主に5Y5/1灰色粗粒砂～細礫混じりシルト質粘土で、ベース層と第Ⅲ層が攪拌された層と捉えられる。性格としては耕作に伴う溝群であろう。溝内からは奈良時代の土師器、須恵器、瓦片が少量出土しているが溝群として遺物を取り上げたため、個々の出土位置は不明である。なお、北部が奈良時代後期の遺物が出土したSD 2084に削平されているが、出土遺物からみてあまり時期差はないものと考えられる。また、西側・東側は水田1003・水田1004に削平されている。各溝の法量および詳細は第19表に示した。

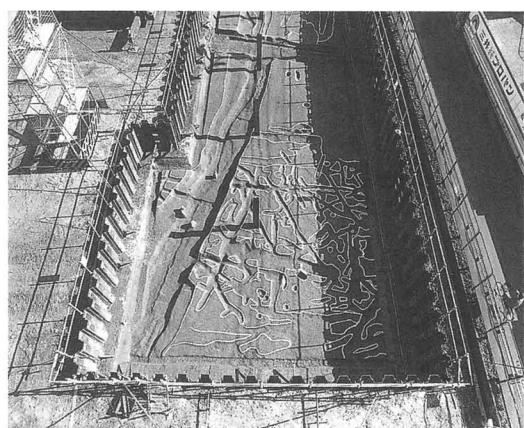
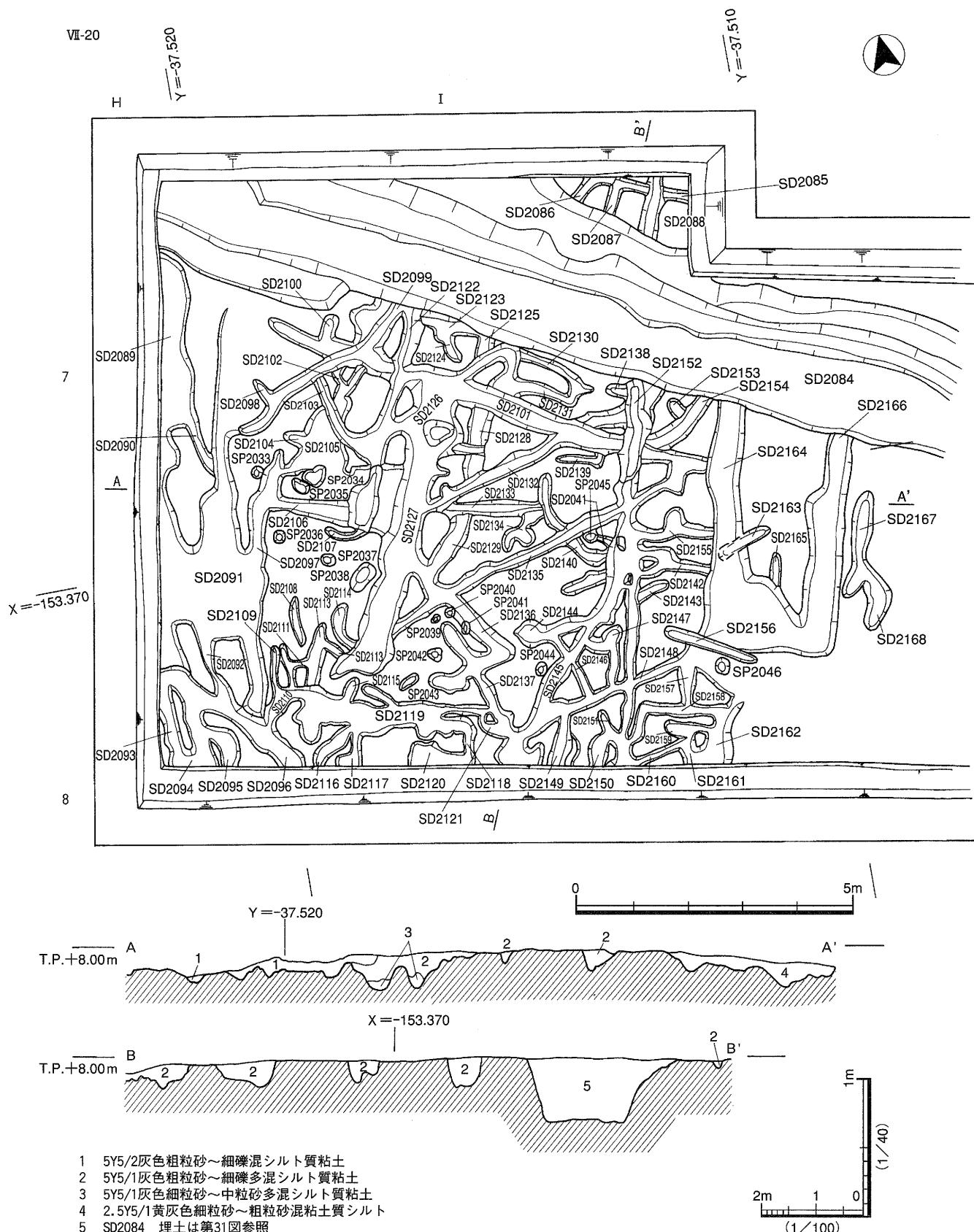


写真28 3調査区西部溝群検出状況(西から)



第33図 3調査区西部 第2面検出遺構平面図

第19表 3調査区 S D 2085～S D 2168法量表(単位m)

遺構番号	地区	全長 (検出長)	幅 (最大)	深さ	埋 土	出土遺物
S D 2085	VII-20-7I	1.70	0.20	0.05	5Y5/1灰色粗粒砂～細礫多混シルト質粘土	
S D 2086	〃	0.50	0.20	0.09	〃	
S D 2087	〃	0.50	0.20	0.09	〃	
S D 2088	〃	1.10	0.35	0.12	〃	
S D 2089	VII-20-7·8H	7.40	0.60	0.06	5Y5/1灰色粗粒砂～細礫混シルト質粘土	
S D 2090	VII-20-7H	1.00	0.20	0.07	〃	
S D 2091	VII-20-7·8H·I	6.00	1.00	0.12	〃	
S D 2092	VII-20-8H	1.25	0.30	0.04	〃	
S D 2093	〃	1.80	0.30	0.05	2.5Y6/1黃灰色細粒砂～極粗粒砂混シルト質粘土	
S D 2094	〃	1.90	0.35	0.04	〃	
S D 2095	〃	0.70	0.35	0.07	〃	
S D 2096	VII-20-8H·I	2.20	0.50	0.09	〃	
S D 2097	VII-20-7·8H·I	4.90	0.40	0.06	5Y5/1灰色粗粒砂～細礫混シルト質粘土	
S D 2098	VII-20-7I	0.40	0.20	0.06	5Y5/1灰色粗粒砂～細礫多混シルト質粘土	
S D 2099	〃	3.70	0.30	0.12	〃	
S D 2100	〃	0.40	0.25	0.08	〃	
S D 2101	〃	8.35	0.45	0.27	〃	
S D 2102	〃	0.30	0.25	0.04	5Y5/1灰色粗粒砂～細礫混シルト質粘土	
S D 2103	〃	1.65	0.30	0.09	5Y5/1灰色粗粒砂～細礫多混シルト質粘土	
S D 2104	〃	0.35	0.30	0.09	5Y5/1灰色粗粒砂～細礫混シルト質粘土	
S D 2105	〃	0.20	0.20	0.04	〃	
S D 2106	〃	0.35	0.45	0.05	〃	
S D 2107	〃	0.70	0.15	0.05	5Y5/1灰色粗粒砂～細礫多混シルト質粘土	
S D 2108	VII-20-8I	0.90	0.20	0.03	2.5Y6/1黃灰色細粒砂～極粗粒砂混シルト質粘土	
S D 2109	VII-20-8HI	0.85	0.15	0.02	〃	
S D 2110	〃	1.50	0.35	0.02	〃	
S D 2111	VII-20-8I	2.20	0.40	0.03	〃	
S D 2112	〃	0.25	0.15	0.02	〃	
S D 2113	〃	0.30	0.20	0.04	〃	
S D 2114	〃	0.90	0.30	0.02	〃	
S D 2115	〃	0.45	0.25	0.03	〃	
S D 2116	〃	0.90	0.30	0.03	〃	
S D 2117	〃	0.60	0.50	0.03	〃	
S D 2118	〃	2.70	0.30	0.07	〃	
S D 2119	〃	3.50	0.55	0.08	〃	
S D 2120	〃	1.10	0.40	0.03	〃	
S D 2121	〃	0.60	0.30	0.04	〃	
S D 2122	VII-20-7I	4.10	0.60	0.22	5Y5/1灰色粗粒砂～細礫混シルト質粘土	
S D 2123	〃	1.00	0.30	0.06	5Y5/1灰色粗粒砂～細礫多混シルト質粘土	
S D 2124	〃	0.60	0.40	0.04	〃	
S D 2125	〃	0.30	0.30	0.05	〃	
S D 2126	〃	3.40	0.35	0.12	〃	
S D 2127	VII-20-7·8I	5.25	0.70	0.11	〃	
S D 2128	VII-20-7I	2.50	0.40	0.05	〃	
S D 2129	VII-20-7·8I	1.10	0.40	0.08	〃	
S D 2130	VII-20-7I	1.50	0.15	0.04	〃	

遺構番号	地区	全長 (検出長)	幅 (最大)	深さ	埋土	出土遺物
S D 2131	VII-20-7I	1.20	0.25	0.06	"	
S D 2132	"	4.70	0.35	0.11	"	
S D 2133	VII-20-7·8I	1.70	0.35	0.07	"	
S D 2134	VII-20-8I	0.70	0.30	0.02	"	
S D 2135	VII-20-7·8I	6.00	0.30	0.09	"	
S D 2136	VII-20-8I	3.80	0.40	0.07	"	
S D 2137	"	3.00	0.90	0.04	"	
S D 2138	VII-20-7I	0.40	0.25	0.04	"	
S D 2139	"	1.85	0.20	0.05	"	
S D 2140	VII-20-7·8I	3.25	0.25	0.04	"	
S D 2141	VII-20-8I	0.25	0.15	0.01	"	
S D 2142	"	2.75	0.35	0.06	"	
S D 2143	"	0.65	0.25	0.06	"	
S D 2144	"	1.30	0.55	0.09	"	
S D 2145	"	2.60	0.40	0.06	"	
S D 2146	"	1.15	0.25	0.05	"	
S D 2147	"	1.00	0.30	0.06	"	
S D 2148	"	3.10	0.30	0.07	"	
S D 2149	"	0.90	0.30	0.09	2.5Y6/1黄灰色細粒砂～極粗粒砂混シルト質粘土	
S D 2150	"	0.60	0.40	0.10	"	
S D 2151	"	0.65	0.25	0.02	"	
S D 2152	VII-20-7·8I	7.05	0.50	0.11	5Y5/1灰色粗粒砂～細礫多混シルト質粘土	
S D 2153	VII-20-7I	0.40	0.25	0.05	"	
S D 2154	"	1.25	0.35	0.11	"	
S D 2155	VII-20-8I	1.30	0.55	0.05	"	
S D 2156	"	1.80	0.25	0.14	"	
S D 2157	"	0.60	0.40	0.08	"	
S D 2158	"	2.05	0.20	0.10	"	
S D 2159	"	0.85	0.30	0.07	"	
S D 2160	"	1.10	0.20	0.03	"	
S D 2161	"	0.55	0.30	0.05	"	
S D 2162	"	1.30	0.35	0.05	"	
S D 2163	"	1.10	0.25	0.10	"	
S D 2164	VII-20-7·8I	5.20	0.75	0.10	2.5Y5/1黄灰色細粒砂～粗粒砂混粘土質シルト	
S D 2165	VII-20-8I	0.60	0.20	0.02	"	
S D 2166	VII-20-7·8I·J	4.90	1.40	0.17	"	
S D 2167	VII-20-8J	2.00	0.40	0.16	"	
S D 2168	"	1.10	0.50	0.19	"	

#### S D 2169～S D 2174

3調査区東部のVII-20-8J、VIII-16-8A・B地区で検出した。東～西に伸びるもので、幅0.3～0.9m、深さ約0.1mを測り、断面は皿形を呈する。埋土は灰色～黄灰色細粒砂～粗粒砂混粘土質シルトで、斑鉄を多く含んでいる。遺物は奈良時代頃の土器類が主であるが、S D 2170から瓦器碗片が1点出土していることから中世頃の遺構と考えられる。各溝の法量および詳細は第20表に示した。

第20表 3調査区 S D 2169～S D 2174法量表(単位m)

遺構番号	地区	全長 (検出長)	幅 (最大)	深さ	埋 土	出土遺物
S D 2169	VII-20-8J	1.05	0.35	0.15	7.5Y5/1灰色細粒砂～粗粒砂混シルト	
S D 2170	VIII-16-8A・B	11.00	0.90	0.11	2.5Y5/1黃灰色中粒砂～粗粒砂混粘土質シルト	土師器、須恵器、瓦器
S D 2171	〃	13.70	1.35	0.13	〃	土師器、須恵器
S D 2172	VIII-16-8A	6.15	0.75	0.07	5Y5/1灰色細粒砂～中粒砂混粘土質シルト	
S D 2173	〃	2.20	0.30	0.04	〃	
S D 2174	VII-20-8J VIII-16-8A	9.20	0.60	0.09	7.5Y5/1灰色細粒砂混シルト質粘土	土師器、須恵器

### S D 2175～S D 2187

3調査区のVIII-16-8B・C地区で検出した。北東～南西にほぼ平行する溝と、これに直交する溝がある。S D 2175のみやや方向が異なり、またS D 2180は屈曲している。幅0.25～0.9m、深さ0.03～0.28mを測る。埋土は2.5Y5/1黃灰色細粒砂～中粒砂混じりシルト質粘土で、鉄分を多く、マンガンを少量含んでおり、S D 2187のみ褐灰色系の色調で炭を多く含んでいる。遺物は奈良時代頃の土器類が出土している。各溝の法量および詳細は第21表に示した。

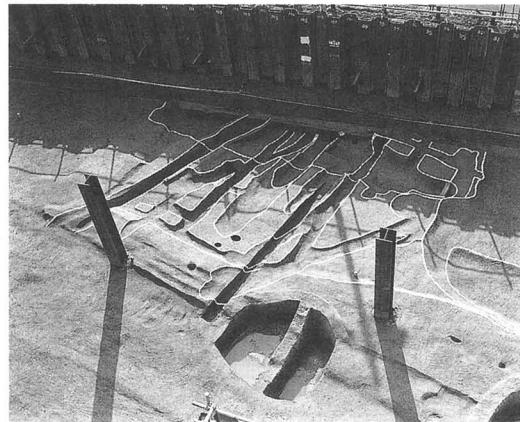


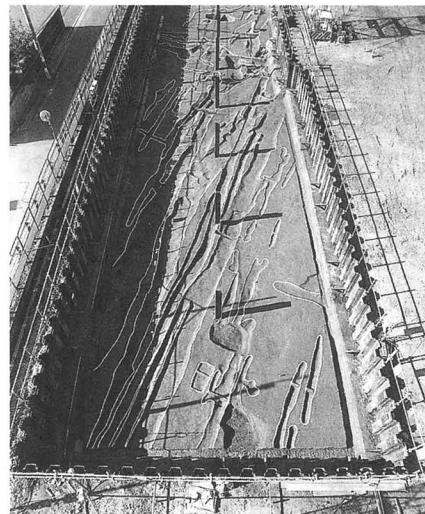
写真29 3調査区 S D 2175～S D 2187検出状況  
(北から)

第21表 S D 2175～S D 2187法量表(単位m)

遺構番号	地区	全長 (検出長)	幅 (最大)	深さ	埋 土	出土遺物
S D 2175	VIII-16-8B	5.60	0.90	0.08	2.5Y5/1黃灰色細粒砂～中粒砂混シルト質粘土	土師器
S D 2176	〃	1.80	0.45	0.05	〃	
S D 2177	〃	2.60	0.32	0.09	7.5Y5/1灰色細粒砂 混粘土質シルト	
S D 2178	〃	0.90	0.35	0.08	〃	
S D 2179	〃	4.60	0.40	0.23	2.5Y5/1黃灰色細粒砂～中粒砂混シルト質粘土	土師器、須恵器
S D 2180	VIII-16-8B・C	5.35	0.40	0.12	〃	
S D 2181	VIII-16-8B	1.85	0.30	0.13	〃	
S D 2182	〃	4.60	0.85	0.16	〃	土師器、須恵器
S D 2183	〃	0.35	0.25	0.03	〃	
S D 2184	〃	4.80	0.40	0.10	〃	
S D 2185	〃	0.50	0.30	0.13	〃	
S D 2186	VIII-16-8B・C	3.80	0.60	0.15	〃	土師器、須恵器
S D 2187	VIII-16-8B・C	6.15	0.75	0.28	2.5Y4/1黃灰色極細粒砂～細粒砂混粘土質シルト	土師器、須恵器、平瓦

### S D 2188～S D 2197

3調査区中央部で検出したもので、Ⅷ-16-8・9D地区では不規則に蛇行する溝がみられる。東部では北西-南東に平行する溝が多くを占める。規模は、幅0.35～3.2m、深さ0.07～0.28mを測る。埋土は灰色系のシルト～シルト質粘土である。遺物は出土していない。各溝の法量および詳細は第22表に示した。



第22表 3調査区 S D 2188～S D 2197法量表(単位m)

写真30 3調査区東部溝群検出状況(東から)

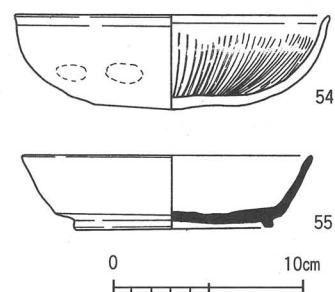
遺構番号	地 区	全長 (検出長)	幅 (最大)	深さ	埋 土	出土遺物
S D 2188	Ⅷ-16-8C	3.90	3.20	0.14	N6/0灰色シルト～シルト質粘土	
S D 2189	〃	5.90	0.70	0.07	〃	
S D 2190	Ⅷ-16-8C·D	13.50	1.15	0.28	〃	
S D 2191	Ⅷ-16-8·9C·D	1.90	0.70	0.08	2.5Y5/1黄灰色細粒砂～極粗粒砂混シルト質粘土	
S D 2192	Ⅷ-16-8D	3.00	0.60	0.12	〃	
S D 2193	〃	0.40	0.35	0.11	〃	
S D 2194	Ⅷ-16-8·9D	10.20	0.60	0.19	〃	
S D 2195	〃	3.20	1.50	0.22	〃	
S D 2196	〃	6.30	1.30	0.15	〃	
S D 2197	Ⅷ-16-8D·E	6.10	0.70	0.11	N6/0灰色シルト～シルト質粘土	

### S D 2198～S D 2221

3調査区東部から4調査区西部で検出した。第1面で検出した水田1006の下位面で捉えた溝群と重複するものである。南東-北西に直線的に伸びるもので、下位のN R 3001・N R 3002の方向に規制されているのであろう。規模は、検出長0.4～32.9m、幅0.3～2.0m、深さ0.06～0.33mを測る。埋土は細粒砂～小礫が混じるシルトが主体となっている。遺物は古墳時代中期～平安時代後期に比定される土師器、須恵器、韓式系土器、製塩土器、屋瓦が少量出土している。S D 2206・S D 2207から出土した遺物を図化した。

#### S D 2206遺物（第34図、図版八・六〇）

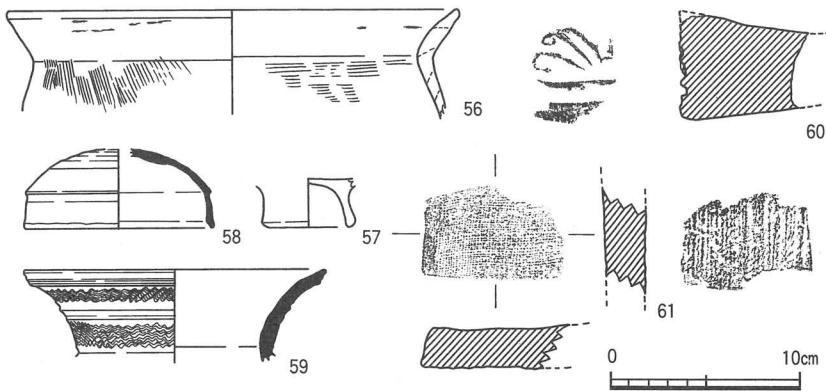
飛鳥時代後半を中心とする土師器、須恵器が極少量出土している。2点（54・55）を図化した。54は土師器杯Cに分類される。口径16.4cm、器高5.0cmを測る。体部内面に斜放射状暗文が施文されている。焼成は良好で、色調は橙色である。55は須恵器杯身である。口径15.3cm、器高3.9cm、高台径10.5cm、高台高0.5cmを測る。焼成は不良で灰白色の色調を呈する。2点共に飛鳥時代後半（7世紀後半）に比定されるものである。



第34図 S D 2206出土遺物実測図

### S D 2207遺物（第35図、図版八・六〇）

古墳時代中期～平安時代後期の土師器、須恵器、製塙土器、屋瓦が少量出土している。6点（56～61）を図化した。56は土師器甕である。復元口径23.6cmを測る。57は高台高の高い台付きの土師器小皿と推定される。高台部は完存しており、高台径5.5cm、高台高2.2cmを測る。11世紀後半の所産である。58は須恵器杯蓋である。TK47型式（5世紀末）に比定される。59は須恵器壺の口縁部である。復元口径15.4cm、口頸部高14.4cmを測る。凸線間の2段に波状文が施されている。ON46型式か。60は軒平瓦の小片で、模様構成からみて中央部のやや左よりの部分と推定される。顎は直線顎である。上外区を欠損する。下外区はやや低めで段状を呈する他、界線は幅広で隆起が高い。文様は唐草文で残存部では主葉と2本の支葉が認められる。61は平瓦の小片である。凹面は細かい布目、凸面は縦位の縄目タタキが施されている。溝という性格上、時期幅のある遺物が混在して出土しているが、最も新しい遺物である57の土師器台付き皿からみて11世紀後半の遺構と推定される。各溝の法量および詳細は第23表に示した。



第35図 S D 2207出土遺物実測図

第23表 3・4調査区 S D 2198～S D 2221法量表(単位m)

遺構番号	地 区	全長 (検出長)	幅 (最大)	深さ	埋 土	出土遺物
S D 2198	VII-16-9D・E	6.30	0.90	0.09	7.5Y4/1灰色細粒砂～粗粒砂混粘土質シルト	
S D 2199	VII-16-9E	8.60	0.50	0.08	〃	土師器、須恵器
S D 2200	〃	2.40	0.30	0.08	〃	
S D 2201	〃	3.70	0.50	0.06	N6/0灰色シルト～シルト質粘土	土師器、須恵器、屋瓦
S D 2202	VII-16-8・9D～F	18.60	0.80	0.10	7.5Y4/1灰色細粒砂混シルト質粘土	
S D 2203	VII-16-9E	0.60	1.00	0.24	〃	
S D 2204	VII-16-9F	0.40	0.80	0.23	〃	
S D 2205	VII-16-8・9E～G	20.80	1.80	0.16	2.5Y5/1黄灰色細粒砂～細礫混シルト	土師器、須恵器、製塙土器、屋瓦
S D 2206	〃	23.60	2.00	0.12	N6/0灰色シルト～シルト質粘土	土師器、須恵器、屋瓦 第34図
S D 2207	VII-16-8・9D～G	32.90	0.70	0.29	5GY5/1オリーブ灰色中粒砂～細礫混シルト	土師器、須恵器、製塙土器、屋瓦 第35図
S D 2208	VII-16-8E	0.40	0.30	0.09	2.5Y6/1黄灰色粘土質シルト	
S D 2209	VII-16-8・9E～H	26.40	0.50	0.23	〃	
S D 2210	〃	25.20	0.90	0.18	〃	土師器、須恵器、韓式土器、製塙土器、屋瓦
S D 2211	VII-16-8F	0.80	0.60	0.06	〃	
S D 2212	VII-16-8・9E・F	11.00	0.50	0.07	7.5Y5/1灰色細粒砂～中粒砂混粘土質シルト	
S D 2213	VII-16-9F・G	6.40	0.70	0.13	7.5Y5/1灰色中粒砂～粗粒砂混シルト	
S D 2214	VII-16-9G・H	6.50	0.30	0.11	5BG4/1暗青灰色細粒砂～粗粒砂混シルト質粘土	
S D 2215	VII-16-9・10H	4.10	0.30	0.09	〃	土師器、須恵器
S D 2216	VII-16-8F	2.65	0.30	0.06	7.5Y5/1灰色細粒砂～中粒砂混粘土質シルト	

遺構番号	地区	全長 (検出長)	幅 (最大)	深さ	埋 土	出土遺物
S D 2217	VII-16-8-9F·G	11.30	0.50	0.09	7.5Y5/1灰色細粒砂～中粒砂混粘土質シルト	
S D 2218	VII-16-9-10H·I	7.80	0.50	0.33	5BG4/1暗青灰色細粒砂～粗粒砂混シルト 質粘土	土師器
S D 2219	VII-16-8G	2.50	0.60	0.10	2.5Y6/1黄灰色細粒砂～粗粒砂混シルト	
S D 2220	VII-16-9G	6.15	0.65	0.14	7.5Y5/1灰色中粒砂～粗粒砂混シルト	
S D 2221	VII-16-9G·H	2.23	0.70	0.12	5BG4/1暗青灰色細粒砂～粗粒砂混シルト 質粘土	

### S D 2222～S D 2259

3調査区の北東部から4調査区西部で検出した島畠1006の下部で検出した溝群である。S D 2228は北西～南東方向から南にL字形に屈曲する溝で、幅約1.1mを測り、他の溝に比して規模が大きい。この北側には島畠1006に平行するS D 2226～S D 2231が、また東側にはS D 2232～S D 2259がみられる。これらの位置関係からみてS D 2228により区画された内側が、島畠1006に先行する島畠である可能性がある。各溝の法量および詳細は第24表に示した。

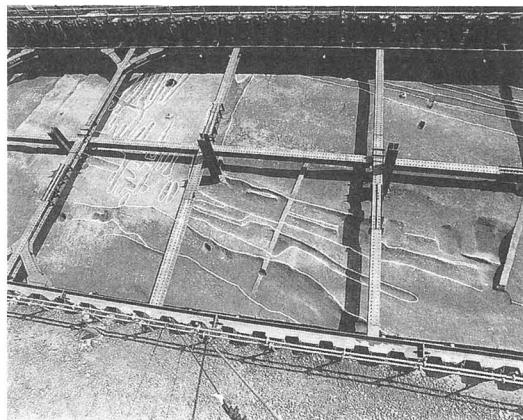


写真31 4調査区西部溝群検出状況(北から)

第24表 3・4調査区 S D 2222～S D 2259法量表(単位m)

遺構番号	地区	全長 (検出長)	幅 (最大)	深さ	埋 土	出土遺物
S D 2222	VII-16-9G	2.30	0.45	0.12	7.5Y5/1灰色中粒砂～粗粒砂混シルト	
S D 2223	VII-16-8-9G	3.80	0.40	0.15	5Y5/2灰オリーブ色細粒砂～細礫混シルト	
S D 2224	〃	0.90	0.30	0.15	〃	
S D 2225	VII-16-8G	4.20	0.40	0.13	5Y5/2灰オリーブ色細粒砂～細礫混シルト	
S D 2226	VII-16-8-9H	3.20	0.30	0.05	2.5Y6/2灰黄色細粒砂～粗粒砂混粘土質シルト	
S D 2227	〃	3.40	0.20	0.07	〃	
S D 2228	VII-16-9-10H·I	16.0	1.70	0.23	2.5Y6/1黄灰色細粒砂～粗粒砂混シルト	土師器、須恵器、瓦器、屋瓦
S D 2229	VII-16-9I	2.15	0.60	0.05	2.5Y6/2灰黄色細粒砂～粗粒砂混粘土質シルト	
S D 2230	〃	8.50	0.85	0.18	7.5Y5/1灰色細粒砂混粘土質シルト	
S D 2231	VII-16-9I·J	11.8	1.50	0.21	〃	土師器、須恵器、瓦器、屋瓦
S D 2232	VII-16-9J	1.40	0.30	0.05	2.5Y6/2灰黄色細粒砂～粗粒砂混粘土質シルト	
S D 2233	〃	3.80	0.30	0.04	〃	土師器、須恵器、瓦器
S D 2234	〃	2.80	0.70	0.03	〃	土師器、瓦器
S D 2235	VII-16-10J	2.00	0.35	0.04	〃	
S D 2236	VII-16-9I	1.00	0.20	0.03	〃	
S D 2237	〃	0.90	0.25	0.03	〃	
S D 2238	〃	1.60	0.35	0.02	〃	
S D 2239	VII-16-9I·J	1.25	0.20	0.02	〃	
S D 2240	VII-16-9J	2.40	0.20	0.04	〃	
S D 2241	〃	0.70	0.20	0.06	〃	
S D 2242	VII-16-9I·J	2.05	0.25	0.04	〃	土師器、須恵器、国産磁器、屋瓦
S D 2243	VII-16-9J	0.50	0.25	0.02	〃	
S D 2244	〃	1.00	0.20	0.04	〃	

遺構番号	地区	全長 (検出長)	幅 (最大)	深さ	埋 土	出土遺物
S D 2245	VII-16-9J	1.20	0.30	0.04	2.5Y6/2灰黄色細粒砂～粗粒砂混粘土質シルト	須恵器
S D 2246	〃	3.90	0.25	0.05	〃	
S D 2247	〃	0.40	0.15	0.02	〃	瓦器
S D 2248	〃	1.10	0.20	0.06	〃	
S D 2249	〃	1.00	0.20	0.03	〃	
S D 2250	〃	0.70	0.30	0.03	〃	
S D 2251	VII-16-9·10J	0.65	0.20	0.04	〃	
S D 2252	VII-16-10J	0.60	0.30	0.03	〃	
S D 2253	VII-16-10I·J	2.15	0.20	0.05	〃	須恵器
S D 2254	〃	2.20	0.25	0.03	〃	
S D 2255	VII-16-9·10J	4.70	0.25	0.04	〃	
S D 2256	VII-16-10J	1.90	0.15	0.05	〃	
S D 2257	〃	2.50	0.40	0.03	〃	
S D 2258	〃	2.20	0.25	0.04	〃	
S D 2259	〃	2.70	0.30	0.04	〃	

#### S D 2260～S D 2284

4調査区中央部から東部で検出した。水田1009の下位面で検出した溝群に重複するもので、方向も上位の溝群と同じで北西－南東に伸びる。輪郭の明瞭な溝は少なく、合流して落ち込み状を成す部分も見られ、水田1009作土下面に残った起伏と捉えられる。各溝の法量および詳細は第25表に示した。

第25表 4調査区 S D 2260～S D 2284法量表(単位m)

遺構番号	地区	全長 (検出長)	幅 (最大)	深さ	埋 土	出土遺物
S D 2260	VII-17-10A·B	4.35	0.40	0.10	10YR6/1褐灰色中粒砂～粗粒砂混粘土質シルト	
S D 2261	VII-17-10B	2.10	0.50	0.07	〃	
S D 2262	VII-17-10A～C	10.10	0.90	0.09	〃	土師器、須恵器、瓦器、国産陶磁器
S D 2263	VII-17-9·10A·B	13.30	0.80	0.11	〃	
S D 2264	VII-17-9·10A	1.50	0.80	0.10	〃	
S D 2265	〃	5.90	1.30	0.12	〃	
S D 2266	VII-17-10B	4.20	0.40	0.05	〃	
S D 2267	VII-17-10B·C	19.0	2.30	0.12	〃	土師器、須恵器
S D 2268	VII-17-10C	7.30	0.80	0.05	〃	
S D 2269	VII-17-9·10A·B	3.7	0.20	0.08	〃	
S D 2270	VII-17-10C	4.50	0.40	0.03	〃	
S D 2271	VII-17-9·10A·B	12.50	1.80	0.13	〃	
S D 2272	〃	7.40	0.80	0.14	〃	
S D 2273	VII-17-10C·D	7.50	0.90	0.12	〃	
S D 2274	VII-17-9·10B	5.80	0.90	0.14	〃	
S D 2275	VII-17-10C	6.40	1.00	0.11	〃	
S D 2276	VII-17-10D	0.80	0.30	0.04	〃	
S D 2277	VII-17-10C·D	3.40	0.45	0.08	〃	
S D 2278	VII-17-10D	6.60	1.50	0.05	〃	土師器、須恵器
S D 2279	VII-17-10C·D	2.20	0.30	0.06	〃	
S D 2280	〃	8.50	0.60	0.08	〃	
S D 2281	VII-17-10D	4.80	0.70	0.06	〃	
S D 2282	VII-17-9·10B·C	6.30	0.50	0.09	〃	
S D 2283	VII-17-10C	15.50	0.65	0.12	〃	
S D 2284	VII-17-10D	3.70	0.40	0.11	〃	

### S D 2285 (第36図、図版六〇)

4調査区北東部で検出した島畠1009の下位で検出したもので、直線的な肩から北に落ち込んでおり、肩ラインは東端でやや南に屈曲している。島畠1009の盛土がほとんど削平されていたため、肩のラインは第1面の段階で確認したが、第1面の遺構群とはやや方向性が異なることから、第2面遺構とした。検出部分で東西幅29.7m、南北幅3.2m、深さ約0.45mを測る。底部では肩と平行する溝2条(S D 2286・S D 2287)が検出された。埋土はおおまかにみて、上層部が2.5Y5/2暗灰黄色中粒砂～粗粒砂混シルト、下層部が5Y5/1灰色細粒砂～シルト混粘土質シルトで、全体に鉄分・マンガンを多く含み、中間に鉄分の影響で固く締まる部分が見られる。作土層は認められなかつたが水田の可能性もあり、この南側が島畠1009に先行する島畠かもしれない。古墳時代中期～中世までの土器類、屋瓦等が多数出土しているが細片化したものが大半を占めた。瓦器碗1点(62)を図化した。高台部分を欠くもので、体部は扁平である。体部内面のヘラミガキは全体に細かく不規則で装飾的でない。胎土中に1～4mm程度の長石、チャート粒が散見される。13世紀後半の所産と推定される。

### S D 2286・S D 2287

4調査区北東部で検出したS D 2285の底部で検出した溝で、方向はS D 2285南辺に平行する。S D 2286は検出長5.0m、幅0.45m、深さ0.12mを測る。S D 2287は検出長5.5m、幅0.3m、深さ0.04mを測る。埋土はS D 2285下層と同様である。

### 小穴・柱穴(S P)

#### S P 2001～S P 2027 (第37図、図版六・六〇)

1調査区全域で小穴を総数27個検出した。これらの小穴は、調査区全域に分散して検出されており、建物を構成するような柱穴や規則性をもつものは確認し得なかった。平面形状は円形、楕円形、不定形がある。規模は径0.15～0.5m、深さ0.03～0.33mを測る。埋土はシルト～粘土質シルトが主体である。

S P 2014から出土した黒色土器碗1点(63)を図化した。63は第37図 S P 2014出土遺物実測図B類に分類される。体部の内外面共に横方向の密なヘラミガキが施されている。11世紀中葉～後期に比定される。各小穴の規模等の詳細については、第26表で示した。

第26表 1調査区 S P 2001～S P 2027法量表(単位m)

遺構番号	地区	平面図	長径	短径	深さ	埋土	出土遺物
S P 2001	Ⅷ-19-3C	円形	0.30	0.32	0.16	10YR3/3暗褐色シルト	
S P 2002	〃	不定形	0.35	0.20	0.09	5Y6/2灰オリーブ色シルト	

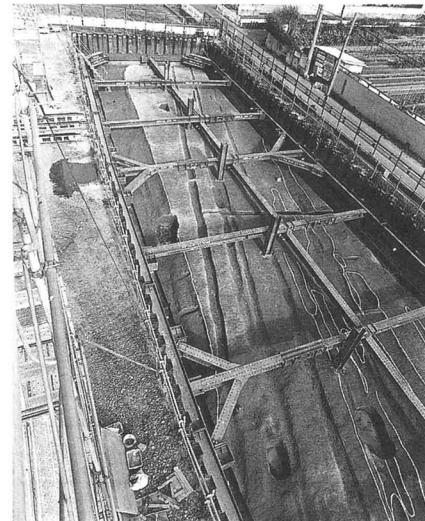
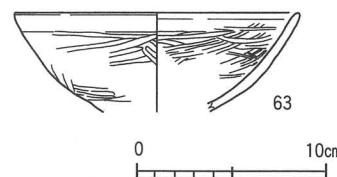


写真32 4調査区東部溝群検出状況(西から)



第36図 S D 2285出土遺物実測図



第37図 S P 2014出土遺物実測図

遺構番号	地区	平面図	長径	短径	深さ	埋土	出土遺物
S P 2003	Ⅶ-19-4C	楕円形	0.35	0.20	0.05	2.5Y6/2灰黄色シルト	
S P 2004	"	円形	0.37	0.40	0.07	"	
S P 2005	Ⅶ-19-4C·D	"	0.26	0.27	0.08	5Y6/3オリーブ黄色シルト	
S P 2006	Ⅶ-19-4D	"	0.18	0.18	0.07	2.5Y6/2灰黄色細粒砂混じりシルト	
S P 2007	"	"	0.27	0.21	0.27	2.5Y5/3暗オリーブ褐色粘土質シルト	
S P 2008	"	"	0.31	0.23	0.06	10YR3/3暗褐色シルト	
S P 2009	"	"	0.20	0.18	0.05	"	
S P 2010	Ⅶ-19-4E	"	0.20	0.18	0.05	"	
S P 2011	"	楕円形	0.40	0.20	0.33	"	
S P 2012	"	円形	0.44	0.50	0.27	灰色系粘土質シルト(3層)	
S P 2013	"	"	0.40	0.38	0.15	10YR3/3暗褐色シルト	
S P 2014	"	"	0.42	0.32	0.06	"	土師器、黒色土器
S P 2015	"	"	0.35	0.30	0.09	"	土師器
S P 2016	"	"	0.22	0.19	0.10	"	
S P 2017	"	"	0.30	0.28	0.09	"	土師器
S P 2018	Ⅶ-19-4·5E	"	0.39	0.42	0.07	7.5YR4/1褐灰色粘土質シルト	
S P 2019	Ⅶ-19-5E	"	0.15	0.22	0.03	10YR3/2黒褐色粘土質シルト	
S P 2020	Ⅶ-19-4F	"	0.30	0.15	0.07	2.5Y3/1黒褐色粘土質シルト	須恵器
S P 2021	"	"	0.25	0.19	0.09	10YR6/2灰黄褐色シルト	
S P 2022	Ⅶ-19-5F·G	"	0.38	0.27	0.04	10YR5/3にぶい黄橙色シルト	
S P 2023	Ⅶ-19-4G	"	0.35	0.29	0.06	"	
S P 2024	Ⅶ-19-4·5G	"	0.28	0.30	0.05	2.5Y6/2灰黄色シルト	
S P 2025	Ⅶ-19-5G	"	0.27	0.26	0.04	"	
S P 2026	Ⅶ-19-5H	"	0.29	0.30	0.22	2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘土質シルト	
S P 2027	Ⅶ-19-4H	楕円形	0.40	0.35	0.10	10YR6/2灰黄褐色シルト	土師器、須恵器

### S P 2028～S P 2032

2調査区全域で5個検出した。東部で散発的に検出されており、規則性は認められない。平面形状は全て円形を呈するもので径0.21～0.5m、深さ0.07～0.19mを測る。埋土はすべて単一層で、柱痕などの痕跡は認められない。なお、各小穴の法量等の詳細は第27表に示した。

第27表 2調査区 S P 2028～S P 2032法量表(単位m)

遺構番号	地区	平面図	長径	短径	深さ	埋土	出土遺物
S P 2028	Ⅶ-20-7F	円形	0.24	0.21	0.16	褐灰色シルト	土師器
S P 2029	"	"	0.44	0.50	0.19	"	
S P 2030	Ⅶ-20-7H	"	0.41	0.39	0.08	暗褐色砂礫混じりシルト	
S P 2031	"	楕円形	0.50	0.33	0.08	明褐色シルト	
S P 2032	"	円形	0.34	0.38	0.07	"	

### S P 2033～S P 2048

3調査区西部の溝群内で検出した。平面形は円形・楕円形・不定形があり、径0.15～0.6m、深さ0.01～0.24mを測る。埋土は灰色系の細粒砂～粗粒砂混粘土質シルトである。S P 2034から時期不明の土師器片が出土している。なお、各小穴の法量等の詳細は第28表に示した。

第28表 3調査区 S P 2033～S P 2048法量表(単位m)

遺構番号	地区	平面図	長径	短径	深さ	埋土	出土遺物
S P 2033	Ⅶ-20-7I	円形	0.25	0.23	0.10	5Y4/1灰色細粒砂混粘土質シルト	
S P 2034	"	不定形	0.40	0.45	0.13	"	土師器
S P 2035	"	楕円形	0.35	0.30	0.10	"	

遺構番号	地 区	平面図	長径	短径	深さ	埋 土	出土遺物
S P 2036	Ⅷ-20-7I	円形	0.25	0.24	0.09	5Y4/1灰色細粒砂混粘土質シルト	
S P 2037	Ⅷ-20-8I	楕円形	0.30	0.25	0.08	"	
S P 2038	"	不定形	0.60	0.35	0.24	"	
S P 2039	Ⅷ-20-8I	楕円形	0.20	0.15	0.06	7.5Y5/1灰色細粒砂～粗粒砂混粘土質シルト	
S P 2040	"	円形	0.20	0.19	0.03	"	
S P 2041	"	楕円形	0.25	0.20	0.09	"	
S P 2042	"	不定形	0.25	0.25	0.02	"	
S P 2043	"	"	0.45	0.20	0.03	"	
S P 2044	"	楕円形	0.30	0.25	0.05	"	
S P 2045	"	不定形	0.20	0.30	0.07	"	
S P 2046	"	円形	0.30	0.30	0.04	"	
S P 2047	Ⅷ-20-8J	楕円形	0.50	0.35	0.01	7.5Y4/1灰色極細粒砂～細粒砂混粘土質シルト	
S P 2048	"	"	0.60	0.35	0.17	"	

### S P 2049～S P 2051

3調査区中央部のⅧ-16-8B地区で検出した溝群内に位置する。平面形はほぼ円形を呈し、直径0.12～0.2m、深さ0.11～0.12mを測る。埋土は2.5Y5/1黄灰色細粒砂～中粒砂混シルト質粘土で、鉄分が多く、マンガンを少量含んでいる。遺物は出土していない。なお、各小穴の法量等の詳細は第29表に示した。

第29表 3調査区 S P 2049～S P 2051法量表(単位m)

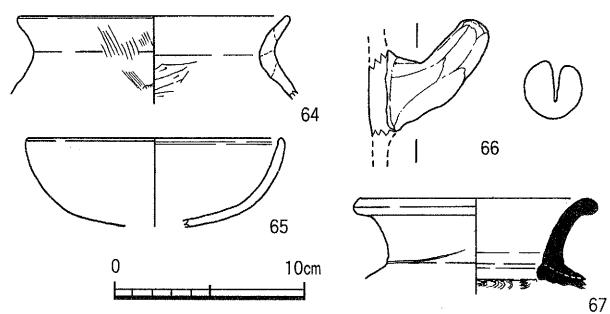
遺構番号	地 区	平面図	長径	短径	深さ	埋 土	出土遺物
S P 2049	Ⅷ-16-8B	円形	0.20	0.20	0.12	2.5Y5/1黄灰色細粒砂～中粒砂混シルト質粘土	
S P 2050	"	"	0.20	0.18	0.11	"	
S P 2051	"	楕円形	0.12	0.20	0.12	"	

### 自然河川 (N R)

#### N R 2001 (第38図、図版一三・六〇)

2調査区東部のⅧ-20-7E～G地区で検出した。北東～南西に伸びる自然河川である。規模は検出長15.6m、幅3.0～4.5m、深さ0.38mを測る。断面の形状は、東肩の角度がやや急であるのに比して西肩は緩やかである。河川底部は部分的に深くなるが、ほぼ水平である。埋土は中層の灰白色粗粒砂層を含め、シルト～砂質シルトを主体とする5層に分層される。遺物は古墳時代中期～奈良時代の土師器、須恵器が少量出土している。

4点(64～67)を図化した。64は復元口径14.0cmを測るやや小振りの土師器甕の小片である。65は丸味のある体底部を有する土師器碗である。復元口径13.6cmを測る。66は土師器甕の把手と推定される。把手の上面から深く切り込まれた切り込みがある。5世紀代の所産と考えられる。67は須恵器の横瓶の口縁部と推定される。復元口径12.3cmを測る。7世紀中葉の所産と考えられる。



第38図 N R 2001出土遺物実測図

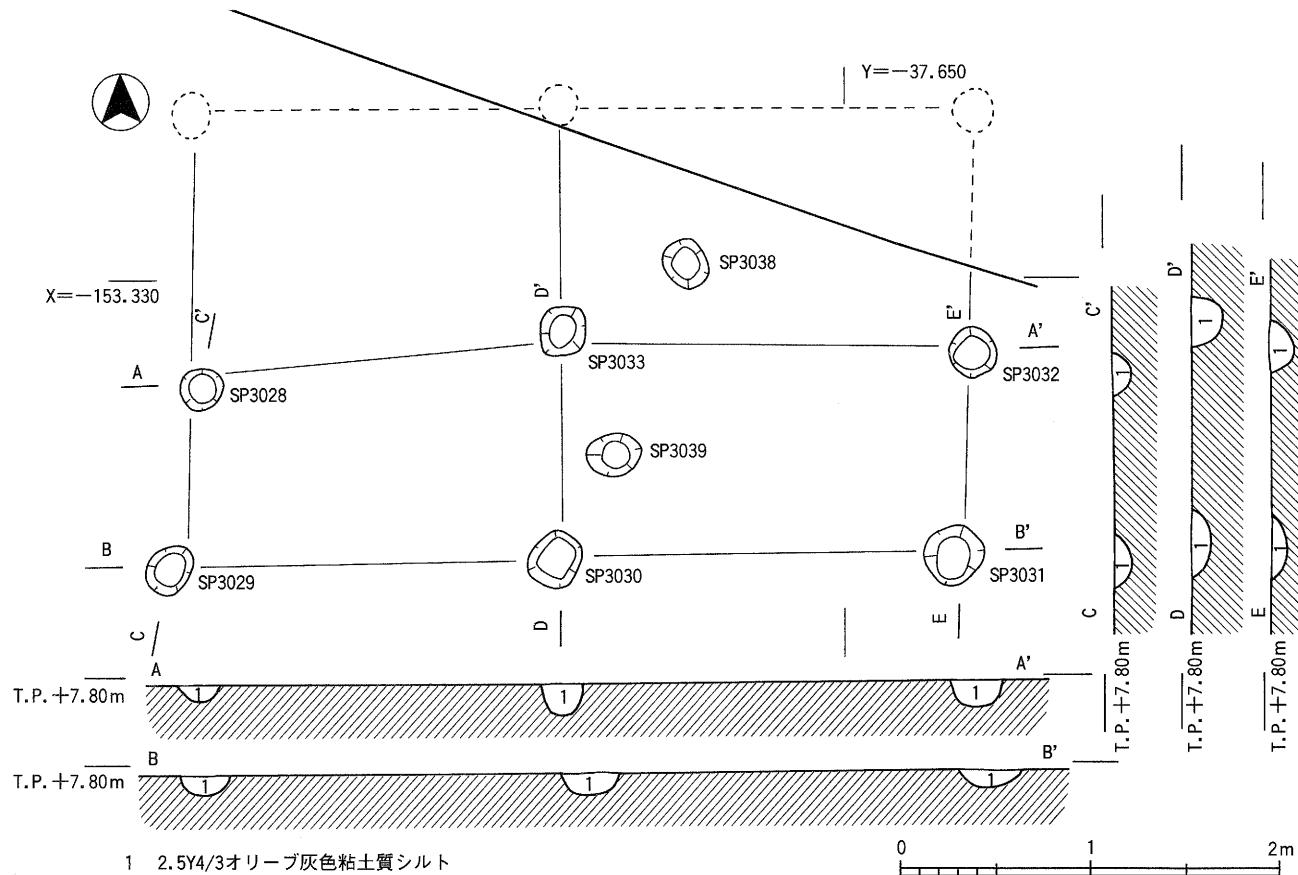
### 第3面（第40図、図版一四・一五）

1調査区、3調査区東部、4調査区で検出した。第2面下約0.2m (T.P. +7.7~8.0m) に存在する第IV層上面から層中で検出した。1調査区の西部および4調査区東部で奈良時代の居住域に関連した遺構が検出された他、1調査区西部で生産域を構成する多条の小溝、3調査区西部から4調査区中央部にかけては北西-南東に伸びる溝および自然河川が検出されている。検出した遺構には、古墳時代中期～平安時代に比定される掘立柱建物1棟（S B 3001）、井戸3基（S E 3001～S E 3003）、土坑20基（S K 3001～S K 3020）、溝64条（S D 3001～S D 3064）、小穴48個（S P 3001～S P 3048）がある。

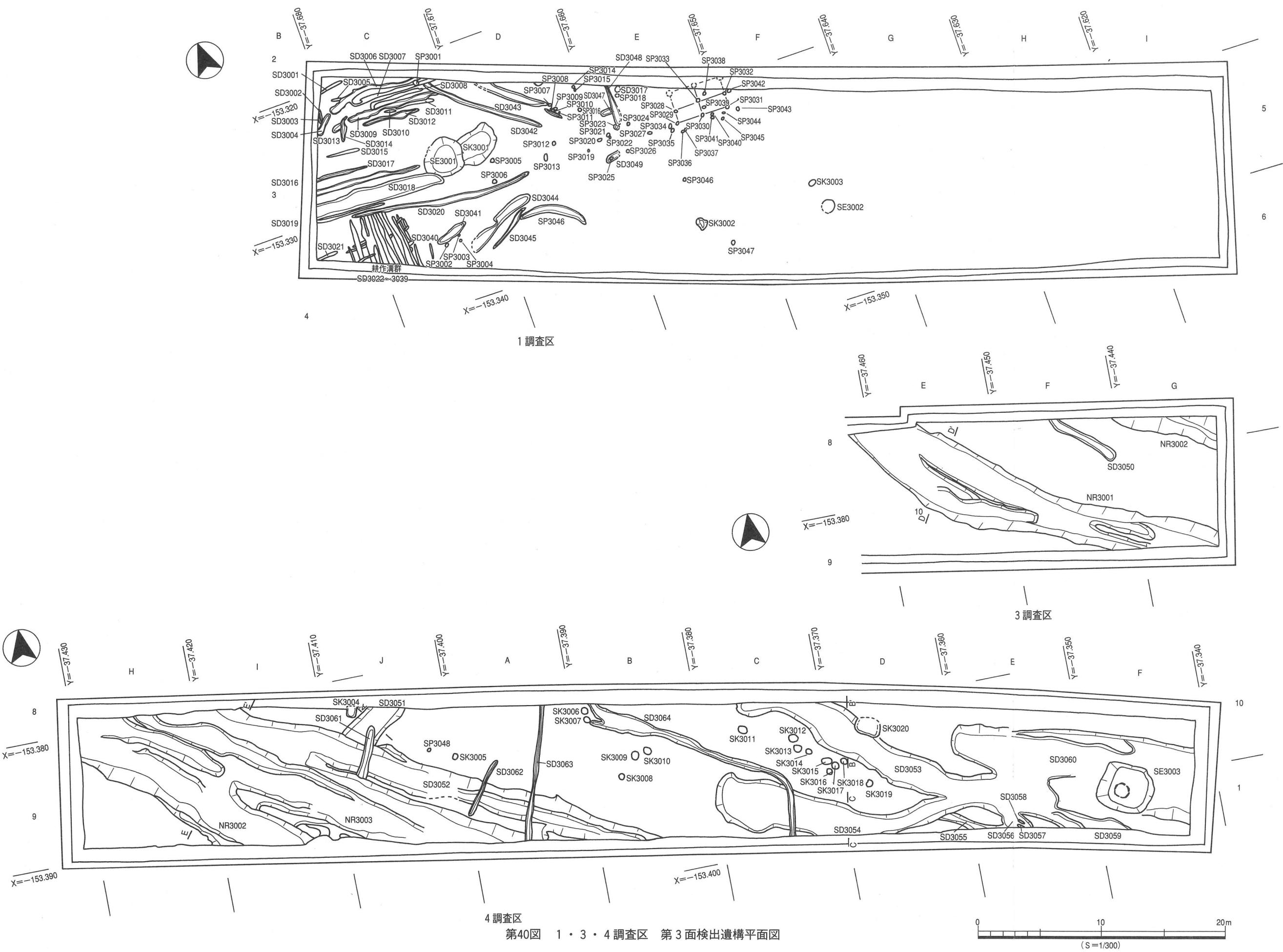
#### 掘立柱建物（S B）

##### S B 3001（第40図、図版一六）

1調査区のVII-19-3・4E・F地区で検出した。北部は調査区外に至るため、全容は不明である。検出された柱穴はS P 3028～S P 3033の6個である。これら柱穴から復元される掘立柱建物は、主軸方向を東西に持つ桁行2間×梁行2間（推定）の建物が想定される。建物を構成する柱穴の形状はほぼ円形で、規模は径0.3m前後、深さ0.1～0.15mを測る。柱間は、桁行が2.1m、梁行が1.05～1.2mを測る。時期的には、掘立柱建物の上面にあたる第2面で検出したS D 2024が11世紀前半であるためそれ以前が想定される他、遺構の配置関係では水田1001の構築に際して上面が削平を受けたため第2面の遺構として捉えたS E 2003（8世紀中葉）との関係が推定される。



第39図 S B 3001平面面図



第40図 1・3・4調査区 第3面検出遺構平面図

## 井戸 (S E)

S E 3001

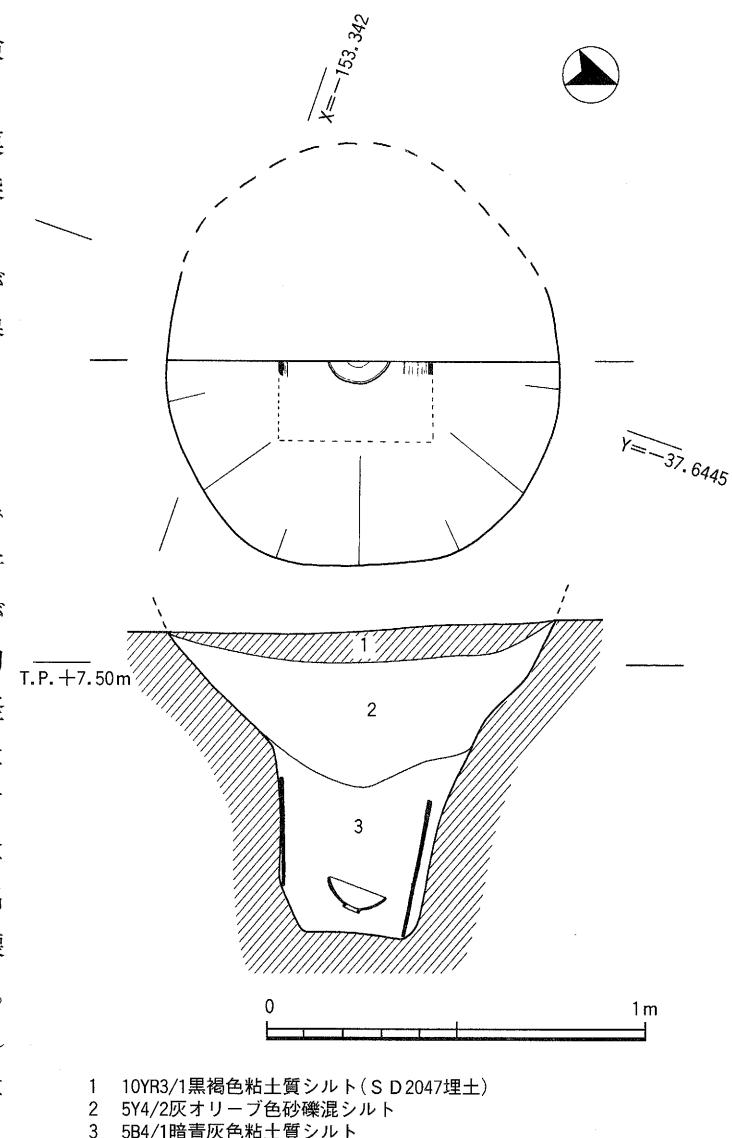
1 調査区西部のⅦ-19-3 C 地区で検出した。不整の隅丸方形を呈する素掘り井戸である。断面は逆台形を呈する。規模は、東西・南北幅ともに3.1m前後、深さは0.73mで湧水層に達する。埋土は、逆台形を呈する断面形状に沿って8層が堆積している。遺物は、1層から土師器および屋瓦の破片が極少量出土したが、いずれも小片のため時期は明確でない。

S E 3002 (第41図)

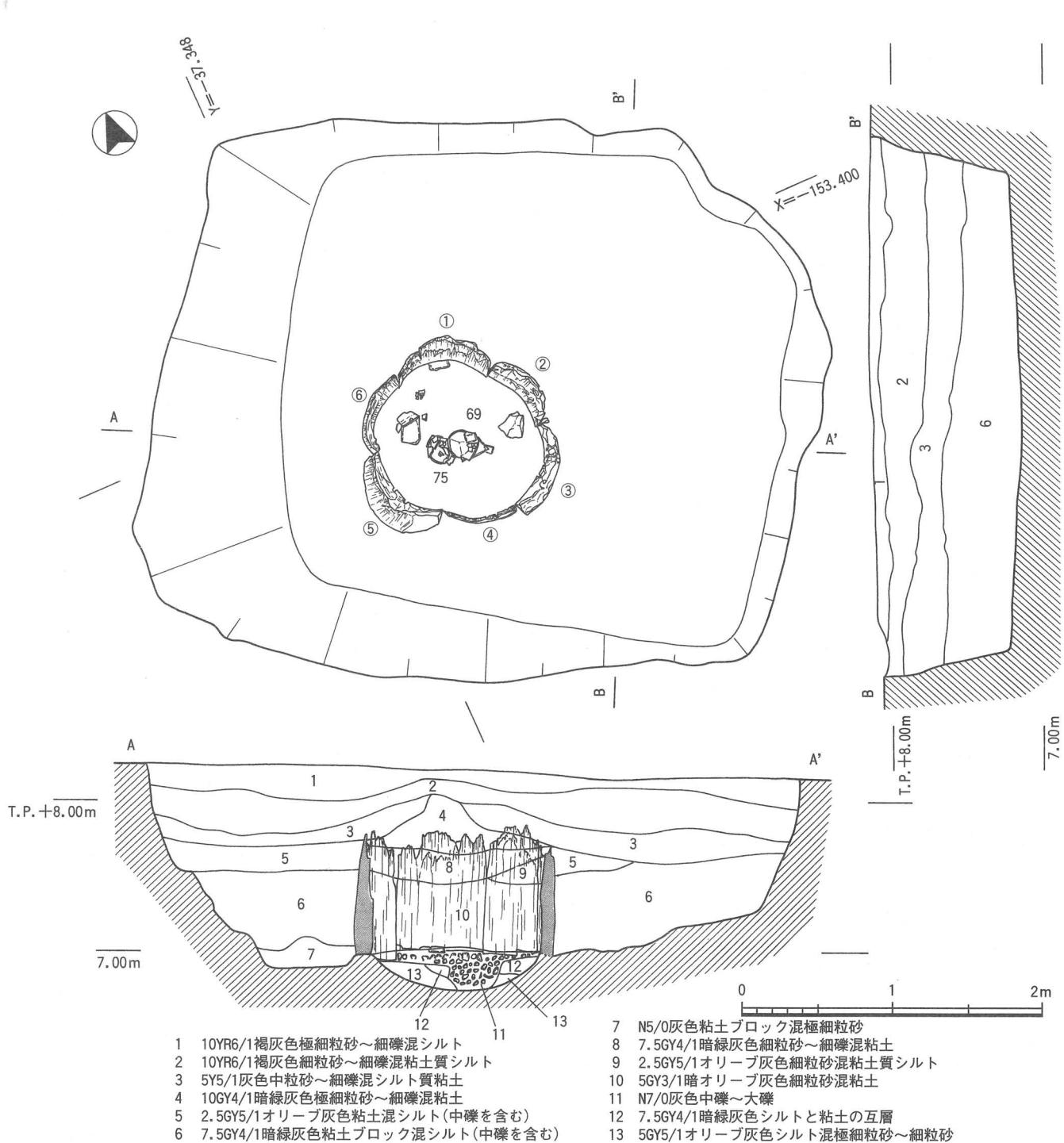
1 調査区中央部のⅦ-19-5 F 地区で検出した。第2面の調査の際、溝群の断面観察のため設定したトレンチで存在が確認されたもので、上部が S D 2047 に切られている。円形を呈するもので、径1.03m、深さ0.8mを測る。井戸側には板材が使用されているが、全体にやせており薄くその構造も明確でない。埋土は3層から成る。井戸側内から瓦器碗の出土が確認されたが、実測後に壁面が崩壊したため遺物は取り上げられなかった。時期的には、12世紀後半前後が推定される。遺物の時期からみて本来の構築面は第2面が想定される。

S E 3003 (第42~50図、図版一七~一九・六一~六五)

4 調査区東部のⅧ-17-10 F 地区~Ⅷ-22-1 F 地区で検出した。S D 3060埋没後に構築された井戸で、形式的には丸太分割削抜き井戸に分類される。掘方平面はほぼ隅丸方形を呈し、規模は長辺4.35m、短辺3.75mを測る。断面は逆台形を呈し、検出面からの深さは1.35mを測る。底部は下位の湧水層(N R 4001)に達し、調査中も絶え間なく水が湧いていた。井戸側は分割した丸太の辺材6枚(井戸側①~⑥)を立て並べて一周させたもので、上部径1.25~1.30m、内底径1.00~1.15mを測る。井戸側材は高さ70~86cm、幅50~65cmを測り、厚さ最大15cmで、上部は朽ちて序々に厚みを減じている。枠内底部は石敷きで、直径3~8cmの石を5~20cmの厚さに敷きつめているが、この下部にも同様の石を充填した南北1.0m、東西45cm、深さ20cmを測る掘り込みがみられた。掘方内の埋土は1~7層で、3・4層を除けばほぼ水平に堆積している。一方、井戸側内埋土は8~10層で、8層が人為的に埋められた層で、9・10層は植物遺体を含む自然堆積層である。



第41図 S E 3002平断面図



第42図 S E 3003平断面図

井戸側の樹種はスギである。復元すると直径0.8~1.0mを測る丸太となる。井戸側③に2箇所、井戸側⑥に1箇所、縁辺部分に枘穴が見られ、井戸側③には内部に鉄片が遺存している。また井戸側⑥の枘穴内部にも鉄錆の付着が認められる。これらの加工は井戸の機能とは無関係と思われる。井戸側材の木取りに関しては、井戸側①・②・③において接合関係が認められた(第50図)。井戸側②・③が構築状態のまま横並びに、また井戸側②+③の基底面と井戸側①の基底面が連続する。組み合わせると全長約1.7mの丸太辺材となる。井戸側②+③と井戸側①の切断において